Ⅱ．遺跡調査の概要

調査の理由と工程

1.発掘調査

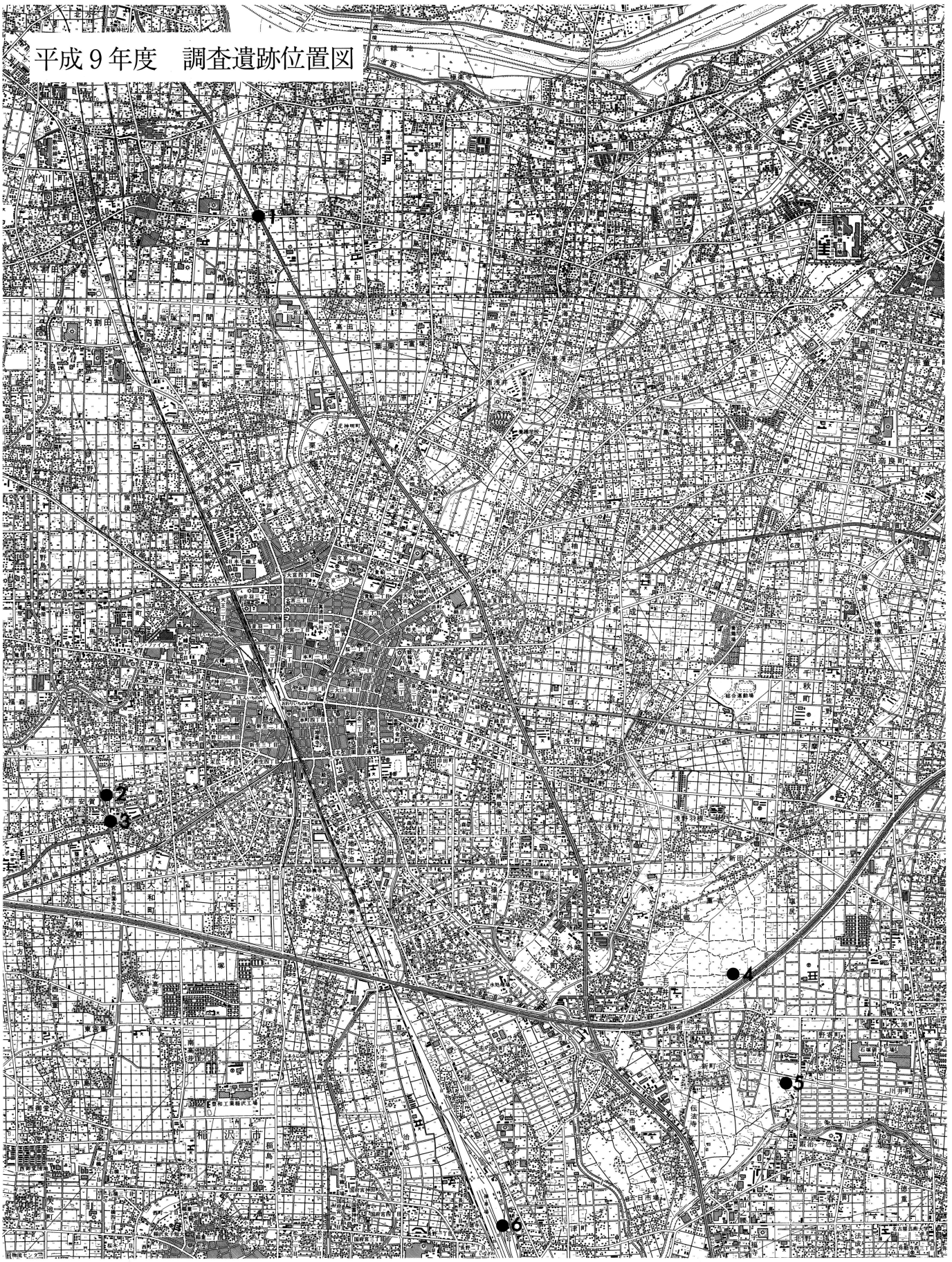
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積（㎡）		調査の期間	調査担当者
建設省（愛知国道）	東海環状自動車道建設	上品野遺跡（3,640㎡）	A	540	97.7-97.9	北村・小澤・後藤
			B	1,700	97.9-97.11	北村・小澤・後藤
			C	1,400	97.10-98.2	北村・小澤・後藤
		長谷口遺跡		100	97.6	北村・小澤・後藤
		巡間Ａ遺跡		100	97.6	北村・小澤・後藤
		凧山窯跡		100	97.6-97.7	北村・小澤・後藤
		瓶子窯跡		200	97.7-97.8	北村・小澤・後藤
（名四国道）		御船城跡		200	97.5	北村・小澤・後藤
建設省（名四国道） 日本道路公団（名古屋建設局）	国道23号線栄交差点立体化事業・第二東海自動車道建設	大脇城跡（2,800㎡）	A	1,400	97.4-97.8	藤井・中野
			B	1,400	97.4-97.8	藤井・中野
	国道23号名四バイパス６線化・第二東海自動車道建設	福池古窯		600	98.1-98.2	藤井・松田
日本道路公団（名古屋建設局）	第二東海自動車道建設	川原遺跡（11,300㎡）	A	700	97.4-97.5	藤井・赤塚・服部・
			B	3,000	97.4-98.3	春日井・秋田・
			C	2,600	97.4-98.3	飴谷・中野・
			D	3,000	97.4-98.3	鈴木・加藤・
			E	2,000	97.12-98.1	樋上・木下
		郷上遺跡（20,350㎡）	A	3,100	97.4-97.9	赤塚・鈴木・加藤
			B	2,200	97.10-97.12	赤塚・樋上・木下
			C	4,000	97.4-97.10	赤塚・樋上・木下
			D	3,800	98.1-98.3	赤塚・酒井・伊藤
			E	3,600	97.4-97.8	赤塚・酒井・伊藤
			F	3,650	97.9-97.12	赤塚・酒井・伊藤
		矢迫遺跡		3,500	97.12-98.3	赤塚・鈴木・加藤
		今町遺跡		200	97.6	赤塚・服部
		郷上北遺跡		200	97.5	赤塚・鈴木
県土木部（道路建設課）	国道248号線建設	郷上北遺跡		100	97.5	赤塚・鈴木
日本道路公団（名古屋建設局） 県土木部（道路建設課）	東海北陸自動車道建設	八王子遺跡	Lb	247	97.5-97.7	黒田・石黒・浅井
		苅安賀遺跡（1,732㎡）	A	448	97.4-97.9	黒田・石黒・浅井
			B	435	97.7-97.10	黒田・石黒・浅井
			C	286	97.5-97.9	黒田・石黒・浅井
			D	563	97.7-97.10	黒田・石黒・浅井
日本道路公団（名古屋管理局）	名神一宮Ｐ．Ａ．建設	三ツ井遺跡（5,977㎡）	Aa	250	97.4-97.5	大崎・早野
			Ab	1,547	97.8-97.12	大崎・山本・田中
			B	2,580	97.4-97.8	大崎・山本・田中
			Ca	800	97.11-98.1	大崎・山本・田中
			Cb	800	98.1-98.3	大崎・山本・田中
住宅・都市整備公団（住宅開発部 市街地開発課）	中丸町三丁目住宅建設	志賀公園遺跡（4,000㎡）	E	1,450	97.4-97.9	北村・西原・永井
			F	1,200	97.10-97.12	北村・西原・永井
			G	1,350	98.1-98.3	北村・西原・永井

調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積（㎡）	調査の期間	調査担当者
住宅・都市整備公団（尾張西部特定再開発事務所）	尾張西部都市拠点地区土地区画整理	下津北山遺跡	2,100	97.11-98.3	大崎・早野
県土木部（道路建設課）	国道363号線道路改良	上品野遺跡	360	97.7-97.9	北村・小澤・後藤
		上品野蟹川遺跡	100	97.4	北村・小澤・後藤
		桑下城跡	150	98.2-98.3	北村・小澤・後藤
		桑下東窯跡	100	98.2-98.3	北村・小澤・後藤
		上品野西金地遺跡	100	98.2-98.3	北村・小澤・後藤
県土木部（道路建設課）	県道江南木曾川線	大毛池田遺跡	150	97.11	大崎・早野
県土木部（河川課）	総合治水対策特定河川（五条川）改修	清洲城下町遺跡（1,800㎡）	A 700	98.1-98.3	黒田・石黒・浅井
			B 500	97.11-98.3	黒田・石黒・浅井
			C 600	97.11-98.2	黒田・石黒・浅井
県土木部（下水道課）	五条川右岸流域下水道建設	権現山遺跡	1,800	97.7-97.10	大崎・早野
		権現山遺跡範囲確認	200	97.5-97.6	大崎・早野

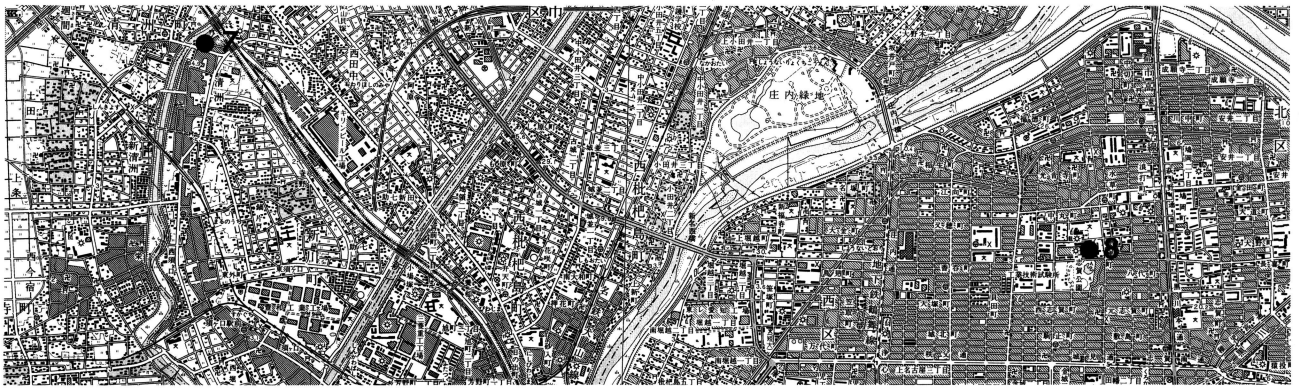
2.整理報告書

調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積（㎡）	調査年度
建設省（名四国道）・日本道路公団	伊勢湾岸道路建設	ＮＡ335古窯跡群	250	平成８年度
建設省（愛知国道）	国道302号線建設	高針原１号窯跡	（整理）	平成８年度
		鴻ノ巣古窯跡	（整理）	平成８年度
		細口下１号窯跡	（整理）	平成８年度
日本道路公団 県土木部（道路建設課）	東海北陸自動車道建設	東新規道遺跡	7,294	平成７年度
		東苅安賀道遺跡	4,424	平成７年度
		門間沼遺跡	（整理）	平成６・７年度
県土木部（道路建設課）	県道馬飼井堀線建設・日光川上流流域下水道建設	一色青海遺跡	23,500	平成５－８年度
県土木部（管理課）	豊橋土木事務所庁舎新築	吉田城遺跡	800	平成８年度
愛知県教育委員会（文化財課）	新資料館建設	朝日遺跡	（整理）	平成７・８年度

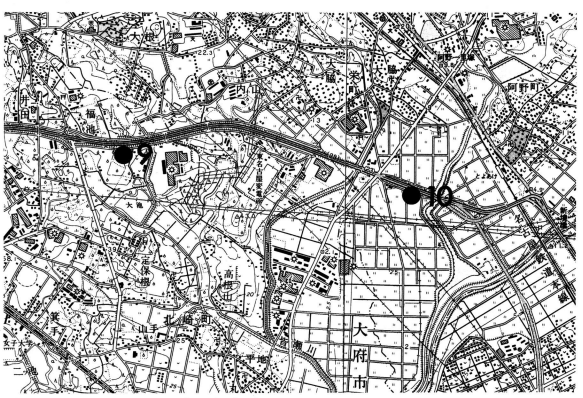
平成９年度　調査遺跡位置図



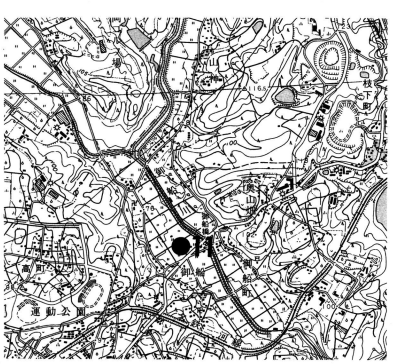
1.大毛池田遺跡　2.八王子遺跡　3.苅安賀遺跡　4.三ツ井遺跡　5.権現山遺跡　6.下津北山遺跡



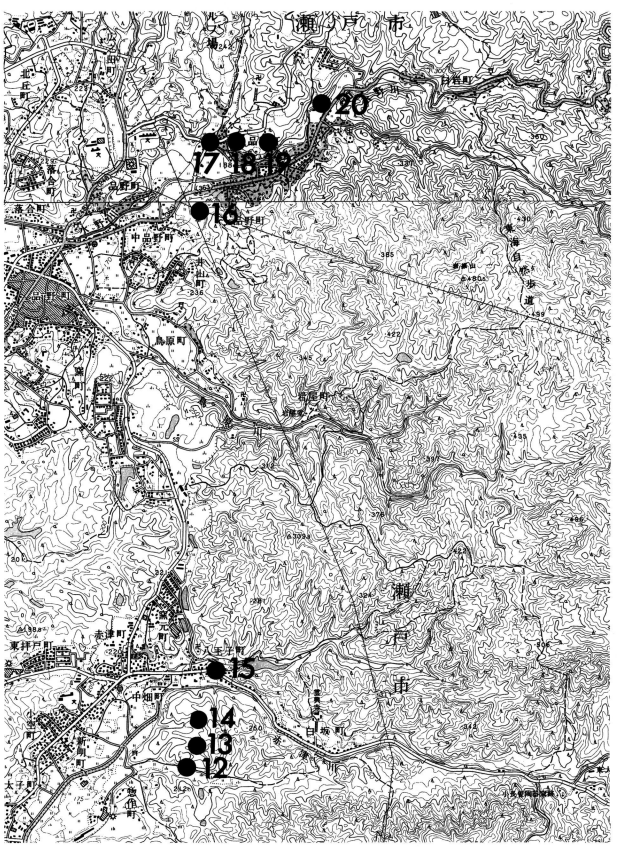
7.清洲城下町遺跡　8.志賀公園遺跡



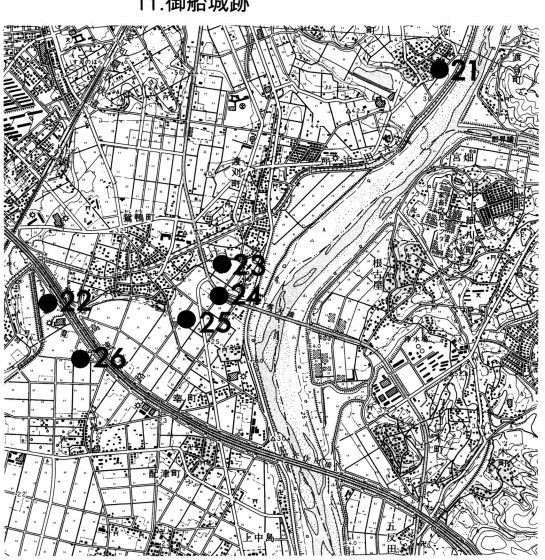
9.福池古窯跡　10.大脇城跡



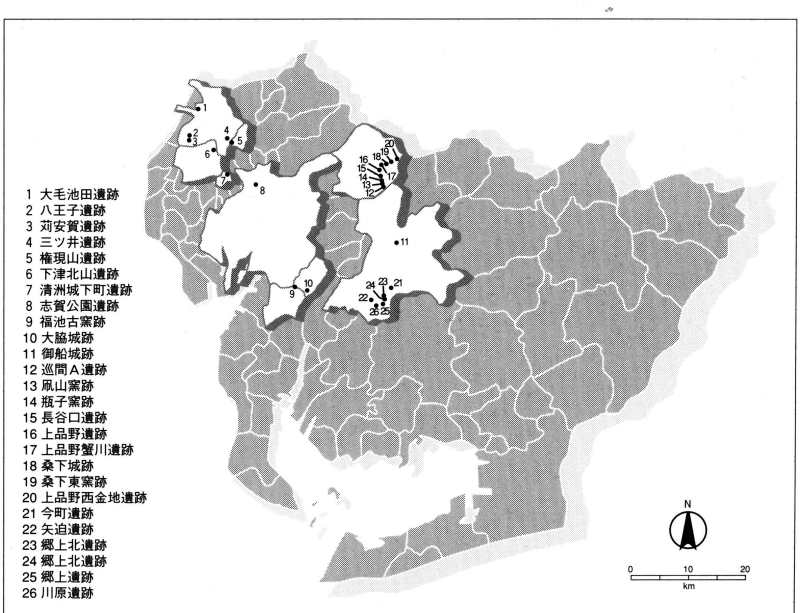
11.御船城跡



12.巡間Ａ遺跡
13.凧山窯跡
14.瓶子窯跡
15.長谷口遺跡
16.上品野遺跡
17.上品野蟹川遺跡
18.桑下城跡
19.桑下東窯跡
20上品野西金地遺跡



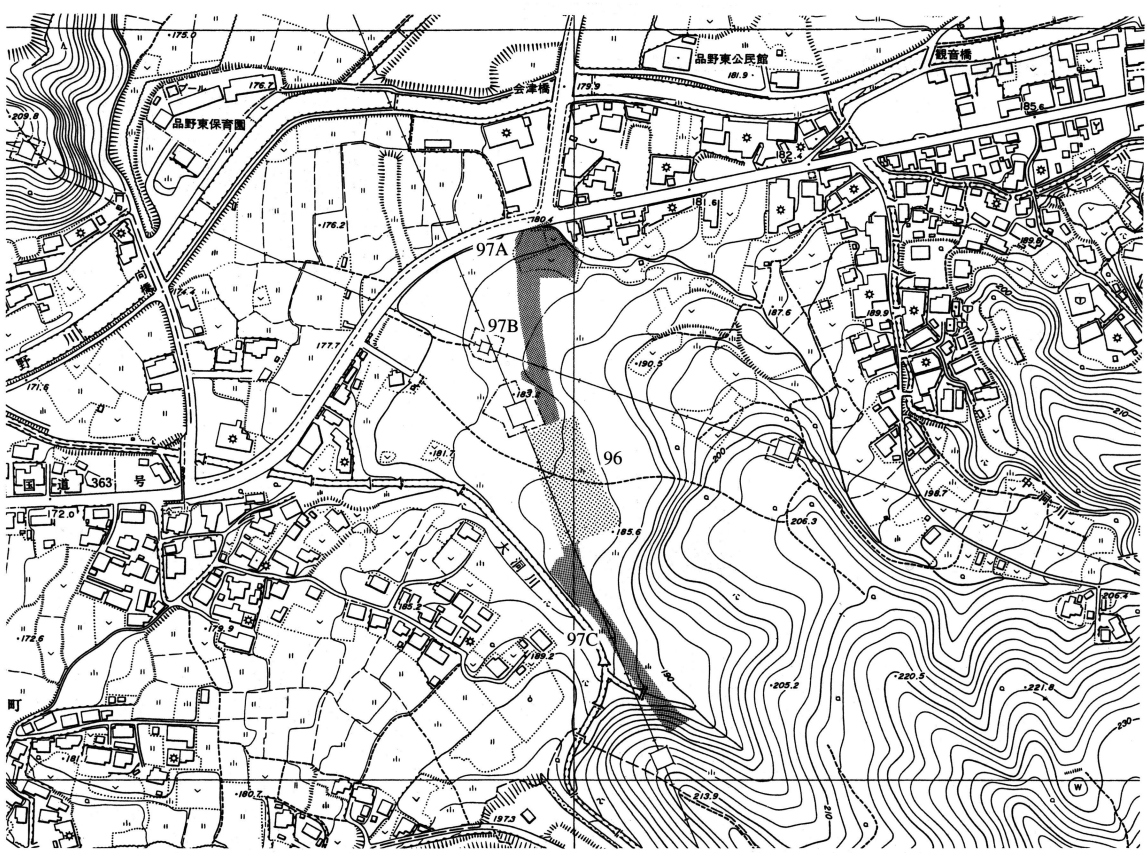
21今町遺跡　24.郷上北遺跡
22.矢迫遺跡　25.郷上遺跡
23.郷上北遺跡　26.川原遺跡



上品野（かみしなの）遺跡

調査の経過　上品野遺跡（瀬戸市上品野地内）は、瀬戸市の北東部に位置する品野盆地を北西に望む丘陵斜面から段丘端部に立地する。発掘調査は、昨年度より東海環状自動車道建設に伴う事前調査として実施している。昨年度の調査では、縄文時代後・晩期かと考えられる「ドングリピット」４基をはじめ中世の溝・土坑と縄文時代から近世にかけての遺物が出土する大きな谷状地形が検出された。本年度の調査は、建設省ならびに愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、東海環状線関連3,640㎡、国道363号線拡幅関連360㎡の総計4,000㎡をＡ～Ｃの３調査区に分けて平成９年８月より平成10年３月にかけて実施した。以下、各調査区ごとにその概要を記す。

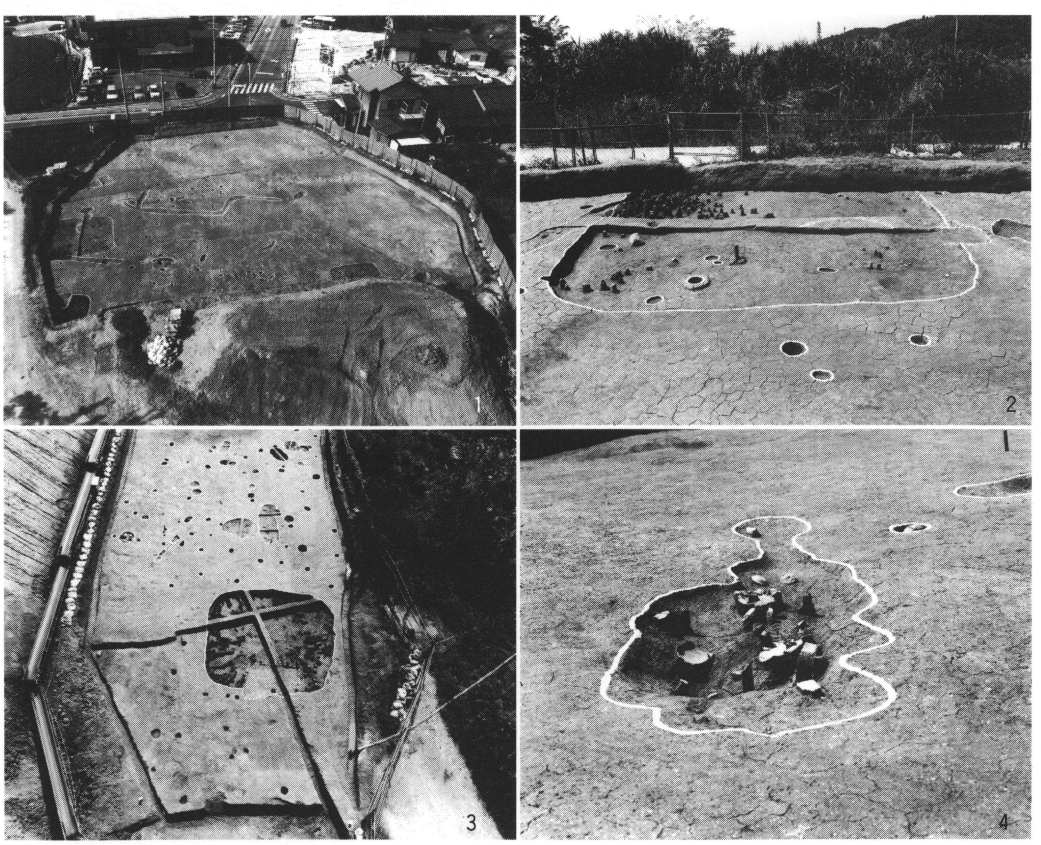
遺跡の基本層序　Ａ・Ｂ区において、基本層序は上からⅠ層・現耕作土、Ⅱ層・旧耕作土ないし開墾や造成による搬土、Ⅲ層・黒茶褐色土（遺物包含層）、Ⅳ層・赤褐色ないし黄褐色粘質土（段丘面：井関弘太郎氏の御教示によれば名古屋台地の熱田層に相当する）の順で、遺構はいずれもⅢ層の直下、Ⅳ層上面で検出された。Ｃ区では、現地表面から深さ３ｍほどが近代の造成に伴う搬土で、造成により旧地形が大きく改変されており、搬土ないし工事による撹乱面直下が遺構検出面となった。



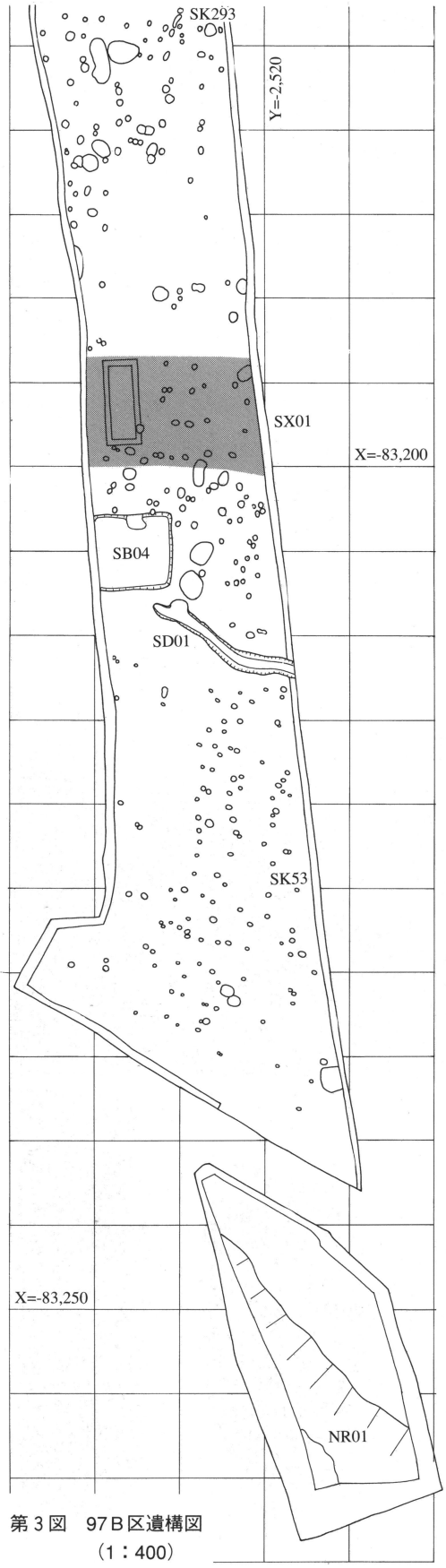
第１図　調査区位置図（１：5000）



第２図　97Ａ区遺構図（1：400）



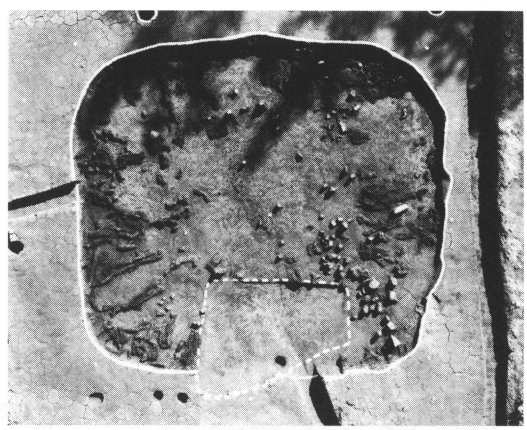
1 97Ａ区全景（南から）　2 97Ａ区SB01（東から）　3 97Ａ・Ｂ区SB02（北から）　4 97Ａ区SK64（北から）



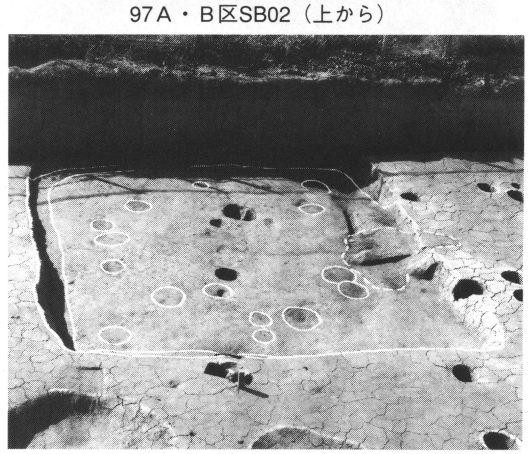
第３図　97Ｂ区遺構図
（1：400）



97Ｂ区全景（南から）



97Ａ・Ｂ区SB02（上から）



97Ｂ区SB04（東から）



97Ｂ区SD01（東から）

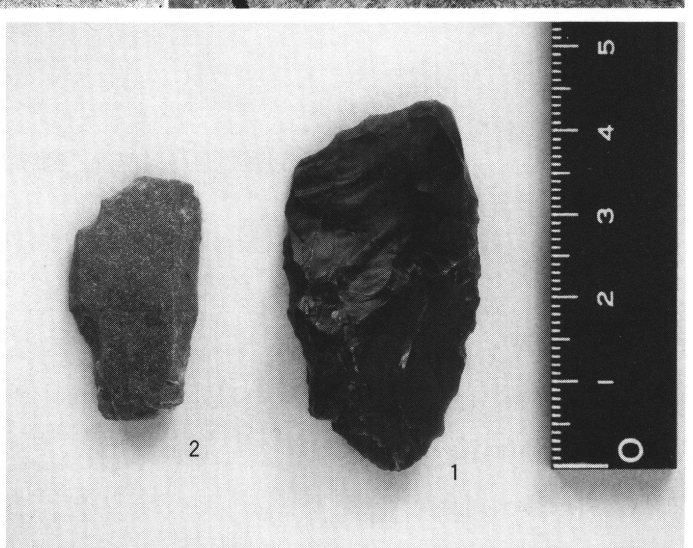
A区の概要　A区は遺跡が立地する段丘面の端部で、全調査区の北端部分に当たる。調査直前の地形は、南より北に下がる三段の水田面となっているなど後世の造成が進んでいた。遺構としては弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居4棟、その内の1棟（SB02）は調査区の南西隅に位置し、住居の一部分で炭化材が出土する焼失家屋であった。この他には平安時代の土坑が数基、鎌倉時代の溝・土坑多数が検出された。また遺物包含層からは、室町から戦国時代の土器・陶磁器および中国磁器の出土をみた。中国磁器はいずれも碗類で、その出土量は尾張平野の中世遺跡と変わらないとの印象を受ける。いわゆる古瀬戸の窯業地の集落に中国磁器の碗類が数多くもたらされていることが注目される。　（北村和宏）

B区の概要　B区はA区の南西部分に接し96年度調査区の北側に位置する。検出した遺構は、住居跡、土坑、溝、柱穴等である。主な遺構として、旧石器時代の石器と剥片が集中して出土したSX01、弥生時代末から古墳時代初にかけての住居1棟（SB02）、奈良時代末から平安時代にかけての住居1棟（SB04）と平安時代の土坑2基（SK53・SK293）と溝1条（SD01）を検出した。

SX01は、B区のほぼ中央で、幅5m、地表面からの深さ1.2mから1.5mを測り、西側に傾斜した浅い凹地状を呈し、段丘面上に立地する。層位はⅣ層の赤褐色粘質土を基準とし、にぶい黄褐色土、褐色土（風化した花崗岩を多く含み粘性強い）を埋土とする。遺物



上左　97B区SX01（東から）
上右　97B区SX01旧石器出土状況

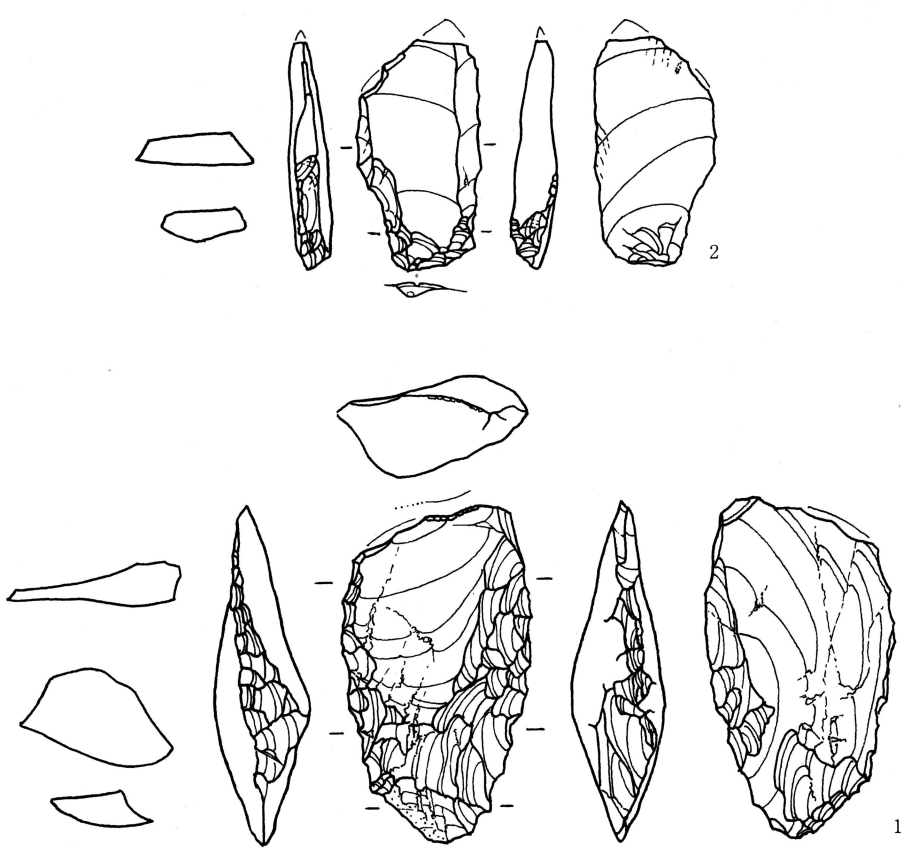


97B区SX01出土の台形石器

はにぶい黄褐色土からの出土が多い。台形石器が２点、掻器２点、使用痕のある剥片３０点程、その他200点程が出土した。出土した石器、剥片、石核の石材は、チャート、サヌカイト、黒曜石、ガラス質黒雲母石英安山岩（通称下呂石）、水晶の５種類がある。台形石器は、１はチャートで長さ4.5㎝、最大幅2.4㎝、最大厚1.3㎝を測る。２は下呂石で、先端が欠損しているが現存長2.9㎝、最大幅1.6㎝、最大厚0.5㎝を測る。出土した剥片は横長剥片で、石核の平面形態も横長剥片をとるために適した菱形状を呈しており、これらの資料から台形石器の製作過程を知ることができるものと思われる。

弥生時代後期から古墳時代初め頃の住居（ＳＢ02）はＢ区の北西隅に位置し、Ａ区の南西部分と接している。Ａ区の調査時に住居の北西部分を調査し、焼失家屋であることを確認していた。ＳＢ02は東西5.3m、南北4.9mを測る隅丸方形の竪穴住居で、住居内からは柱などの建物の一部を炭化した状態で検出した。住居中央部分では炭化材はみられず、東半分では柱などの炭化材が良好な状態で確認でき、二本一組で使われていたかのような出土状況を示す部分もある。遺物は床面ではほとんどみられず、僅かに残った甕や壺の破片から廻間Ⅱの時期と思われる。

奈良時代末から平安時代にかけての住居（ＳＢ04）はＢ区のほぼ中央でＳＸ01の北側に位置する。ＳＢ04は東西4.5m、南北4.55mを測る方形の竪穴住居で北壁の中央からは竈を



第４図　97Ｂ区SX01出土の台形石器（１：１）　（斎藤基生氏による原図をトレース）

検出した。北壁沿いでは確認できなかったが住居内の壁際には周溝が巡っており、主柱穴も４本検出した。竈の残存状況は良好で東西97㎝、南北105㎝を測る。しかし両袖部分についてははっきり確認できなかった。焼土層と炭化物層が竈の上部を覆っており、焼土層や炭化物層からは土師器の甕の破片が出土した。竈の前には北西隅に向かう溝が掘られている。また南東隅からは炭化した板材が出土した。遺物は竈と床面から出土し土師器の甕や須恵器の杯などから折戸10号窯式の時期と思われる。平安時代の主な遺構として、土坑（ＳＫ53・ＳＫ293）と溝（ＳＤ01）がある。ＳＫ53はＢ区のやや南東寄りで、径50㎝のほぼ円形を呈し検出面からの深さ54㎝を測る。埋土中から黒笹90号窯式の時期と思われる長頸瓶の底部が出土し、基底部には根石が１点据えられていた。ＳＫ293はＢ区の北東に位置し、長径70㎝、短径65㎝の方形状を呈し、検出面からの深さ15㎝を測る。基底部には４点の石が据えられ、その４点の石の中央に折戸53号窯式の時期と思われる碗、皿、長頸瓶がつぶれた状態で出土した。ＳＤ01はＢ区の中央で、東西方向から途中で北西方向に曲がった溝で長さ９ｍ、幅1.4ｍを測る。溝の中からは折戸53号窯式の時期と思われる碗・皿が多数出土し、一部には「吉」や「長」の墨書が見られる。（小澤一弘）

Ｃ区の概要　Ｃ区は大洞川の北東側で全調査区の南西端部分、96年度の調査区の南西側に位置する。造成による地形の改変で現地表下３ｍより検出した遺構は池、谷状地形を流れる自然流路である。Ｃ区南側の池（ＳＧ01）の埋土は泥炭層である。この泥炭層中には薄い砂層が何層も水平堆積し、泥炭層上端部からは灰釉系陶器や古瀬戸の水滴が出土したが泥炭層は基本的には無遺物層である。また池の底と思われる青灰色シルト層直上より弥生時代の土器が出土した。青灰色シルト層の下は拳大からなる砂礫層である。谷状地形を流れる自然流路（ＮＲ02）からは弥生時代から近世にかけての土器、陶器が出土した。谷には泥炭が堆積し、この泥炭層が何度も浸食を受け部分的には撹乱状態となっていた。なお泥炭層下部よりパレス土器が出土した。（後藤英史）

まとめ　本年度の調査成果としては、旧石器時代の台形石器の出土が特筆される。後期旧石器時代初頭に位置づけられる台形石器の出土により、瀬戸市域のみならず県内の後期旧石器時代では最も古い遺跡になるとともに、尾張地域の歴史が後期旧石器時代初頭まで遡ることが判明したのである。また剥片は横長剥片で200点程出土しており、今後の整理、研究により、台形石器の製作過程が復元できるものと思われる。

９６年度の調査では縄文時代後・晩期と中世の遺構が検出されていたが、本年度の調査によって、新たに旧石器時代、弥生時代後期の住居跡、奈良時代から平安時代にかけての住居跡、平安後期の溝、土坑、根石のある柱穴、平安末から鎌倉時代の土坑、溝、柱穴等の遺構を検出した。この他に遺構は検出していないが、室町時代から戦国時代にかけての遺物も出土していることなどから、丘陵斜面から段丘端部にかけて、各時代毎に集落が営まれてきたようである。（北村・小澤・後藤）

大脇城跡（おおわきじょうあと）

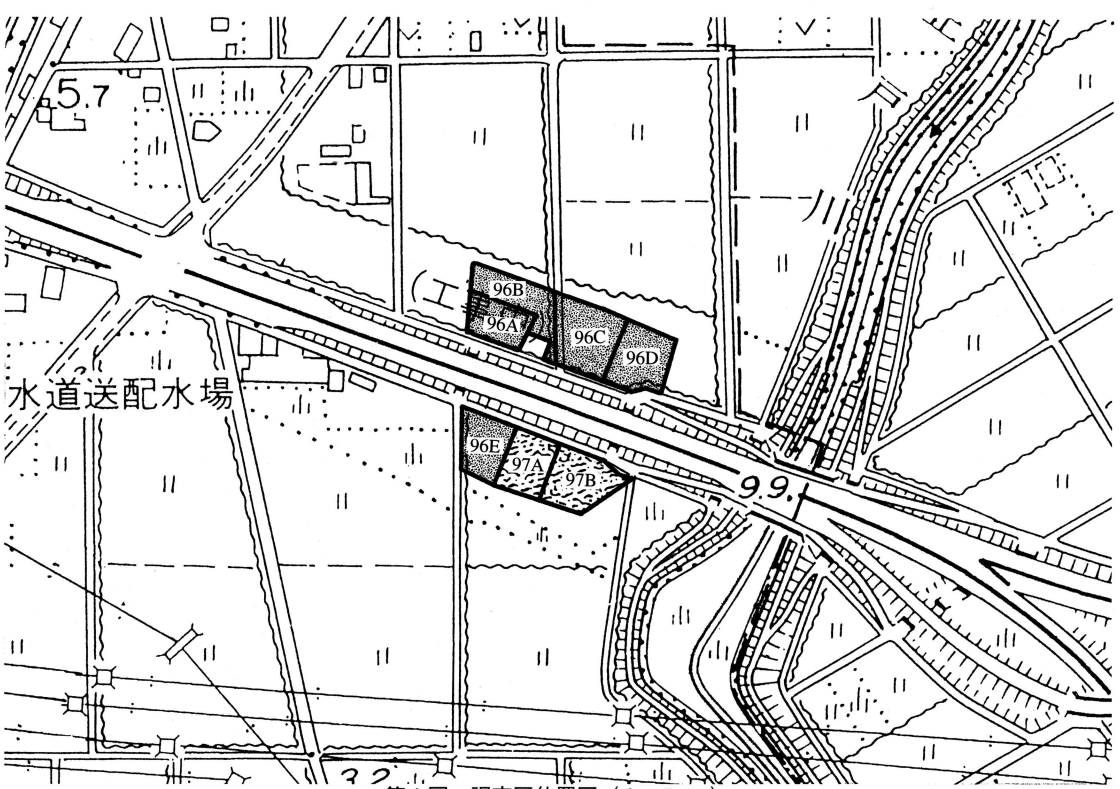
調査の経過　大脇城跡は、豊明市栄町梶田及び元屋敷地内に所在し、かつての尾張と三河の国境を流れる境川の一支流である正戸川右岸の平坦な沖積地に位置する城館跡を中心とする16～17世紀の遺跡である。耕地整理された現在の標高は４ｍ前後であるが、遺構検出面の標高は３ｍ前後を測る。

発掘調査は、第二東海自動車道の建設に伴う事前調査で、建設省及び日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、1996年８月～1997年８月に実施した。

今年度は、国道23号線（名四国道）の南側において2,800㎡を２区（97Ａ・97Ｂ）に分けて調査を行なった。

調査の概要　昨年度の調査では、15世紀末頃～17世紀中頃の時期の溝、井戸跡、堀立柱建物跡、土坑などが検出された。とくに96Ａ区～96Ｄ区にかけて検出された幅2.5ｍ前後、深さ1.8ｍ前後の大溝は、断面の形状が戦国期の城館に特有な「薬研堀」状を呈している。また、大溝の北側においてはほとんど遺構が認められないのに対して、南側では多くの遺構が展開する。これらの点から、この大溝は城館を区画する「外堀」的なものと推定された。

大脇城跡は、国道23号線（名四国道）の建設や耕地整理が行なわれる以前に「土塁」状の高まりが確認されている。さらに、地籍図で土塁跡推定地を含む部分に方形の区画が認められることから、97Ｂ区は大脇城の中心部にあたると想定された。現に、97Ｂ区で検出されたＳＤ01・07・12は、城館の主郭を区画する堀と考えられる。



第１図　調査区位置図（１：5000）

Ｌ字状をなすＳＤ01の西側部分が、幅約４ｍ、深さ1.5ｍ前後、「箱形」状を呈するのに対し、南側部分は、幅約5.5ｍ、深さ２ｍ前後、「土橋」と考えられる開口部を有するほか、溝底に湧水施設とみられる大型土坑列が確認された。溝の規模・形状から南側を正面と想定したい。ＳＤ０１は地籍図で確認された方形区画の外角線と合致する位置にあたる。ＳＤ07は、幅約３ｍ、深さ1.1ｍ前後を測り、「箱形」状を呈す。ＳＤ12は、幅約3.5ｍ、深さ1.7ｍ前後を測り、「薬研堀」状を呈す。ＳＤ07・12間の空間は開口部と考えられる。また、南側と東側の開口部で、溝の端部がいずれも食い違い状を示す。

今年度の調査区で井戸が１３基検出された。そのうち、主郭部分は４基を数える。構造物が残存していた井戸は２基確認されたが、いずれも主郭内である。特に97Ｂ区ＳＥ07の構造物は、上段が曲物、下段が桶となっている。

溝・井戸以外の遺構としては、礎石・柱痕の検出された柱穴や土坑などがある。土坑のなかには97Ａ区と97Ｂ区の境から集中してみつかった甕を埋設したものや、深さ0.２ｍ前後、一辺１～２ｍの浅い方形土坑がみられる。

出土遺物には、大多数を占める土器・陶磁器類のほかに、木製品（下駄・桶・曲物・箸・独楽・柄杓・建築部材など）、漆製品（椀類）、石製品（五輪塔・砥石・臼・硯など）、銭貨（元佑通宝・元豊通宝・永楽通宝・寛永通宝など）、金属製品（鎌・小柄・柄尻・キセルなど）の各種がある。土器類には、内耳鍋・羽釜・茶釜型・小皿などが、陶磁器類としては、黄瀬戸・志野釉などをはじめとする瀬戸・美濃窯産の各種製品、常滑窯産の甕・壺・鉢類のほかに肥前窯産の碗類、及び若干の中国磁器（青花碗・皿類）がある。これらは概ね15世紀末～17世紀後葉のものである。

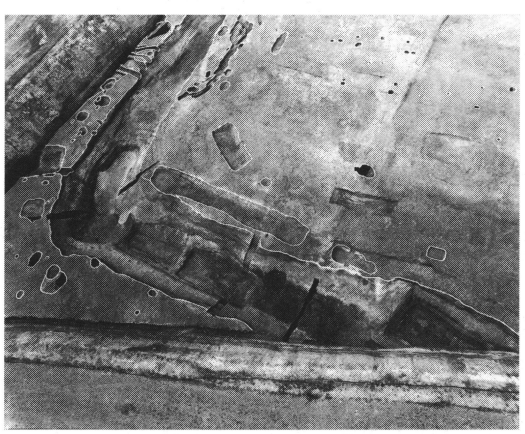


第２図　地籍図と調査区

まとめ

現在の大脇城跡は、後世の開墾・耕地整理などにより一面が水田化され、地表面にその痕跡を留めず、その実態が判然としなかった。しかし、上述の遺構・遺物などからその実態が明確になってきた。また、大脇城の城主とされる梶川五左衛門は、文献資料によれば16世紀中頃～末の武将である。天正四（1576）年銘の護摩札をはじめ、遺構・遺物の年代はこうした記録と特に矛盾するものではない。

大脇城の様相として、堀（所伝を考慮するならば土塁も含む）によって囲まれた方形の城館を中心とし、その周囲に中小の溝によって区画された屋敷地が展開、さらにその外周を「薬研堀」状の大溝が巡るといった状況が復元・想定される。ただ、主郭の基軸と外郭の屋敷地の基軸、大溝の方向が一様でないこと、出土遺物が15世紀末～17世紀後葉と時代幅があること、さらに、「寛文村々覚書」の「古城跡　先年梶川五左衛門居城之由　今ハ畑成」という記述、調査地点付近に存在した大脇村が17世紀末以前に水害対策のために現在の大脇の集落がある高台へ移転したとする伝承などから、大脇城跡が2時期以上に区分される可能性も想定する必要がある。（中野良法）



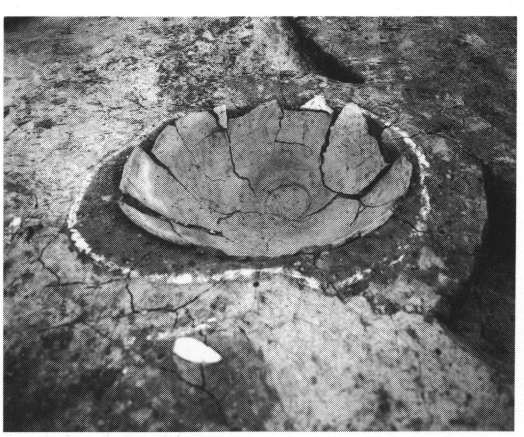
SD01開口部及び湧水施設（97B区）



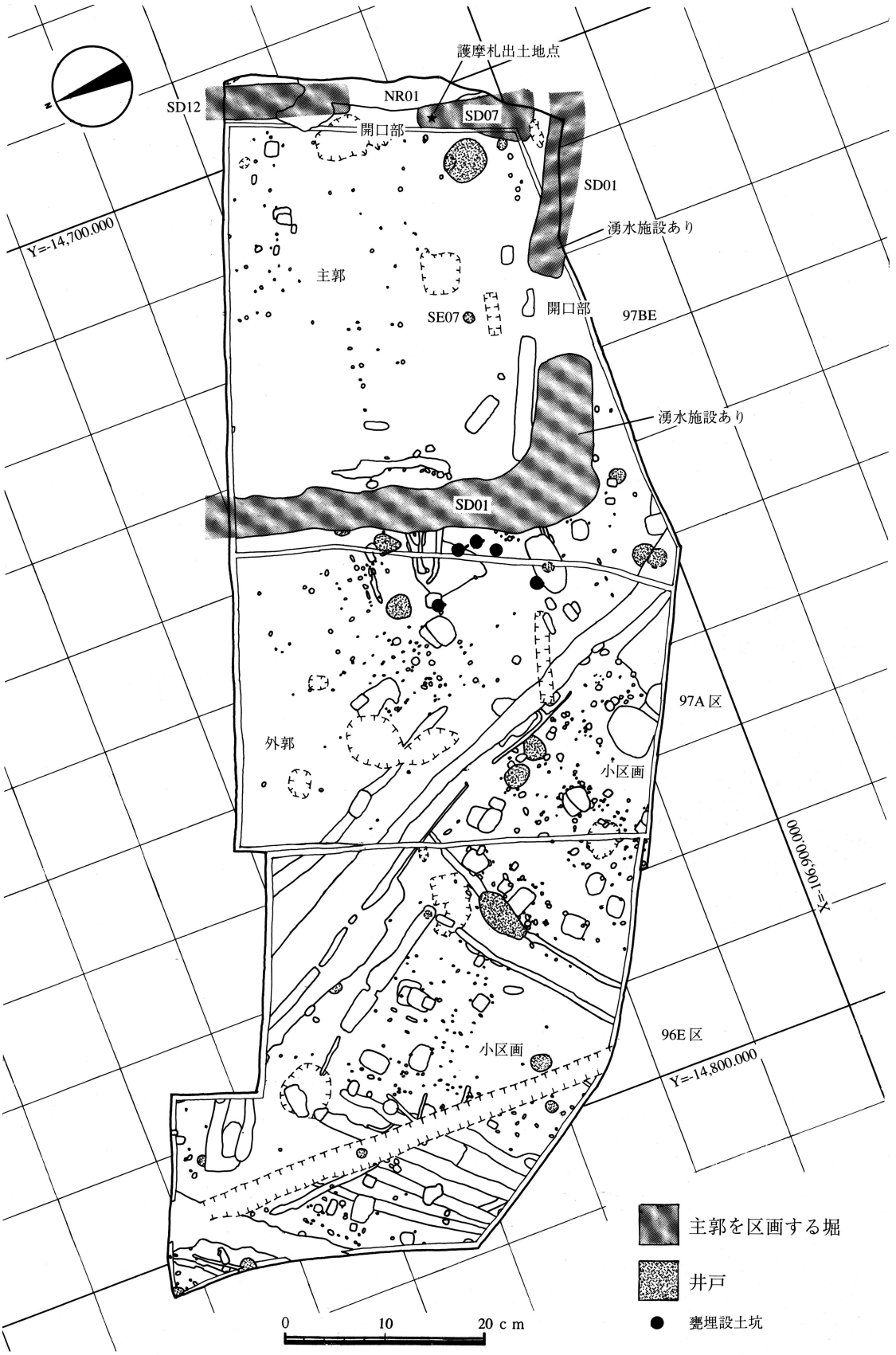
SE07（97B区）



礎石及び柱痕（97A区）



甕埋設土坑（97A区）


護摩札出土地点
SD12
NR01
SD07
開口部
SD01
湧水施設あり
Y=-14,700.000
主郭
SE07
開口部
97BE
湧水施設あり
SD01
97A区
外郭
小区画
X=-106,900.000
96E区
小区画
Y=-14,800.000
主郭を区画する堀
井戸
甕埋設土坑
0
10
20 c m

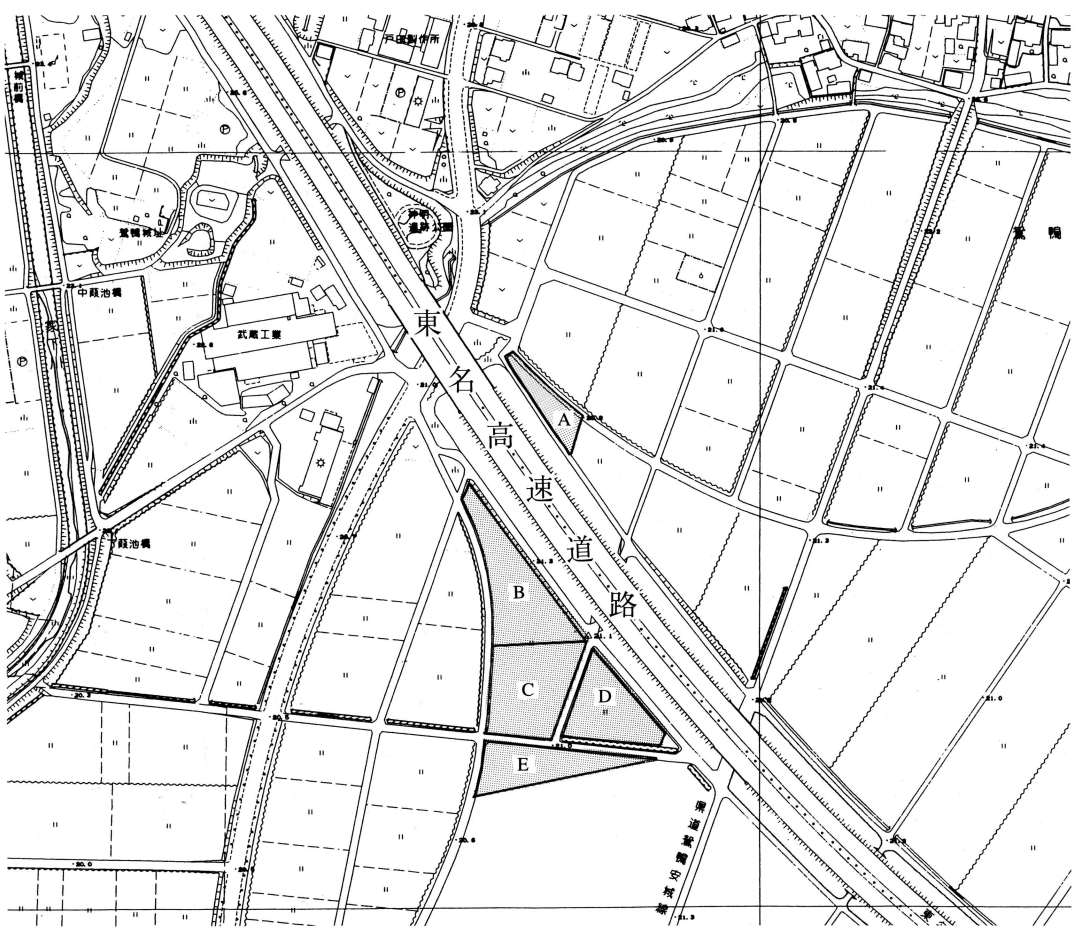
第3図　遺構図（1：600）

川原（かわはら）遺跡

調査の経過　川原遺跡は、豊田市鴛鴨町川原に所在し、矢作川中流域右岸に形成された標高20m前後の自然堤防上に立地している。本遺跡が位置する市域南部は、沖積地にも恵まれ、数多くの遺跡が展開する地域である。周辺には、碧海台地上に位置する弥生時代後期から古墳時代にかけての神明遺跡、矢迫遺跡、そして中世の鴛鴨城跡、また北東部には、沖積地上に広がる古墳時代から江戸時代にかけての郷上遺跡、さらに南西部には、古墳時代中期から戦国時代にかけての本川遺跡が存在している。

今回の調査は、第二東海自動車道の豊田ＪＣＴ建設予定地内の事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成９年４月より実施した。調査面積は、11,300㎡で、Ａ～Ｅの５つの調査区に分けて発掘調査を行った。

調査の概要　本遺跡は、愛知県の遺跡地図には縄文時代晩期の遺跡として登録されている。しかし、今回の発掘調査地点では、縄文時代晩期から中世にかけてほぼ途切れることなく営まれた複合遺跡であることが判明し、特に弥生時代中期から古墳時代にかけて多量の遺物や遺構が確認できた。ここでは大きく次の４期（Ⅰ期：縄文時代晩期～弥生時代中期、Ⅱ期：弥



第１図　調査区位置図（１：5000）

生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良・平安時代、Ⅳ期：中世）に分け、記述を進めていくことにする。（春日井　毅）

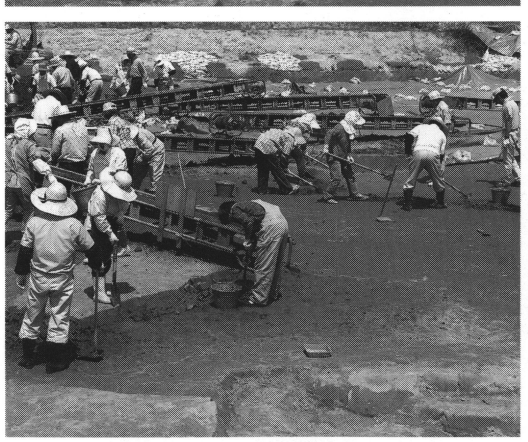
Ⅰ期

Ⅰ期の遺構と遺物は、調査途中にあるため判然としない部分が多いが、縄文時代晩期と弥生時代中期にわけて考えることができる。

縄文時代晩期に関しては、遺物として晩期後半に属する条痕文を施す深鉢形土器片や石匙、石棒（石剣？）など若干の石器が散見できるのみであり、現状では明確な遺構の存在は確認できていない。

弥生時代中期は、概ね瓜郷式期から古井・獅子懸式期に該当すると考えられる。遺構としては、焼失家屋を含む竪穴住居跡群や方形周溝墓などを検出しており、西三河地方では数少ない当該期の良好な集落遺跡の展開が予測できる。出土遺物も土器を中心として豊富であり、とりわけ、石器の出土量の多さには注目できよう。出土した石器の種類は、打製石鏃、磨製石鏃、石錐、石包丁、磨製石斧、磨製石剣、石錘、砥石、粗製剥片石器など多種にわたり、なかでも多量に出土するフレークや極細粒砂岩ないしは安山岩を利用した粗製剥片石器の存在は集落内部での石器製作を推測させる。（服部信博）





発掘調査風景





ＳＢ201出土弥生土器

II期　　Ⅱ期は、弥生時代後期から古墳時代初頭と古墳時代中期との大きく２つの時期に分けて考えることができ、主な遺構はＢ・Ｃ・Ｄ区を中心に展開している。

弥生時代後期から古墳時代初頭の主な遺構は、墳丘墓４基・主体部３１基・土坑７基・土器集積７ヶ所・方形周溝状遺構１基・墓域を区画すると考えられる大溝がある。

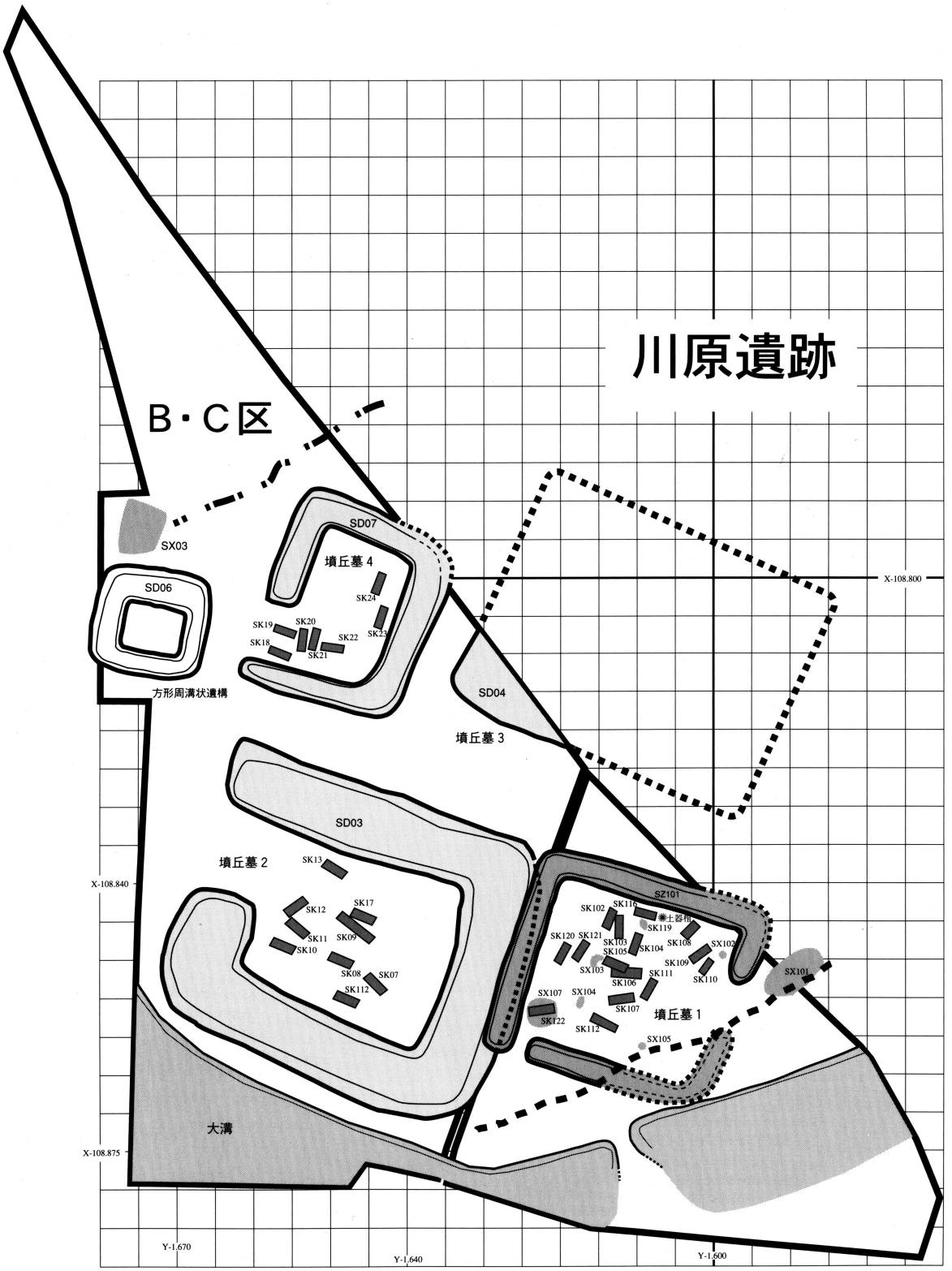
墳丘墓１は、23ｍ×27ｍの規模をもち、東周溝中央部と墳丘の南西部の２ヶ所に開口部をもつ。周溝の幅は約５ｍ、深さ約0.5ｍを測る。周溝で囲まれた墳丘部には15基の主体部が確認され、いくつかの墓壙からは、副葬品と思われる壺や高杯、管玉などが出土した。それらに伴う土器集積ＳＸ102～107も存在する。また土器棺が１基検出された。周溝からは祭祀に用いられたとみられる壺や脚付鉢、管玉などが出土した。この墳丘墓は出土した土器から廻間Ⅰ式併行期に造営されたと思われる。

墳丘墓２は、26ｍ×35ｍの大型墳で、周溝幅は約10ｍと広く、深さ約0.7ｍを測る。墳丘の北西部に開口部をもつ。主体部は９基確認された。中でもＳＫ09は墳丘の中央に位置する墓壙で、もっとも大きな規模（長さ５ｍ・幅1.5ｍ）であることから、この墳丘墓の中心主体と考えて間違いなかろう。この墓壙からは、副葬品と見られる赤彩された小型ワイングラス形高杯が出土した。しかし墳丘部には、墳丘墓１のように墓壙に伴った土器集積は見られなかった。また周溝からは、筒型石製品や管玉・勾玉などの石製品、祭祀的色彩の強い赤彩された高杯などの土器、銅鐸形土製品などが出土した。矢作川中流域では初見となる銅鐸形土製品は、鐸身の下半部と鰭及び鈕部分は欠損していたが、残存部分から14㎝程度の高さと推定される。鐸身の外面には、やや粗雑ではあるが、細かな列点文や、鋸歯文が線刻されており、横帯を表現したと見られる。また舞には型持穴らしき穿孔が施されている。この墳丘墓は、出土した土器から山中式前期併行期に造営された可能性が高い。

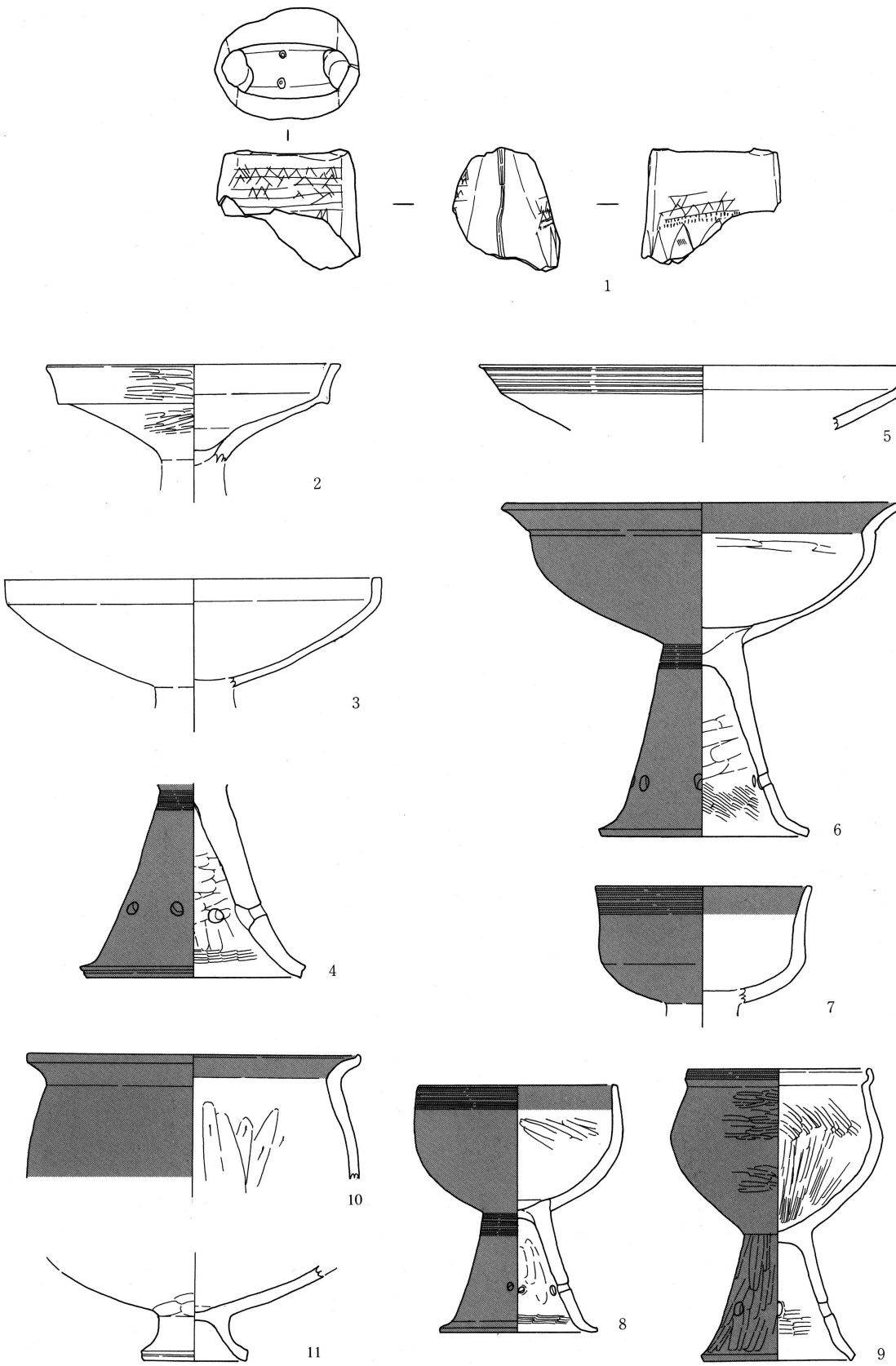
墳丘墓３は、周溝の南西隅を検出したのみで、墳丘部は調査区のさらに北側に展開する。ＳＤ04は、幅６ｍ以上・深さ0.3ｍ以上を測る比較的規模の大きな周溝と見られることから、この墳丘墓は墳丘墓２とほぼ同じ規模と考えられる。出土した土器から山中式中期併行期に属すると思われる。

墳丘墓４は、23ｍ×18ｍの規模をもち、墳丘の南西部に開口部をもつ。周溝の幅は約４ｍ前後、深さ約0.3ｍを測る。周溝で囲まれた墳丘部には６基の主体部が確認されたが、中央付近は攪乱により検出できなかった。また、これらに伴った土器集積や、墓壙からの顕著な副葬品は見られなかった。周溝からはパレス壺・高杯・台付甕などが出土した。出土した土器から山中式中期併行期に造営された墳丘墓と思われる。

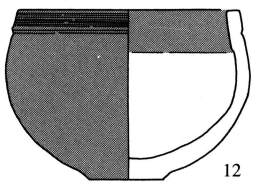
これらの墳丘墓から検出された主体部は、おおむね主軸を東西方向に置くものと、南北方向に置くものとが見られる。特に墳丘墓２の中心主体部の主軸が東西方向であることから、この方向がより意識されていたと考えられる。そして平面形態は、ほぼ長方形であり、断面はやや斜めに立ち上がる箱状の形態である。また墓壙はすべて組合式木棺墓で、埋土の痕跡から木棺は、小口を側板の外側にあて、側板はやや外方向に傾斜し、底板はその外部に置かれる形態であった。



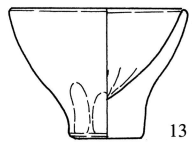
第２図　II期遺構図（１：800）

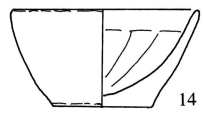


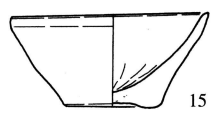
第３図　墳丘墓２出土遺物（１：４、１のみ１：３）

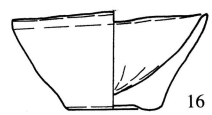


方形周溝状遺構 SD06 南溝

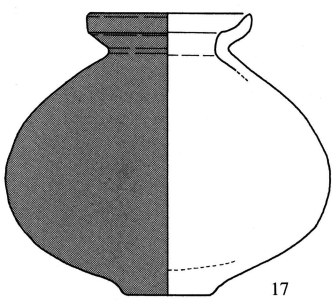




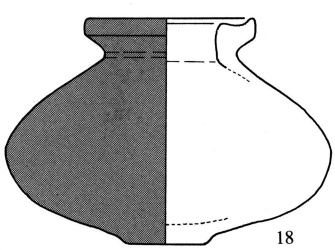




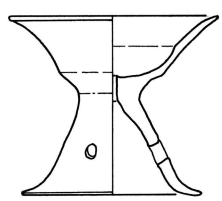
方形周溝状遺構東側土器集積

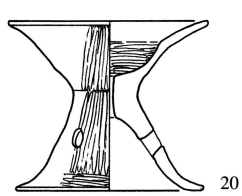


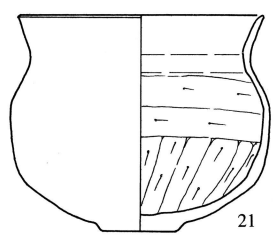
SK116

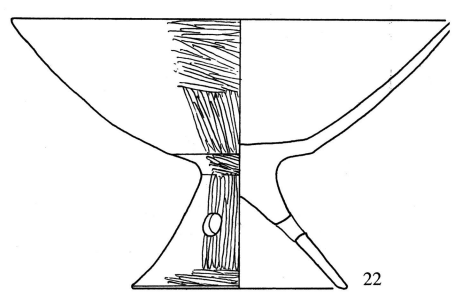


墳丘墓 1 北溝

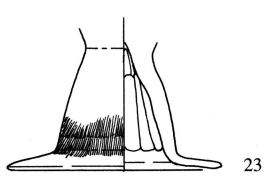




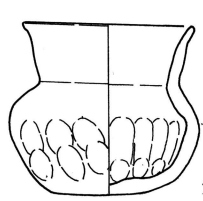


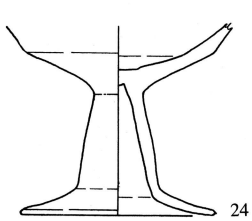


S X102

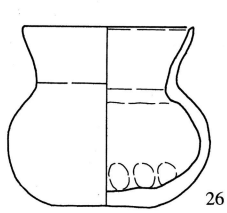


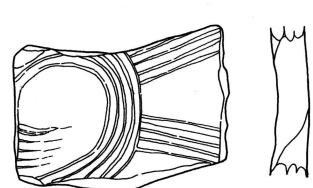
SB01





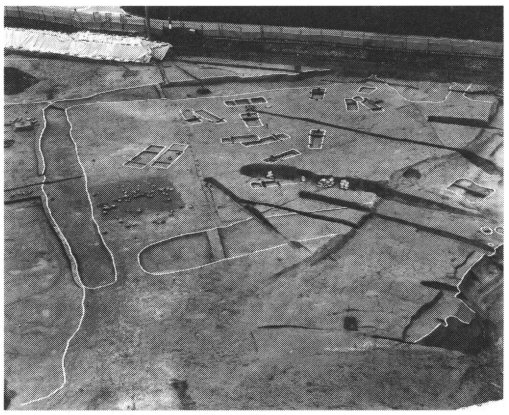
SB02

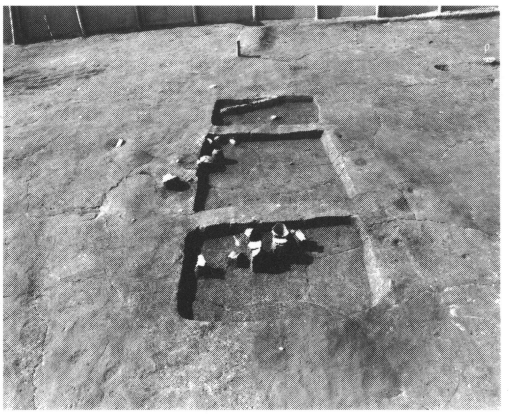




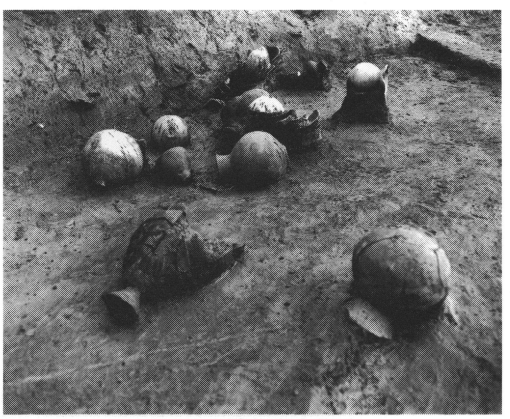
SX104

第 4 図　出土遺物（1 ： 4 、27のみ 1 ： 2 ）


墳丘墓１

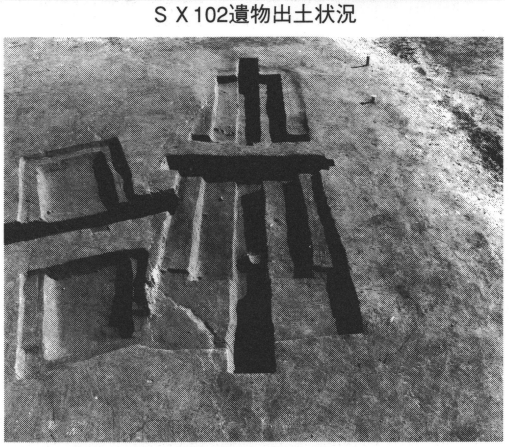

ＳＫ105


ＳＸ101遺物出土状況

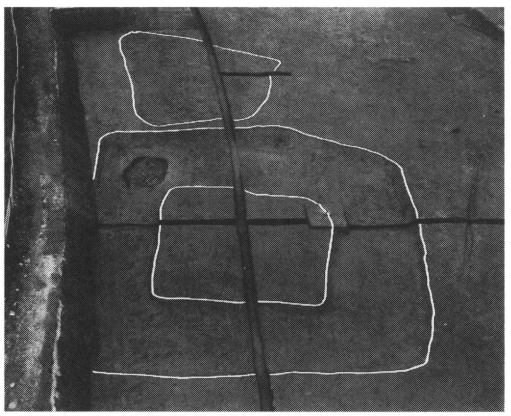

ＳＸ101遺物出土状況


ＳＸ102遺物出土状況


墳丘墓２

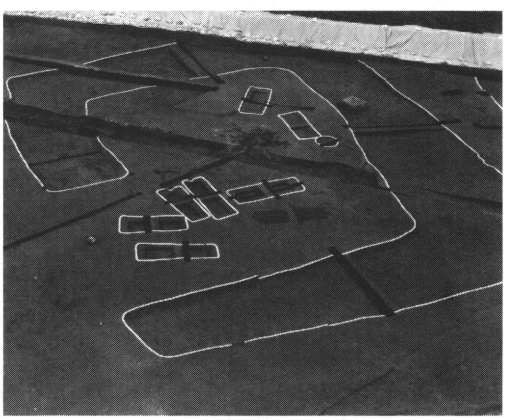

ＳＫ09・ＳＫ17


墳丘墓２遺物出土状況


方形周溝状遺構・ＳＸ03

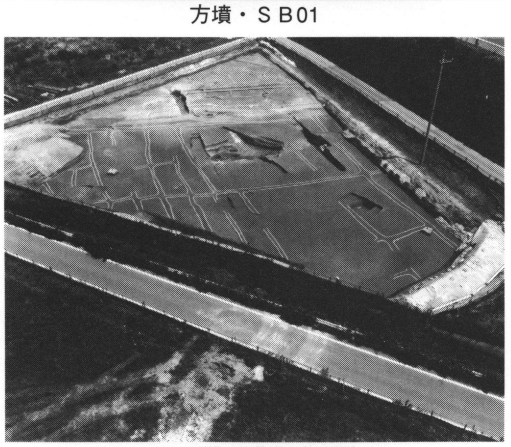

ＳＸ03遺物出土状況


小型鉢出土状況


墳丘墓４


方墳・ＳＢ01


ＳＢ01遺物出土状況


Ⅲ・Ⅳ期の遺構（Ｄ区）


ＳＫ02

方形周溝状遺構は、８ｍ×９ｍの方形壇の周囲を幅４ｍ前後の溝ＳＤ０６が取り囲むものである。方形周溝状の形態は検出された墳丘墓と同様であるが、その規模は著しく小さい。中央の方形壇は、壇上部が平坦であり、そこからの遺物の出土は見られず、明確な遺構も検出されなかった。これらの点は４基の墳丘墓に見られた特徴とは異なることから、この墓域に造営された墳丘墓とは考えにくい。むしろ周辺の遺構の在り方をみると、他の機能が考えられる。その手がかりとして、この遺構の北側に位置する、７ｍ×５ｍの不整形な方形プランをもった浅い土坑状の土器集積遺構ＳＸ０３からは、ミニチュア土器・台付小型丸底壺・ワイングラス形高杯など祭祀に用いられたとみられる土器が大量に出土した。そして東側には、入れ子状になった小型鉢などの土器集積が見られた。そこで、祭祀的な遺物を多量に出土したこれらの遺構に対して、遺物を出土しなかった方形壇は、周溝により区画された「祭祀のための空間」と考えられる。周溝ＳＤ０６から据え置かれた状態で出土した赤彩された鉢の存在からもこのことが裏付けられよう。また周辺の遺構は、方形壇での祭祀に用いられた土器（道具）を片づけた痕跡と思われる。したがって方形周溝状遺構は墳丘墓に伴う祭祀施設と見ることができよう。出土した遺物から山中式併行期から廻間式併行期にかけて、継続して造営されていた墳丘墓を対象にした祖霊崇拝的な大規模な墓前祭祀が、この場所で執り行われていたことが想定される。

土器集積は、主に墳丘墓１で確認され、その性格は２つに大別できる。１つは主体部付近に配置された土器群ＳＸ102～107であり、いま１つは墳丘墓１の開口部の外側に位置するＳＸ101の存在である。前者は埋葬用に供えられた供献土器の集積の場と考えられ、後者は墳丘墓１で繰り返し執り行われた墓前祭に伴う土器を処置した場と考えられる。

墳丘墓が展開する微高地の縁辺部には幅およそ20ｍ～25ｍの大溝が巡る。この大溝は、部分的に中世の大溝に切られているが、およそ1.5ｍくらいの深さでほぼ垂直に立ち上がる傾斜面をもつ。この溝は墓域を区画するための区画溝と考えられるが、規模がかなり大きいのでさらに別な機能を有していた可能性も推定される。

古墳時代中期の主な遺構は、方墳１基・竪穴住居２棟・掘立柱建物１棟・大溝である。

方墳は、11ｍ×12ｍの規模をもち、幅約３ｍ・深さ約0.３ｍの周溝が墳丘部を囲んでいる。墳丘は削平を受けており、主体部は検出されなかった。周溝から出土した土器より、松河戸式前期併行期に造営されたと見られる。

竪穴住居は、２棟検出された。ＳＢ01・02は、規模はほぼ同じで１辺5.6ｍほどを測り、隅円方形のプランを呈する。これらの住居の床面には、焼土や炭化物が一面に広がっており、ＳＢ０２からは炉石も確認された。出土遺物には小型高杯や小型丸底壺など祭祀に用いられたと考えられる土器が含まれ、住居の壁面に沿って廃棄されたような形で出土した。

掘立柱建物ＳＢ03は、３間×１間の規模をもつ。

竪穴住居はＳＢ01・02の２棟以外は検出されず特異な存在として位置づけられる。ここでは、掘立柱建物と併せて方墳にかかわる施設として方墳を中心に配置されていると見ることができよう。そこで大胆に推測するならば、掘立柱建物は、死者を仮に納めて祭る殯

の場であり、方墳は死者を葬る場、方墳を中心にほぼ対称的に位置する２棟の竪穴住居は、墓を管理する仮小屋的な場と考えられよう。

ＳＤ08は、Ⅱ期の大溝を再掘削した溝で、幅約２ｍ・深さ約1.2ｍを測る。埋土中からは建築部材と思われる木製品が出土している。（秋田幸純・飴谷　一）

Ⅲ期・Ⅳ期　Ⅲ期（奈良・平安）の遺構は、Ｄ区で竪穴住居を重複する形で１２棟検出した。住居の規模は、一辺３～５ｍ程度の規模である。いずれの住居も大きく削平されているため、深さは数㎝程度しかない。検出された竪穴住居は、方向等から２～３グループに分類できる。遺物の量は少ないが、各住居跡より奈良時代の須恵器や灰釉陶器が若干出土している。

Ⅳ期（中世）の遺構としては、まずＤ区からＥ区にかけて延びる幅約３５ｍの大溝が挙げられる。この大溝が埋まった後、水田として利用され、調査では上下２面の水田面を確認することができた。上層水田は戦国時代末、下層水田は室町時代後半に比定することができる。いずれの水田も概ね谷状地形の傾斜を利用し、幅は７ｍ前後の区画を有する。また、いずれの水田面からも、当該期の土器をはじめ多数の遺物が出土しており、銅銭など金属製品も見られた。

また、下層水田に伴う土抗（ＳＫ０２）からは、馬の頭蓋骨が出土した。雨対策のための犠牲馬を埋納したものと思われる。（春日井　毅）

まとめ　今回の川原遺跡の発掘調査では、縄文晩期から戦国時代にいたる各時期の遺構・遺物を検出することができ、多大な成果を納めることができた。ここでは特にⅡ期をとりあげ、まとめとしたい。以下の３点をあげることができる。

まず、第１に３５ｍを測る墳丘墓２の存在である。巨大な墳丘墓としては佐賀県吉野ヶ里遺跡、愛知県朝日遺跡などの存在が知られているが、いずれも中期前半代の築造であり、弥生時代後期の社会においては、全国的に最大級のものと考えられる。

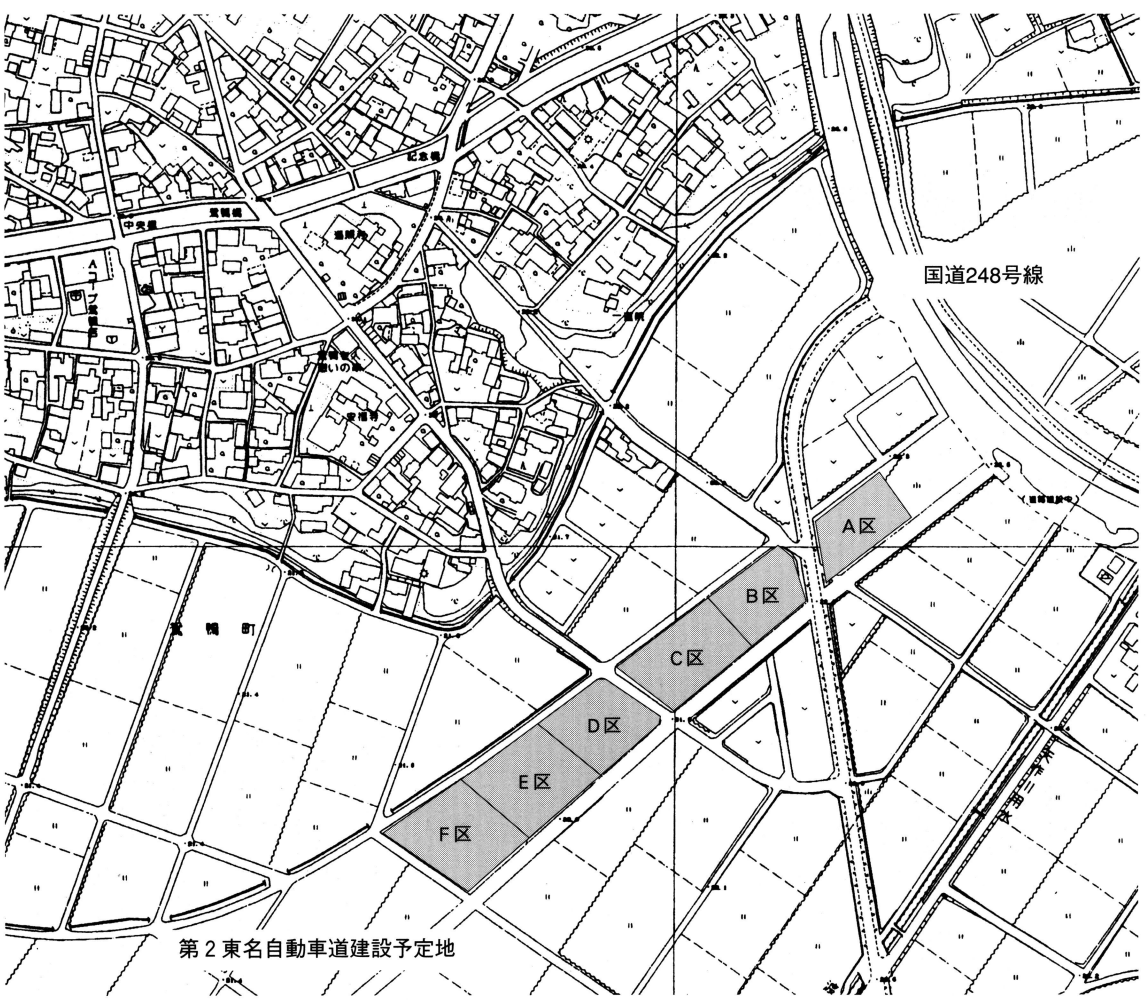
第２に全国的にも極めて珍しい巨大な墳丘墓のみで構成された「墓域」の存在を確認したことである。これらの墳丘墓を造営した集団の居住域としては、台地上の神明遺跡が考えられるが、現在までの調査成果から弥生時代の竪穴住居は数軒にとどまり、墳丘墓群の規模から見て、神明遺跡をその居住域と考えるには無理がある。未だ発見されていない拠点的大集落が周辺に展開する可能性を考えねばならないであろう。さらには、これらの墳丘墓群を築造しえた矢作川中流域に影響を持つ特定の権力者の存在を想定する必要もあると思われる。

最後に墳丘墓にかかわる祭祀の痕跡が各所で確認されている点を強調しておきたい。具体的には墓域全体の祭りを象徴する祭祀場所としての方形周溝状遺構や、墳丘墓１の墓前祭に関連したと考えられる土器処置場であるＳＸ101。そして木棺墓への供献土器集積（ＳＸ102～107）などである。当時の祭祀の形態を考える上で貴重な資料を提供できたと思われる。（服部信博）

郷上（ごうがみ）遺跡

調査の経過　郷上遺跡は豊田市の南部、鴛鴨町郷上に所在し、古墳時代から江戸時代までの複合遺跡である。矢作川中流域の沖積平野に位置し、流路とほぼ平行する自然堤防上に立地する。標高は約22mから21mである。発掘調査は第二東海自動車道建設に伴う調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は平成９年４月から平成10年３月まで20,350㎡を調査対象とし、調査区はＡ区からＦ区まで合計６区を設定した。

調査の結果、郷上遺跡は古墳時代中期から後期にかけての時期、奈良・平安時代、鎌倉時代、そして戦国時代から江戸時代の４期に大きく区分して考えることができる。その内で、戦国時代から江戸時代にかけては、ほぼ全調査区において遺構・遺物が集中して検出され、郷上遺跡を代表する時期といえよう。



第１図　調査区位置図（１：5000　豊田市基本図「鴛鴨」より）

各調査区で古墳～平安時代の遺構を検出した。以下、時期を追って記述する。

古墳後期　Ａ区の東半部で方墳２基と居住域を確認した。方墳は墳丘部分がすでに削平されており、周溝の一部を調査区東端で検出した。これらの方墳を切って、竪穴住居が16棟重複して築かれている。なかにはカマドが比較的良好に残存しているものもあった。竪穴住居群の時期は５世紀後半で、方墳はそれより若干さかのぼる時期の築造である。

Ａ区からＣ区にかけて、台地の縁辺部を北東から南西にのびる大溝を総延長約200ｍにわたって確認した。規模は幅が５～15m、深さ約1.5mで、溝の肩は台地側の方がゆるやかに掘削されている。埋土は大きく２層に分かれ、下層の白色粗粒砂層からは６世紀前半～７世紀前半頃の完形に近い土器が各調査区からほぼ万遍なく出土している。その後、８世紀後半頃に再掘削されており、９世紀後半頃には埋没している。

奈良～平安時代　奈良～平安時代の遺構としては、前述の大溝のほか、Ｅ区で竪穴住居10棟と土坑、溝を確認している。竪穴住居群と土坑は８世紀末～９世紀前半頃に属する。溝は竪穴住居群の西側でほぼ真北方向にのびている。時期は竪穴住居群より古く、８世紀後半頃である。

（木下　一・樋上　昇）



Ｂ区大溝全景



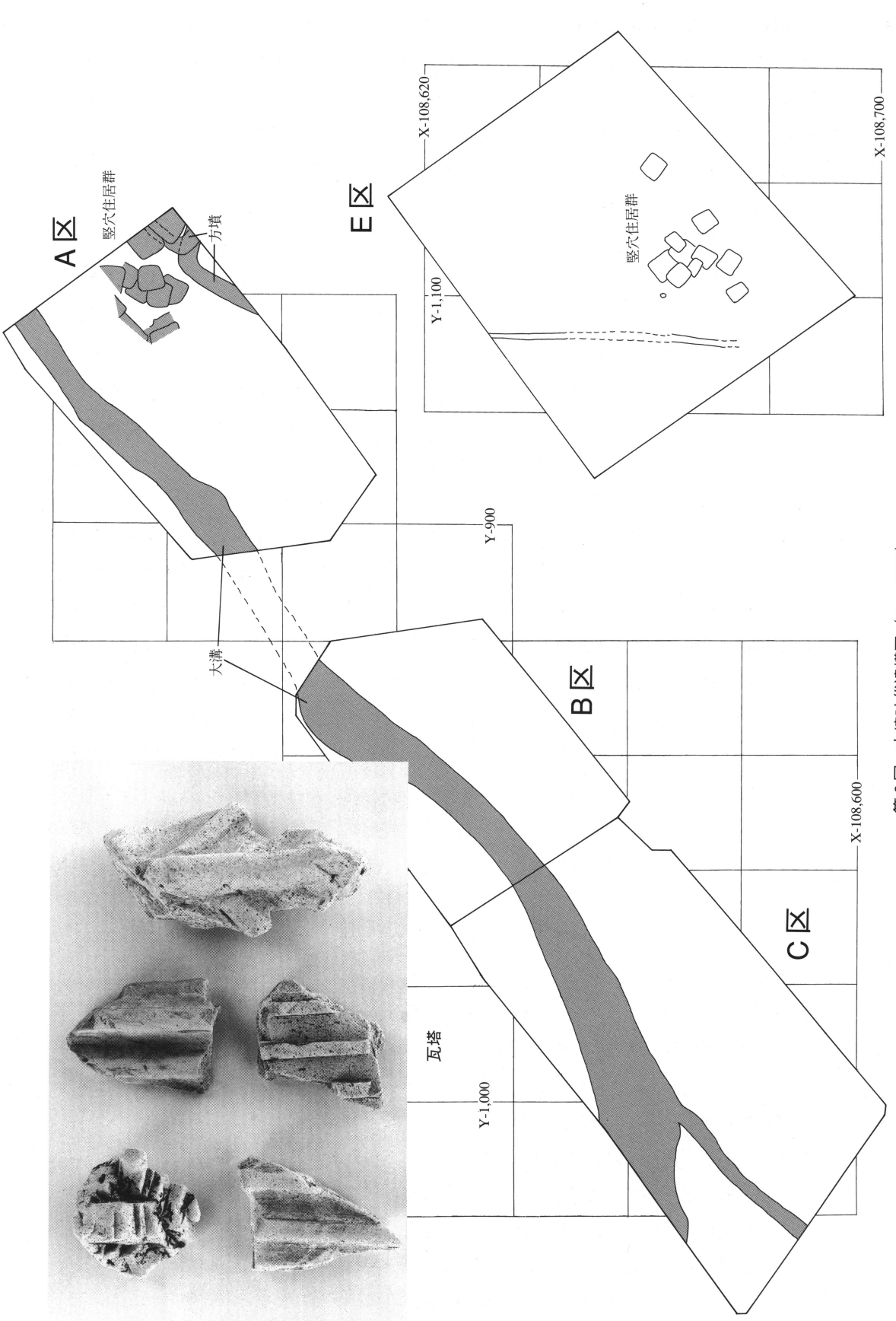
Ａ区竪穴住居群



Ｃ区大溝土層断面



Ｅ区土器出土状況



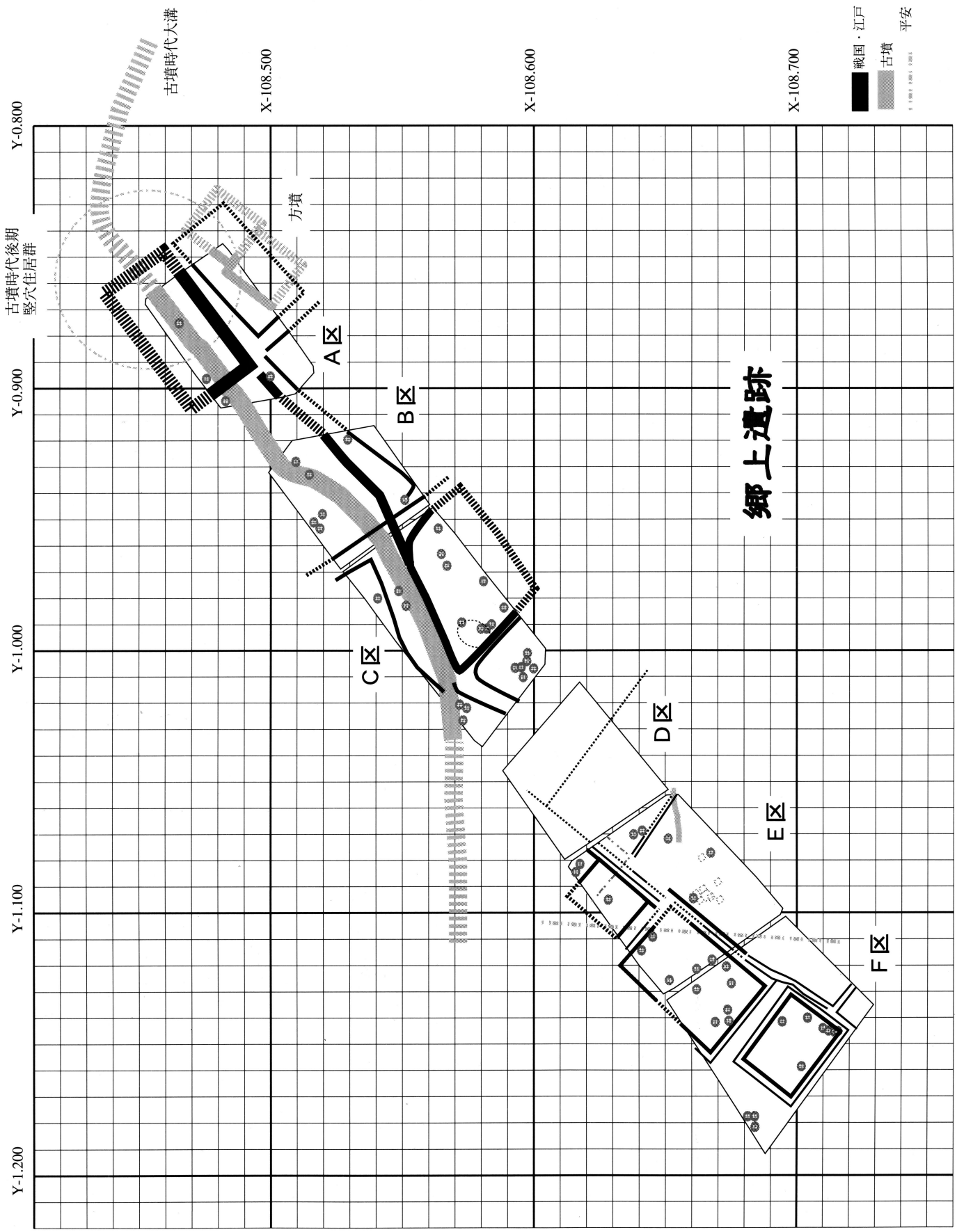
第２図　古墳時代遺構図（１：1000）

中世

中世の遺構はＥ・Ｆ区で主に検出されており、Ａ～Ｄ区では希薄である。主な遺構は溝、土坑、井戸である。E区の北隅でほぼ北西-南東方向と北東-南西方向の溝各一条が検出されている。攪乱のため確定できないが、直交する位置にあることから屋敷地を方形に区画する溝と考えられる。その他の調査区では明確になっていないが、Ｅ・Ｆ区では中世の井戸、土坑等が存在することから、部分的であるが中世の屋敷地が展開していたものと考えられる。Ｅ区の溝の一方は戦国時代・近世の屋敷地の区画割の中心となる中央溝群の位置と同一である。またその区画割りと同様に他方の溝がそれに対して直交方向に延びている。出土遺物から13世紀代以降この地域に居住域が成立し、この時期の基本的な区画割りが継承され、戦国時代・近世の屋敷地を規制していたものと考えられる。戦国時代及び近世の遺構と混在するため小土坑で中世の時期と確定できるものは少ないが、Ｅ区の南東側の方形区画内では他の時期の遺構と重複せず、中世の土坑の集中する部分があり、根固め石がある柱穴が一間間隔で３基並ぶ掘建柱建物が確認された。また、やや大形の中世の土坑はＥ・Ｆ区に散在し、灰釉系陶器が比較的多く出土する遺構もある。井戸は、溝による屋敷地の方形区画のない部分からも検出されている。

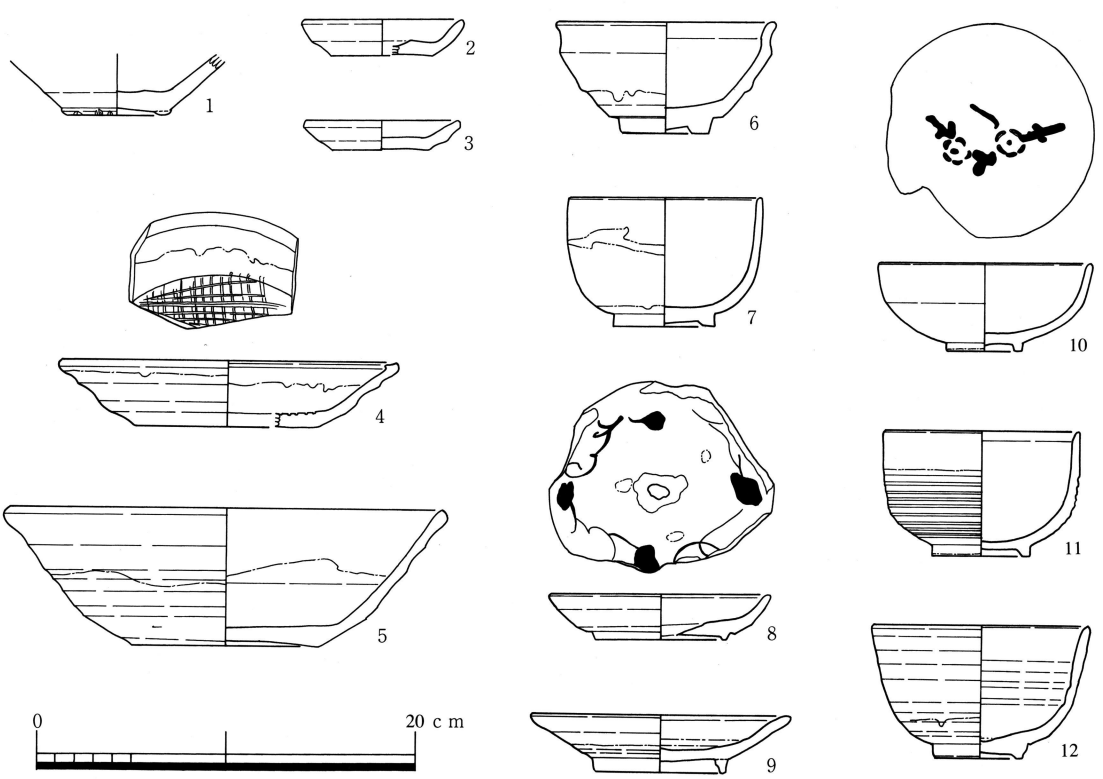
戦国時代・近世

戦国時代から近世の遺構は全調査区に展開している。基本的な遺構は、溝、土坑、井戸であるが、その他、性格不明の大形の落ち込み状の遺構、集石等がある。遺構は、調査区全体を貫く南西－北東方向の数条の中央溝群を中心に位置している。この溝群に対して両側に南東－北西方向の溝が配置し、さらに中央溝群に対して並行して走る溝が離れて存在し、これらによって屋敷地に相当する方形の区画が構成される。溝は時期的に変遷があり、また同位置にあって消滅したものがあることも想定されるが、15世紀後半から18世紀にかけて存続し、この期間溝の基本的な位置関係は変化しない。Ｅ区においては北西- 南東方向の戦国時代の溝と20世紀初頭まで下がる溝がほぼ同位置にある。中央溝群以外の溝と井戸が切り合う部分が存在し、北西- 南東方向の溝は時期が限定される切り合い関係のないものも多く、中央溝群を基本軸として時期によって区画割が部分的に変化していることが認められる。小土坑は多数検出されているが、方形にならび明確に掘建柱建物として認識できるものは少ない。柱根が残るものがあり、残っているものでは直径20㎝以下の丸太材のものが大部分である。また、小土坑の底に平らな石をおき礎石とするもの、あるいは根固めを有するものが少数ながら存在する。井戸は偏在するが、遺構の集中する屋敷地内と考えられる部分に位置するものがほとんどである。戦国時代は、平面正方形の井戸枠内に曲物が入れられる構造の井戸を基本とする。近世は桶組を井筒とする構造のものである。戦国時代と考えられる井戸で桶組と曲物によって構成されるものが２例存在する。井筒を桶組とし、最下段に曲物が使用されるもので、戦国時代から近世への過渡的形態の井戸と考えられる。性格不明の直径数ｍの大形の落ち込み状の土坑が、区画内に数基程度認められる。近世のものが多く、土質及び木製品の遺存状況の良好なことから池のように滞水していた遺構と推定される。その他、区画内に１あるいは２基ほど集石が認められる。近世の遺物が多数含まれており、石及び陶器類の廃棄遺構と考えられる。

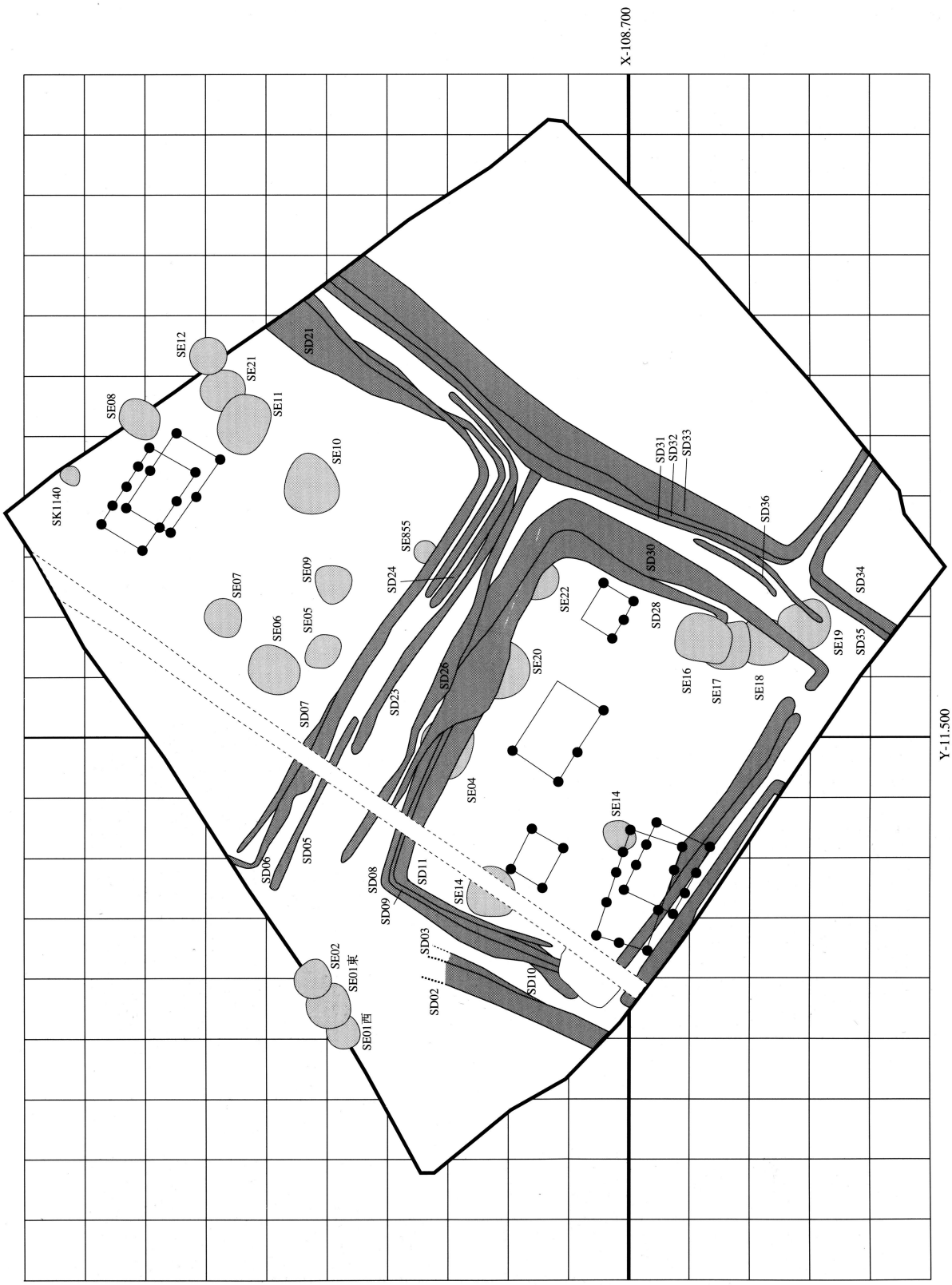


第3図　遺構図（1：2000）

F区　　F区は、戦国時代・近世の遺構が集中しており、その南西部から屋敷地の一区画全体が検出された。区画は長辺40m、短辺25mである。区画を構成する溝は、最も深い部分で検出面から約0.8m、幅約3mを測る。2～3条が切り合い、大きく16世紀後半～17世紀前半と17世紀代後半の2時期に別れる。溝には高低差があり、場所によって幅、深さとも大きな差がある。また、中央溝群以外の部分では井戸ときりあっていることから時期的な溝の変遷が認められるが、戦国時代末から近世にかけて基本的な区画割りの変化はないと考えられる。中央溝群と北西-南東溝が交わる東コーナーの溝底面には、根固め石が2個置かれた方形の土坑が検出されており、溝に架かる橋の橋脚の柱穴と考えられる。区画内には小土坑が密集しており、若干の小土坑は方形に並ぶことから掘建柱建物と確認できるものがある。柱根の遺存するものでは一辺20cmほどの角材が検出されたものが4基存在する。また、小土坑底面に礎石状に平らな石を置いた柱穴が十数基検出された。これらの掘建柱建物は近世の時期と考えられる。井戸は、方形井戸枠と桶組のものが確認され、方形井戸枠のものに重複して桶組が造られているものが2基あり、継続性が認められる。遺構の密度と出土遺物から、この区画が若干変化しつつ長期間に渡って屋敷地となっていたと考えられる。この遺構の集中する区画に対して、南東側の区画はこの時期及び中世の遺構などもほとんど検出されない。屋敷地とは考えられず、中世から一貫して耕作地などとして利用されていたと推定される。



第4図　出土遺物　1～3：C区SE19　4・5：C区SD48　6：C区SD02
7～9：C区SD12　10～12：A区SD03



第５図　97Ｆ区遺構図（１：500）

まとめ

遺跡の時期は古墳時代から近世に及び、その面積も広く、未調査部分があることから詳細は今後に待つところがある。古墳時代の遺構は調査区域北部に集中し、竪穴住居の存在から居住域が成立したことが確認された。同時に、大溝と方墳なども検出され、この時期から周辺の沖積低地部において活発な活動が開始されたことが推測される。この区域の調査は来年度もあり、新しい事実が明らかになるものと考えられる。奈良時代あるいは平安時代初期にも狭い範囲であるが、居住域が存在することが確認された。しかし、区域が異なり、前後の時期との集落の継続性は認められない。

古代集落が断絶して本格的に居住域がこの地域に成立するのは中世13世紀である。戦国時代・近世ほど遺構は密ではなく部分的であるが、ある程度の広がりと集中をみせ、継続的な集落が展開することが確認できる。この時期以降近世18世紀まで屋敷地はある程度の変遷を見せつつ、恒常的に営まれる。集落の基本的な屋敷地の配置、あるいは区画割りは中世に成立したものが継承される。集落が消滅する時期に関しては、文献などでは18世紀と考えられている。この時期、頻発する洪水を避けて現在の台地上の鴛鴨集落の位置に移動したとされる。このことは、19世紀以後の集落に関する遺構が激減することから裏付けられる。その後、この地域は耕作地として引き続き利用されており、19～20世紀初頭の溝などが戦国時代の溝と同位置に検出されている。今回確認された集落の屋敷地の区画割りは、明治期の地籍図と基本的に合致し、昭和初期まで耕地の区画として存続した。今後は、遺構の消長を文献史料等と照らし合わせるなど、より詳細な考察をする必要がある。

（酒井俊彦）



F区屋敷地方形区画



橋脚柱穴



桶組井戸



礎石・柱根

矢迫（やば）遺跡

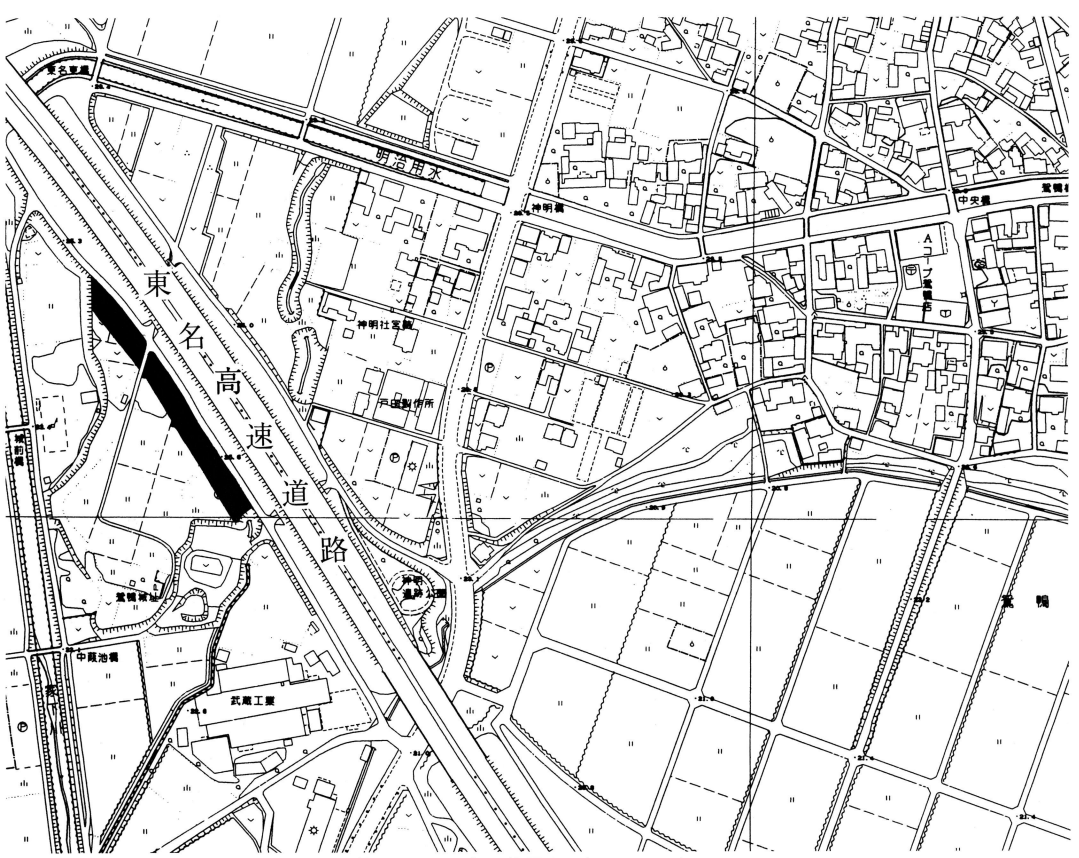
調査の経過　矢迫遺跡は、豊田市鴛鴨町矢迫に所在し、南側に舌状に張り出す碧海台地上に位置する。本遺跡周辺には、古墳時代～古代を中心とする神明遺跡・三味線塚古墳・神明瓦窯や戦国時代の鴛鴨城跡など多様な遺跡が点在する。

本遺跡は、第二東海自動車道建設に伴う事前調査として、平成９年12月から平成10年３月にかけて実施した。調査面積は3,500㎡である。　（加藤博紀）

調査の概要　調査区は舌状に伸びる台地を横断する形で設定された。調査の結果、大きく分けて古墳時代後期から奈良時代までの遺構と江戸時代の遺構が確認された。

古墳時代後期から奈良時代までの遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑などがある。竪穴住居は大半が一辺が４ｍ前後の規模を持ち、竈を持つものがある。覆土中からは須恵器杯身や土師器甕などの遺物が出土しており、これらは５世紀末から８世紀に属する。溝には溝内にピットが並ぶ布掘り状のものがある。これらは一辺が５～１０ｍの長方形に巡る形で確認され、２つの長辺の中央が途切れている。建物跡または柵列囲いと思われるが、性格などは現在のところ不明である。溝の覆土中から須恵器などが出土した。こうした竪穴住居、掘立柱建物、溝は１、２回重複しながら展開している。

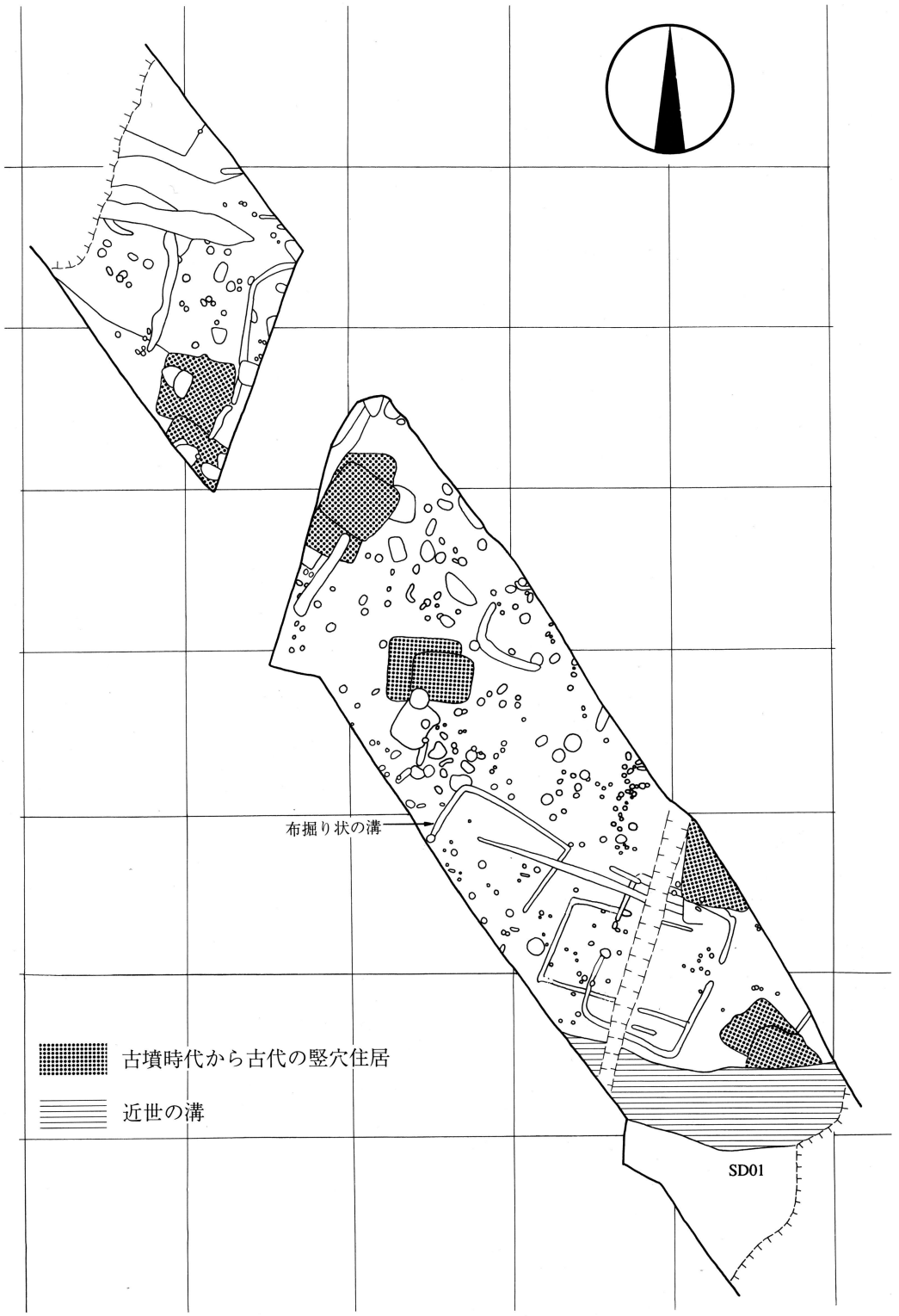
江戸時代の遺構としては、幅が2～3m、深さが約1mを測る溝ＳＤ01などが確認された。



第１図　調査区位置図（１：5000）

ＳＤ01からは18世紀代の陶磁器の他に土師器内耳鍋などが出土している。

まとめ　今回の調査の結果、古墳時代から古代にかけての集落が神明遺跡と谷を挟んで西側にも展開しており、しかも遺構構成が神明遺跡とは異なっていることが明らかとなった。集落の性格などを考える上で貴重な資料となるであろう。（鈴木正貴）



第２図　遺構図（１：400）

八王子（はちおうじ）遺跡

調査の経過　八王子遺跡は一宮市大和町苅安賀に所在する。発掘調査は東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として、当センターが平成７年度から継続して実施しており、本年度が最終年度にあたる。今回は１調査区のみであり、平成９年５月～７月まで実施し、面積は247㎡である。

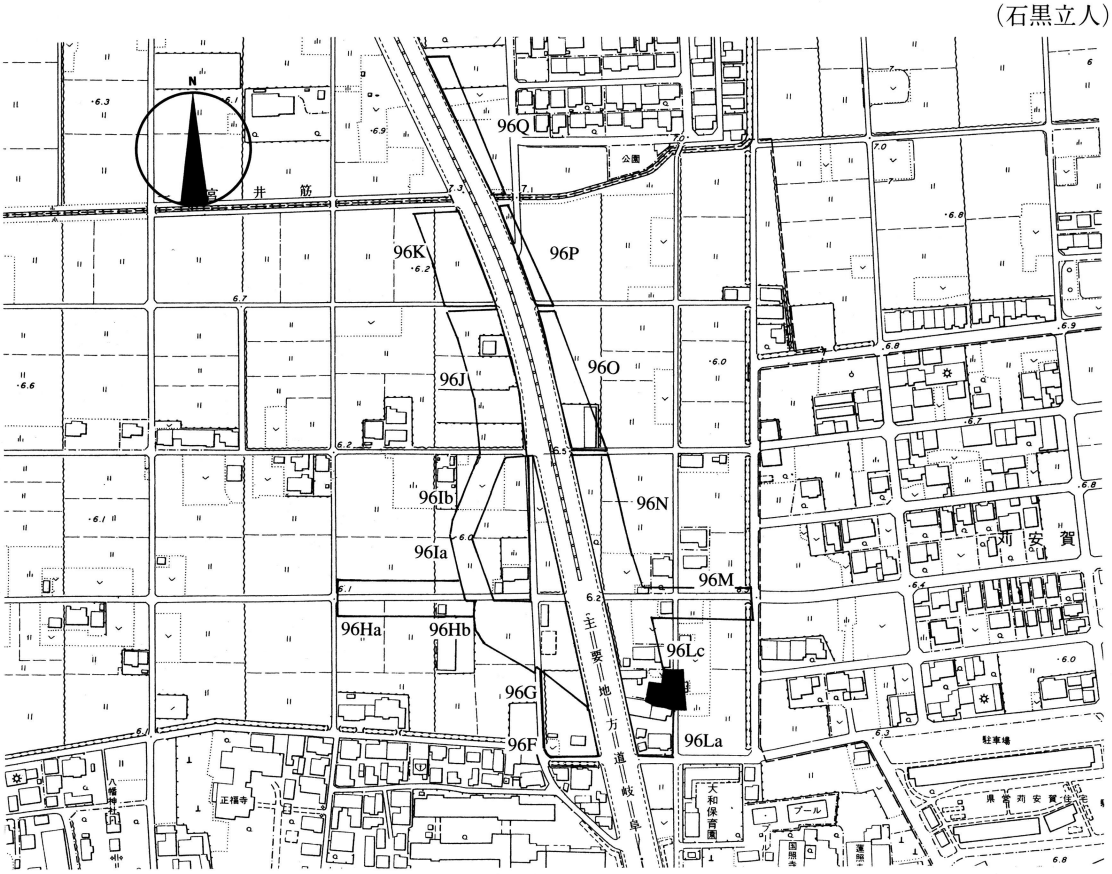
本年度の調査区は、昨年度までの成果によれば弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構群が密集する区域に位置しており、住居群の検出が予想された。結果は、複数の竪穴建物が重複して検出されたほか、中世の区画溝も検出した。

竪穴建物については、近世以降の削平が激しいために輪郭を確定できた例はわずかであった。土坑も若干の検出にとどまったが、うち１つからは良好な状態で土器群が出土した。土坑は、長軸0.9m、短軸0.4mで、深さは0.3mを測る。埋土は炭化物層が複数枚累重しており、また掘り直しもされているようであった。

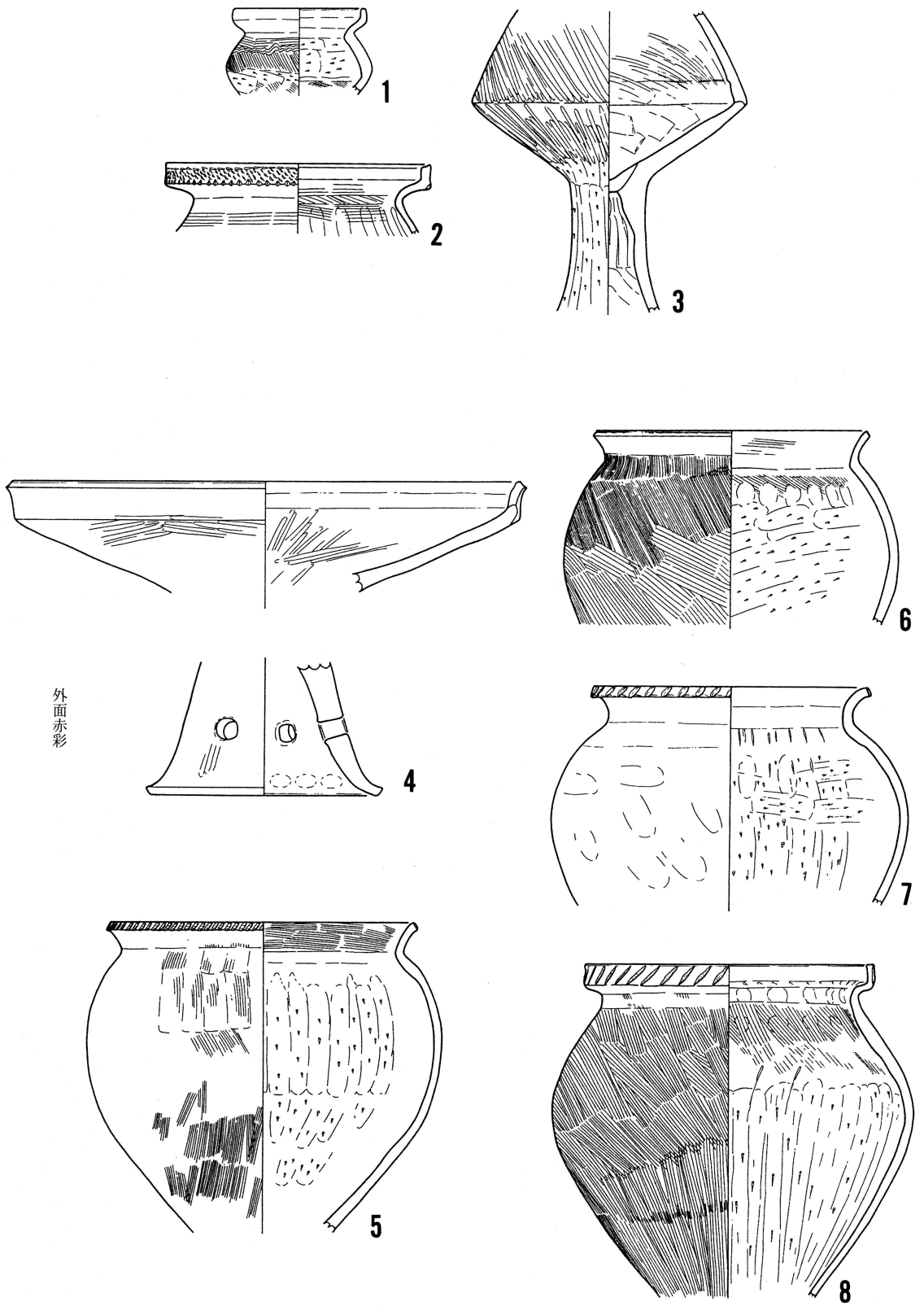
出土土器には高杯・甕があり、壺は残念ながら含まれていなかった。高杯や甕の特徴は、従来「山中期」といわれている資料を遡るものであり、後期の始まりを考える上で貴重である。また、八王子遺跡の居住域の変遷過程において、この時期に意外とひろがりが認められることは他の遺跡と大きく異なる点であり、尾張平野部における集落の展開を考える上で重要な成果を提供している。

今後は報告書の完成にむけて、多くの課題を解明していくことが必要である。

（石黒立人）



第１図　調査区位置図（１：5000）



第２図　遺物実測図（４～８土坑出土　１：４）

苅安賀（かりやすか）遺跡

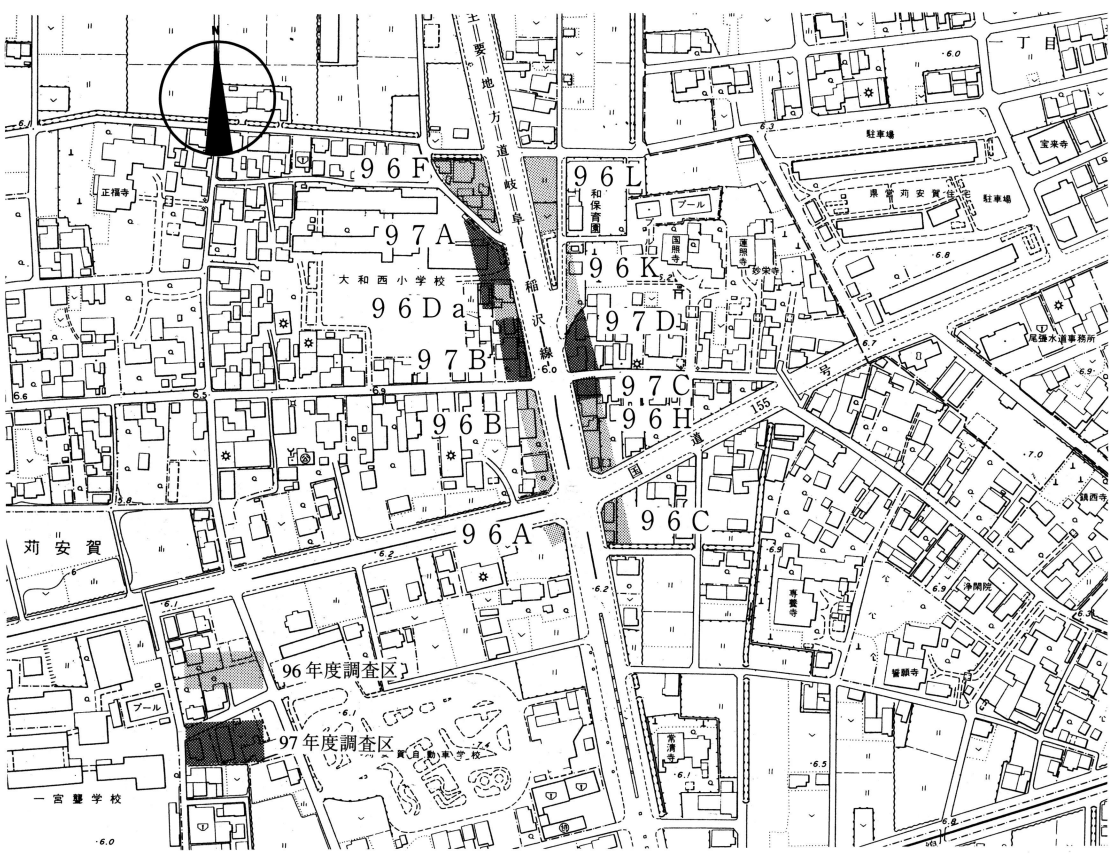
調査の経過　苅安賀遺跡は一宮市大和町苅安賀に所在し、北には八王子遺跡がある。遺跡周辺は民家が密集する住宅街となっており、地形の旧状を窺うことはできない。

発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として平成9年４月から10月にかけて実施されたものであり、調査面積は1,732㎡である。

調査は、西尾張中央道を挟んで、しかも平成８年度調査区の間を埋めるように設定された４調査区について実施した。その成果は、大勢として昨年度の成果を追認するかたちのものであったが、昨年度にも増して苅安賀城との関連が強まり、遺跡を理解する上で重要な方向性を提示することになった。

昨年度の調査において、遺構・遺物については大きくＡ（弥生）・Ｂ（古墳）・Ｃ（中世・戦国）・Ｄ（近世）の４期に区分することができた。今年度はそのうちＡ・Ｂ期が欠落し、また城下町期を設定できる可能性が強まったので、Ｃ期を中世、Ｄ期を城下町期とし、城下町期以後の近世をＥ期に改める。

Ｃ期　Ａ・Ｂ・Ｄ区で東西方向の溝、Ｃ区で南北方向の溝を検出した。今年度新たに南北方向の溝を追加確認したことによって、方形区画の点在する可能性が強まった。しかし井戸の追加事例はなく、単純に集落の展開を想定するわけにはいかない。



第１図　調査区位置図（１：5000）

D期　懸案であった苅安賀城関連の遺構として、A区では幅5m以上、深さ1.5m以上の大溝、C区でもほぼ同規模の大溝、D区では同時期の河川堆積層を検出した。また、B区では南北方向の溝と廃棄土坑や該期の遺物集中区域を検出した。B区の調査では、街道沿いに位置しているという想定のもと、街道関連の資料を得るべく努力したけれども、ついに確証をえることはできなかった。ただ、上述の集中区は町屋に関連する可能性もある。

A区の大溝は、同じ位置で掘削が継続されている。江戸時代には明らかに規模を縮小しており、心證寺に関連する区画溝と考えられるが、当初の規模はまさに「堀」であり、17世紀後半創建の心證寺を遡る時期の堀割りであった可能性が高い。苅安賀城の外郭に寺が配置されていたことを考慮すれば、この区画にその後忘れられてしまった「寺」が存在していた可能性は高い。

一方、C区の大溝については、ちょうど街道に平行していることから、虎口に関係するものではないかと考えたが、どのようなプランを構成するのか明らかにはできなかった。

D区では炭化物や焼土の混じった堆積層を検出し、土器・陶器だけでなく、漆椀などの木製品が出土した。

E期　近世関連は街道沿いのB・C・D区に集中していた。そのうち、川沿いであるC・D区では近世の整地層が厚く堆積していただけでなく、炭化物や焼土粒の充満した土坑が展開し、「鍛冶」との関連が考えられた。B区では多くの柱穴を検出したが、礎石をもつものともたないものがあり、それが屋根瓦の普及とどの程度関連しているのか明らかにすることが課題である。

（黒田哲生・浅井厚視・石黒立人）



97D区



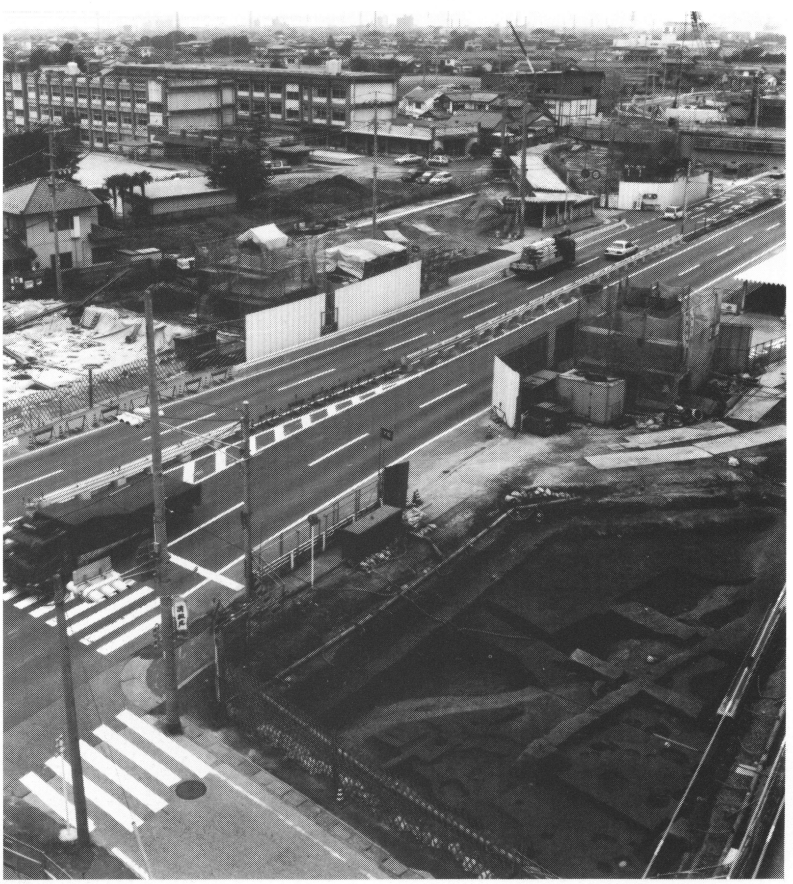
97A区



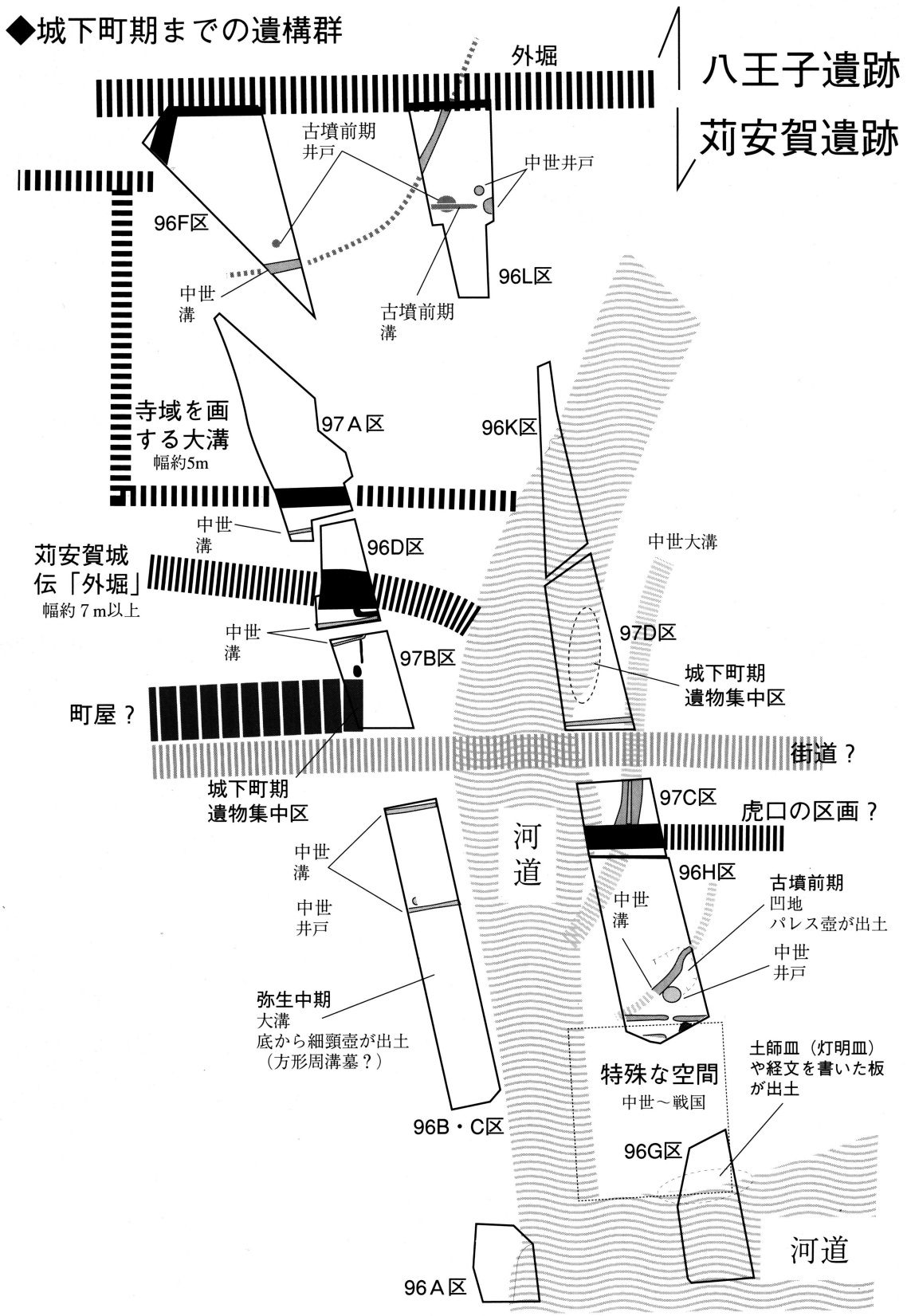
97B区



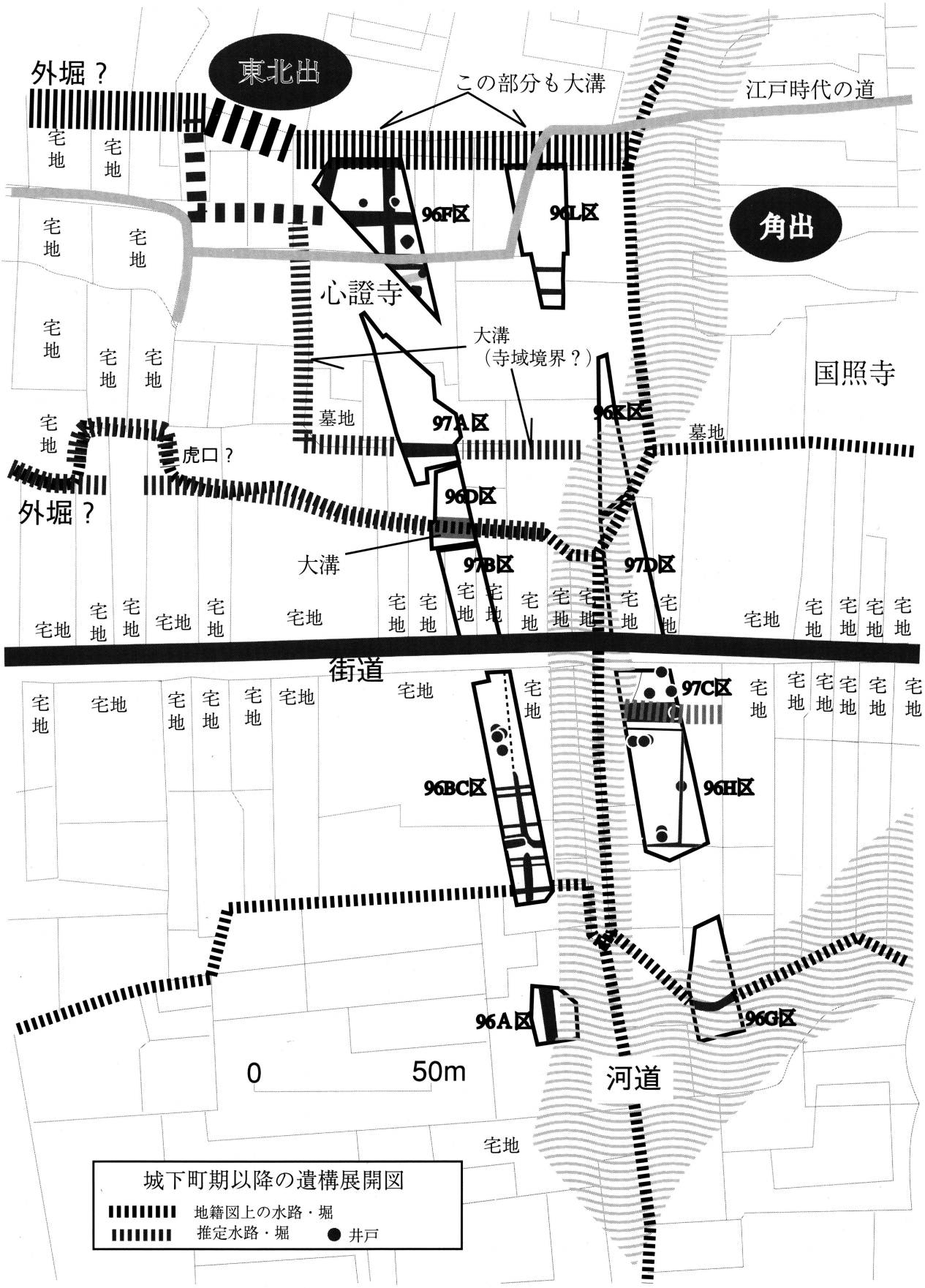
97C区



97D区


◆城下町期までの遺構群
八王子遺跡
苅安賀遺跡
外堀
古墳前期
井戸
中世井戸
96F区
96L区
中世
溝
古墳前期
溝
寺域を画
する大溝
幅約5m
97A区
96K区
中世
溝
96D区
苅安賀城
伝「外堀」
幅約７m以上
中世大溝
中世
溝
97B区
97D区
城下町期
遺物集中区
町屋？
街道？
城下町期
遺物集中区
97C区
虎口の区画？
河
道
中世
溝
96H区
古墳前期
凹地
パレス壺が出土
中世
井戸
中世
溝
中世
井戸
弥生中期
大溝
底から細頸壺が出土
（方形周溝墓？）
特殊な空間
中世～戦国
土師皿（灯明皿）
や経文を書いた板
が出土
96B・C区
96G区
河道
96A区

第２図　遺構全体図



第３図　苅安賀遺跡周辺地籍合成図（明治24年地籍図より）

三ツ井（みつい）遺跡

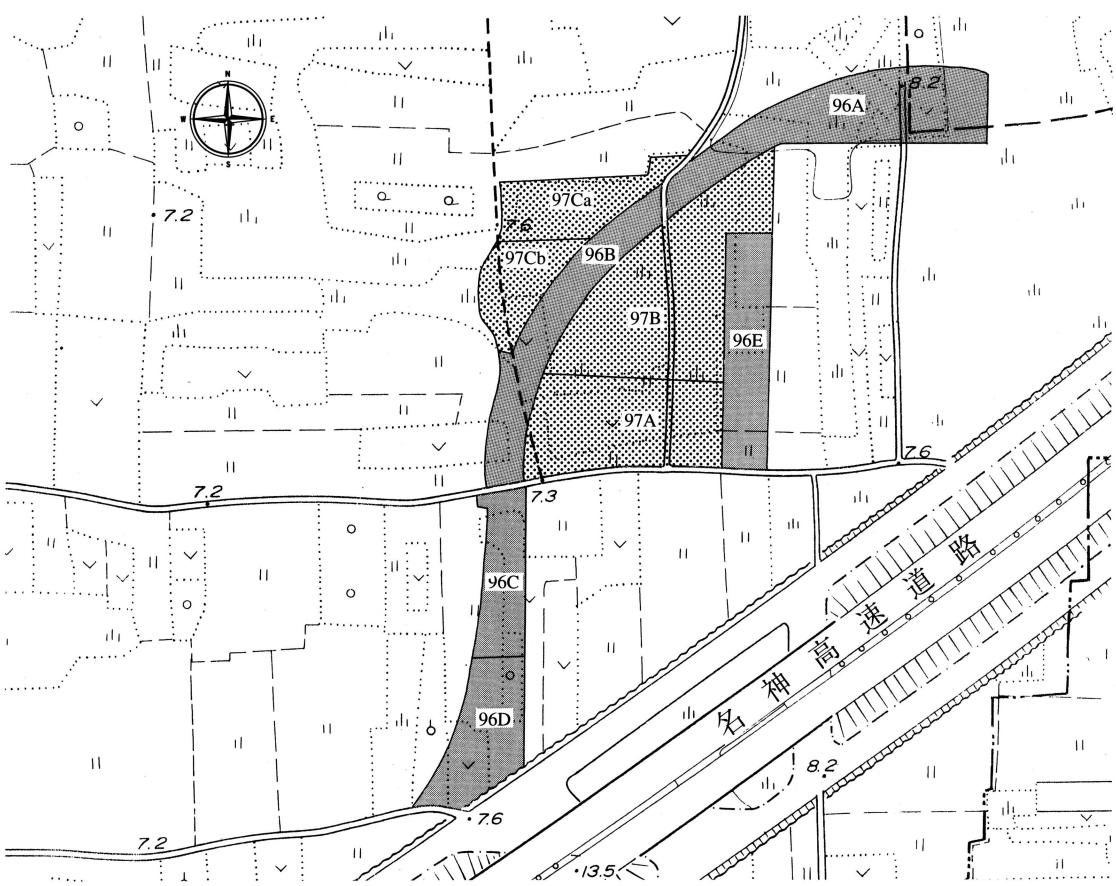
調査の経過　三ツ井遺跡は、青木川と五条川に挟まれ、水田と畑地の交錯する島畑景観を良好に留めている一宮市丹陽町三ツ井に所在し、標高８m前後の自然堤防と後背湿地上に展開する。発掘調査は、名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団より愛知県教育委員会を通した委託事業として平成８年度から実施している。

平成９年度はＡ・Ｂ・Ｃａ・Ｃｂ区合わせて5,977㎡を発掘調査した。

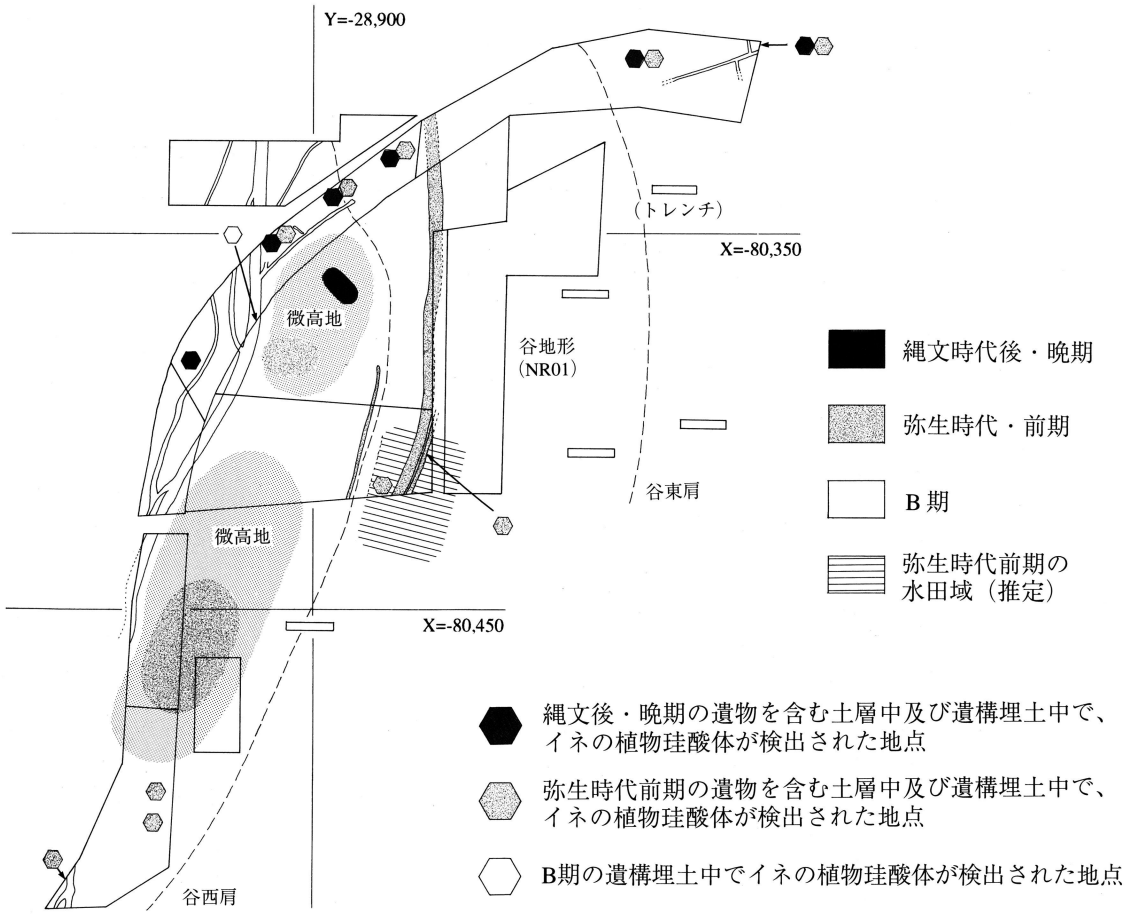
調査の概要　三ツ井遺跡は、昨年度からの調査によって縄文時代後期後葉から中世（鎌倉・室町時代）へと続く複合遺跡であることが明らかとなった。

検出された遺構・遺物は、大きくＡ期：縄文時代後・晩期～弥生時代前期、Ｂ期：弥生時代前期～古墳時代前期の間、Ｃ期：古墳時代前期～古代（奈良・平安時代）、Ｄ期：中世（鎌倉・室町時代）の４時期に区分できる。

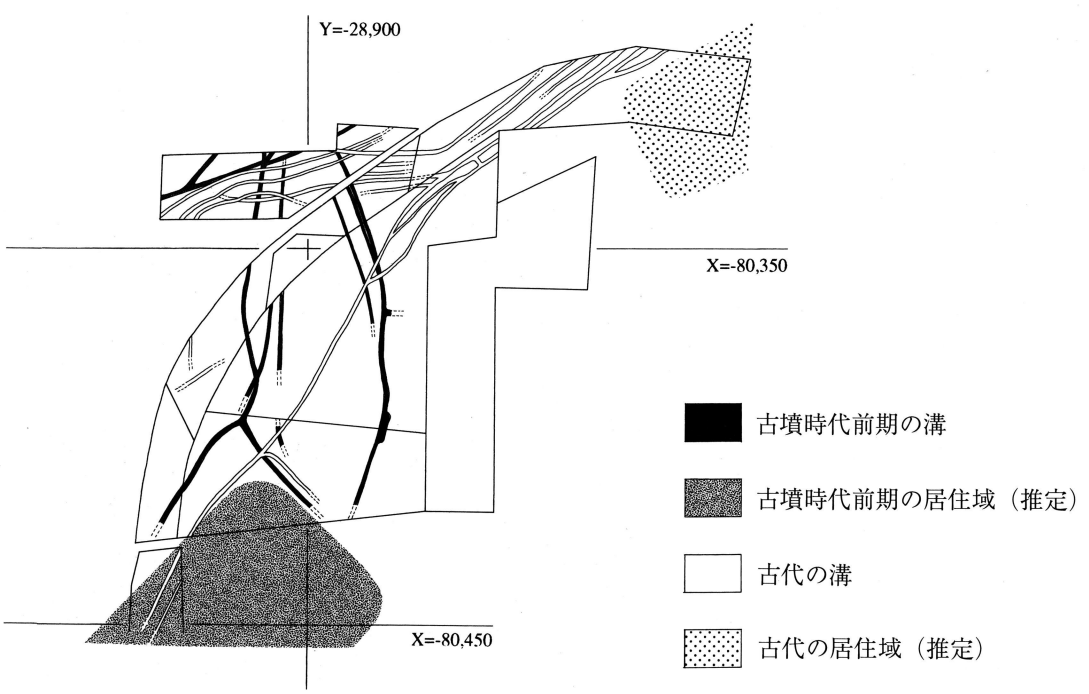
本年度の調査成果としては、縄文時代後・晩期から弥生時代前期の土器・石器が多く出土したこと、弥生時代前期の溝の盛土部分から遠賀川系の壺・蓋が埋設された状態で出土し、水田址の可能性が考えられること、中世の島畑が形成される以前に墓域を想定させる遺構が確認されたことなどがあげられる。



第１図　調査区位置図（１：2500）



第２図　Ａ・Ｂ期遺構図（１：2000）



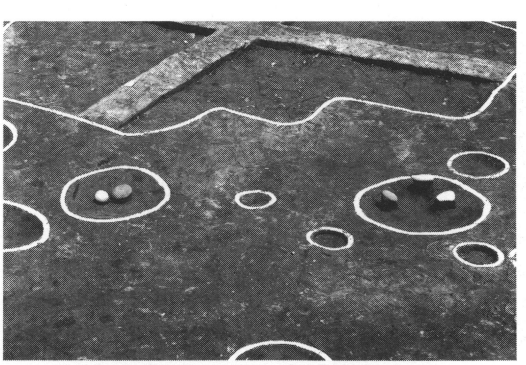
第３図　Ｃ期遺構図（１：2000）

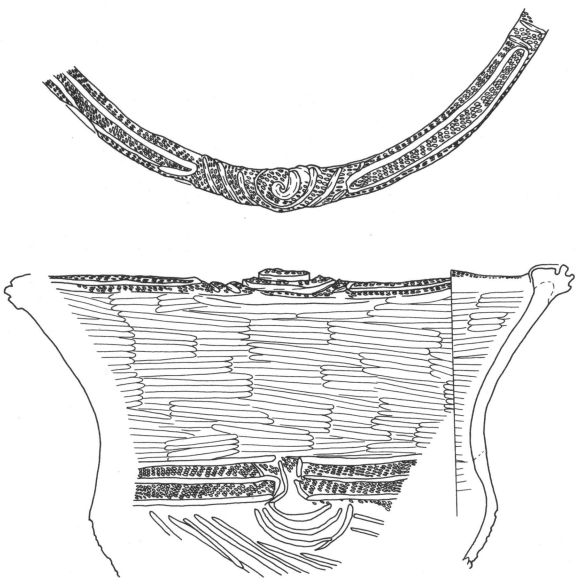
A 期　縄文時代後期後葉から晩期前葉の遺構としては、自然流路（ＮＲ０１）西側の微高地上で土坑などが若干検出された。主な遺物としては、石鏃・石錘・石皿・敲石・砥石・蛇紋岩製の磨製石斧・サヌカイト製のスクレーパーなどの石器類、後期後葉の深鉢（北白川上層式期に並行）・晩期前葉の浅鉢・深鉢などがあげられる。また、ＮＲ０１の西肩付近で一辺20㎝・長さ60㎝程の直方体を呈する巨石が出土している。その後、河川の流れに変化が生じ、幅約 80m、高低差約１mの谷地形が形成され、地形全体に黒色粘土層（^{14}Ｃ年代測定結果によると、96Ｂ区の微高地上で B.C.775年、低湿地部で B.C.890年の暦年代値を得た）が段階的に堆積したと考えられる。昨年度の調査では、この層からイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が多量に検出されたことなどから、付近で稲作が行なわれた可能性が高まったが、現段階では、明確な水田遺構は検出されていない。

弥生時代前期の遺構としては、谷地形の低湿地部で、南北方向に走り、盛土を伴う幅３m・深さ40㎝程の溝（ＳＤ92）が検出され、その盛土中より埋設された可能性のある遠賀川系の壺・蓋が出土した。また、ＳＤ92に直交する盛土痕がＳＤ47内で検出された。盛土を畦畔として想定すると、溝は水田用水路と考えられる。さらにＳＤ４７の盛土中と水田床土と推定される土層中からイネの植物珪酸体が確認され、近辺から収穫具と考えられる粗製剥片石器（光沢あり）も数点出土していることなどから、水田址の可能性が考えられる。この時期の居住域は、谷地形西側の微高地上に展開し、その中心地は昨年度の調査から96Ｃ区の東側付近と推定される。97Ｂ区でも竪穴住居２棟（ＳＢ01・02）や石皿・敲石などの石器類がセットで埋納された土坑２基（ＳＫ171 ・ 172）などが検出された。また、近辺から下呂石・チャートなどの剥片・原石が多く出土し、石器製作の場が想定される。Ａ期の遺構は、洪水による浸食によってその存在をわずかに窺い知ることしかできない。

B 期　弥生時代前期から古墳時代前期の間と考えられる時期に、再びＮＲ01の活動が活発化し、稲作は微高地西側の縁辺部で展開するようになったと推定される。幅３m・深さ１m程の大溝（ＳＤ９３）は、盛土を伴い、溝埋土中からイネの植物珪酸体が確認されたことから、水田用水路として利用された可能性が考えられる。大溝から分岐・合流する溝群にも盛土がみられたが、水田域は不明であり、この時期の居住域も不明である。時期決定可能な遺物がないため、明確な時期は不明であるが、層位から判断してこの時期の遺構とした。


97Ｂ区　谷地形セクション

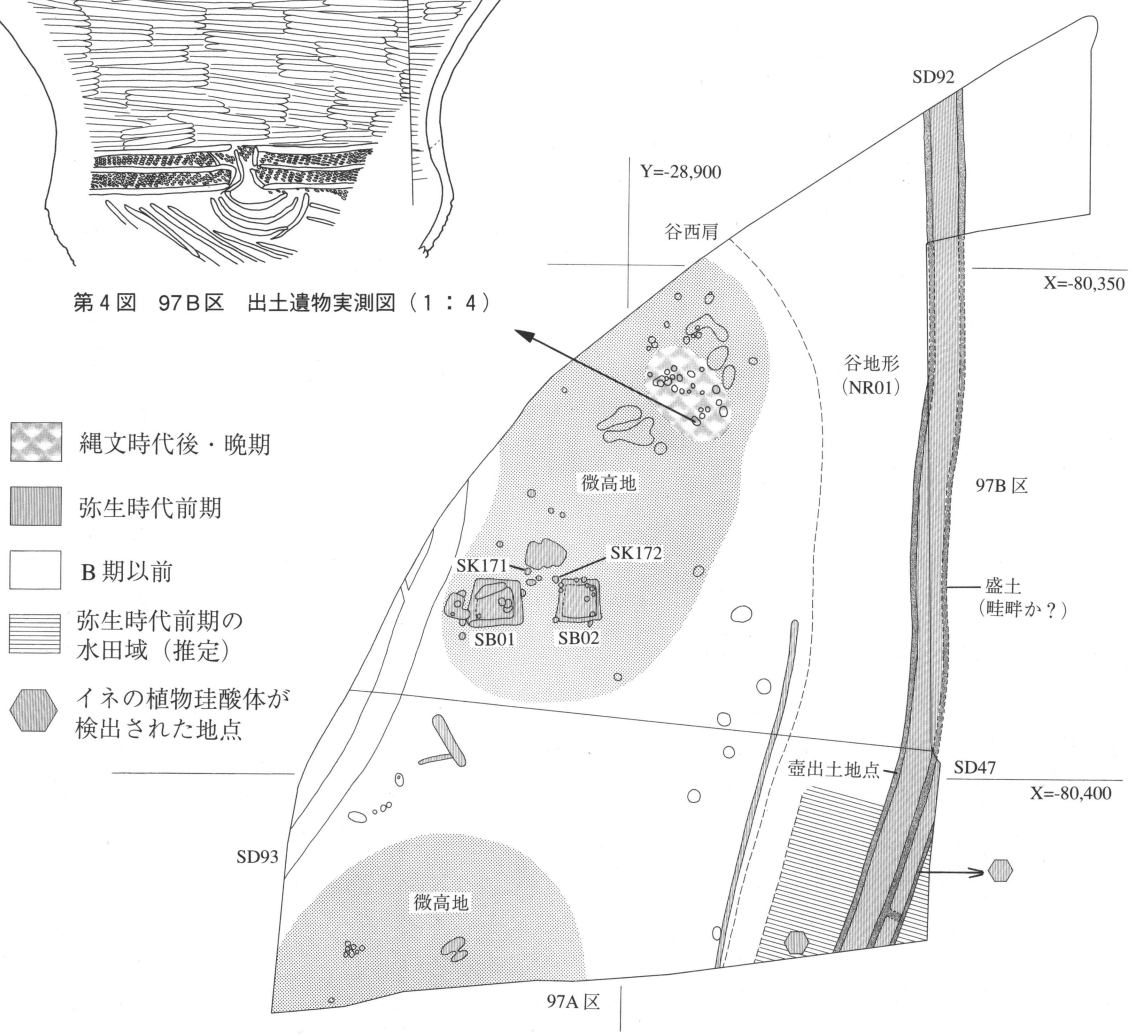

97Ｂ区　ＳＫ171・172遺物出土状況



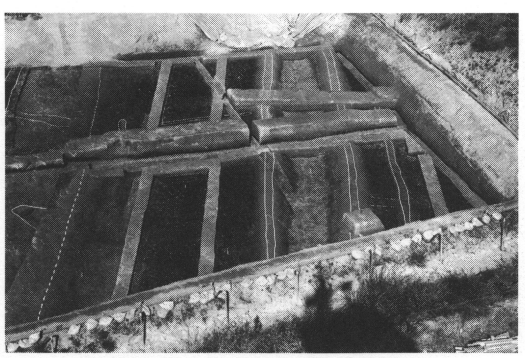
第４図　97Ｂ区　出土遺物実測図（１：４）



97Ｂ区　巨石出土状況



第５図　Ａ・Ｂ期遺構図（１：750）



97Ａ区　ＳＤ92・47完掘状況



97Ａ区　ＳＤ92西側盛土内壺・蓋出土状況

C　期　古墳時代前期までに、大規模な洪水性の堆積によって谷地形は埋没し、現地形にほぼ近い平坦な地形になったと推定される。古墳時代前期の遺構としては、微高地の縁辺に沿う方向に走る溝群（ＳＤ18・30）や、小型丸底壺を出土した土坑（ＳＫ88）などを検出した。この時期の居住域は、97Ａ区南側から96Ｃ区東側付近と推定される。主な遺物としては、甕類（Ｓ字状口縁台付甕など）・壺類（二重口縁壺・パレス壺など）・高杯・甑などが出土した。廻間Ⅲ式～松河戸Ⅰ式の時期と考えられるものが多いが、廻間Ⅰ式・Ⅱ式の時期のものや古墳時代後期（5世紀末）と考えられる須恵器の杯身なども若干出土した。

古代の遺構としては、溝群の検出が主であり、概ね北東から南西方向に走る溝群と東西方向に走る溝群とに分けられる。溝は残存良好な所で幅１ｍ・深さ70㎝程を測り、８世紀後半～９世紀後半の時期と考えられる。昨年度の96Ａ区で、溝群の南側で竈を備えた竪穴住居を数棟検出したことから、居住域に関連したものであると推定している。主な遺物としては、猿投窯編年によるとＯ－10～Ｋ－90の時期と考えられる須恵器の杯身・杯蓋や灰釉陶器の椀・皿・段皿が多く出土した。他に、土師器の甕、ガラス製小玉、８世紀前葉と考えられる美濃須衛窯産の須恵器の椀（佐波理鋺写しで、刻印あり）なども出土した。

Ｃ期の溝群は、その走る方向に規則性があり、何度も掘削し直され再利用されたものが多く、古墳・古代包含層がよく残存する所で交錯している。

D　期　今年度の調査によって、島畑が形成される以前の遺構が検出され、中世が２時期に区分されることが確認された。また、後世の耕地開発のためか、遺構がかなり削平されていた。

12世紀末～14世紀前半の鎌倉時代の遺構としては、97Ａ区でＣ期の溝の軸線と同方向の畝状遺構と考えられる溝群を検出した。また、方形土壙や集石など墓域を想定させる遺構群を検出した。96Ｂ区から97Ｂ区にかけて、隅丸長方形状に掘削された凹地内で柱穴と考えられる土坑と溝群を、その東側と南側で区画溝群を検出した。出土遺物・柱穴数が多くないことから、居住域とは考え難く、墓域と関連した特殊空間の可能性も考えられる。

１４世紀後半の室町時代になると、水がかりの悪いこの地域では、水田開発に伴い、水田と畑地を共に利用する集約的な島畑の景観が形成されるようになる。これらに伴う遺構群は、概ね東西・南北方向を維持しており、条里の軸線に規制されたものと考えられる。

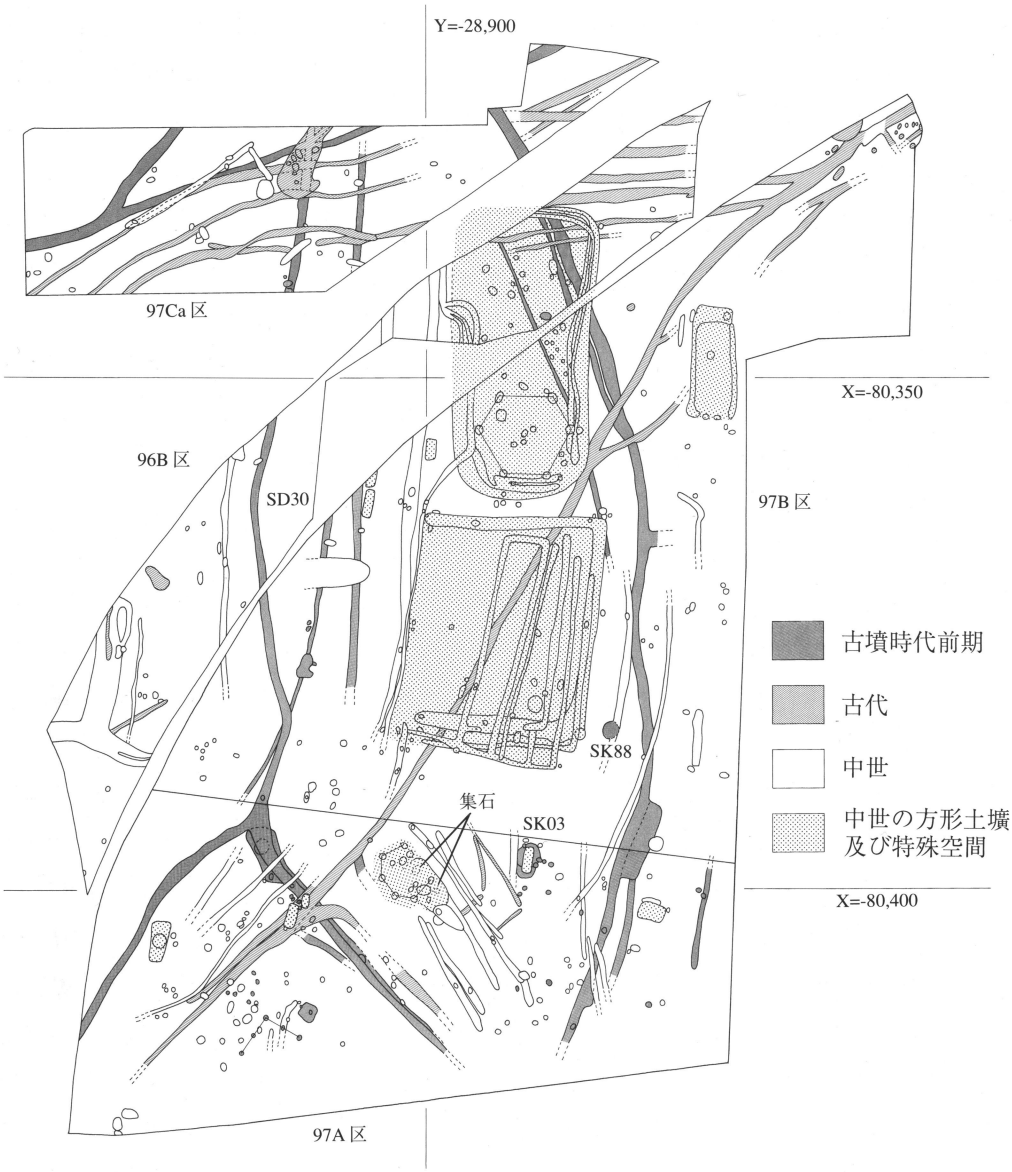
（大崎正敬・山本寿徳・田中伸明）



97Ａ区　ＳＤ30完掘状況



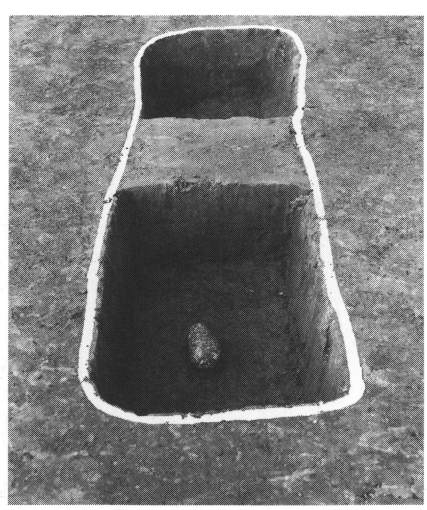
97Ｂ区　ＳＫ88遺物出土状況



第６図　Ｃ・Ｄ期遺構図（１：750）



97Ｂ区　区画溝群

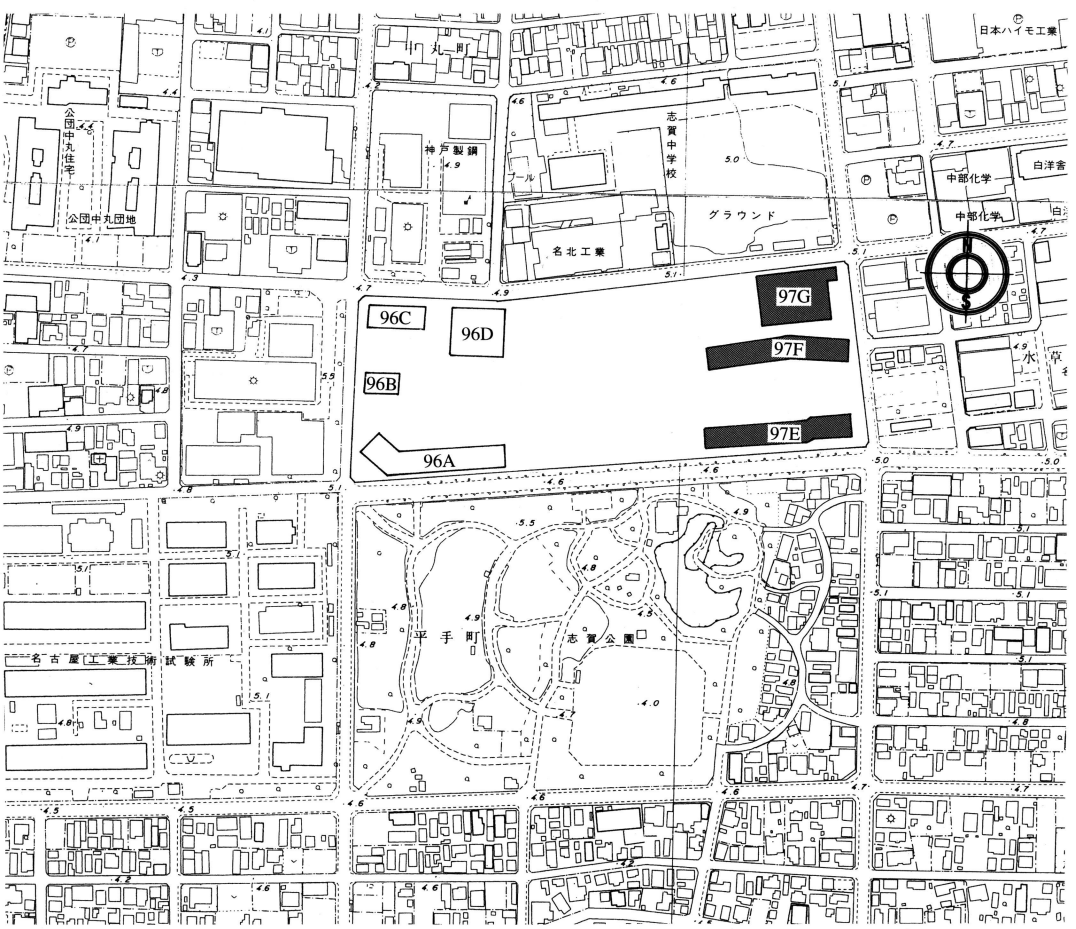


97Ａ区　方形土壙（ＳＫ03）

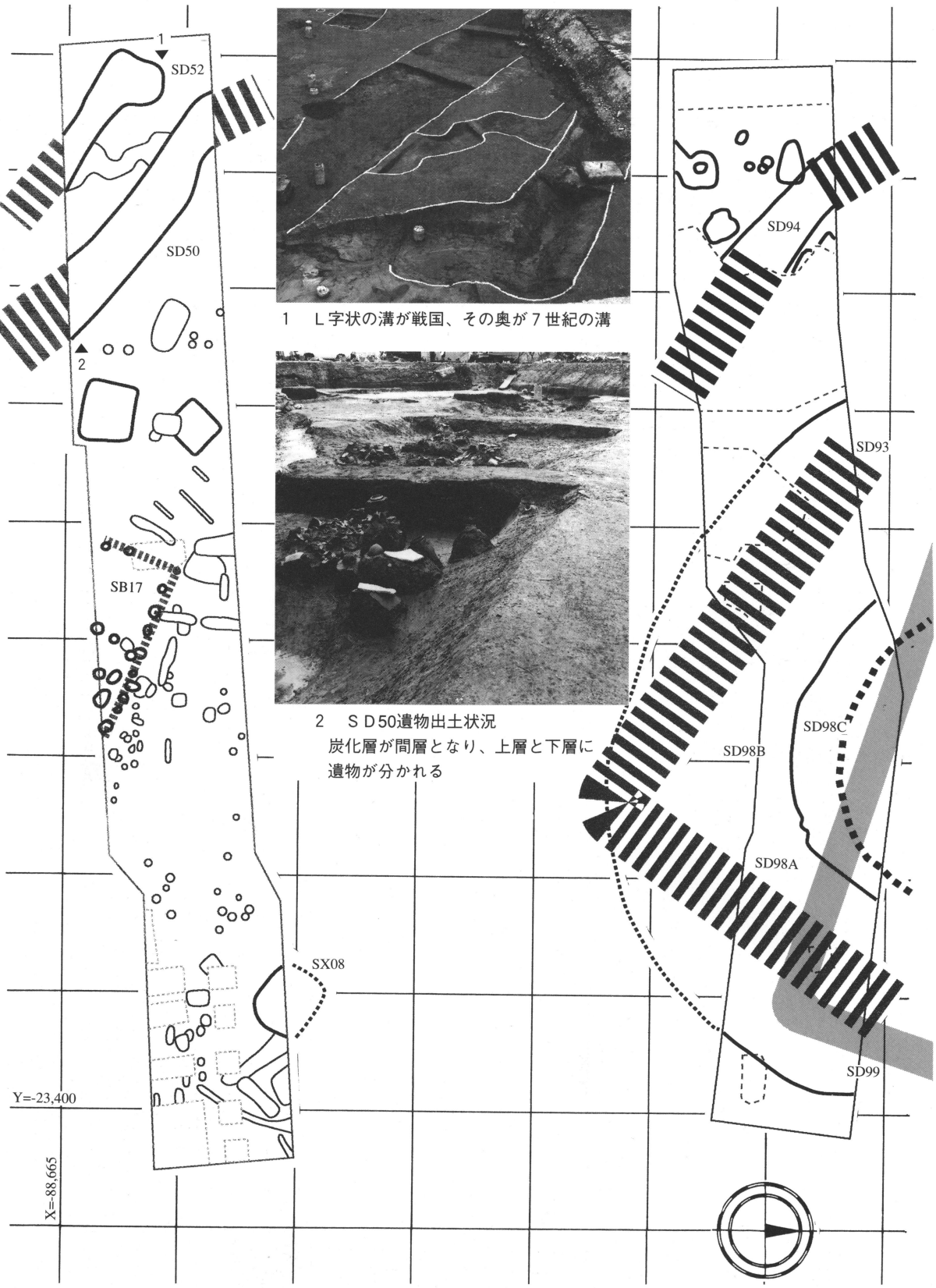
志賀公園（しがこうえん）遺跡

調査の経緯　発掘調査は住宅建設に伴う事前調査で、住宅・都市整備公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として昨年度から実施している。調査面積は4,000㎡。今年度の調査区は、昭和５年の志賀公園造成に伴う調査地点に隣接する。なお、昭和５年調査の遺物は金城文化財保護委員会により金城小学校玄関横ロビーおよび児童会室に展示・保管されている（調査研究編を参照）。

調査の概要　今年度の調査は３地区（Ｅ～Ｇ区）に分けて進めた。遺構面は概ね上面に古代～戦国と下面に弥生～古墳の２面確認できた。上面と下面の間層には１ｍ以上の洪水性堆積が見られる。標高は上面の検出が4.3ｍ前後、下面の検出が2.7ｍ前後。遺跡は弥生時代中期・古墳時代中期・古代（７世紀）・戦国（15世紀）に大きく分けられる。以下、Ｅ・Ｆ区を中心に記す。



第１図　調査区位置図（１：5000）



1　Ｌ字状の溝が戦国、その奥が７世紀の溝

2　ＳＤ50遺物出土状況
炭化層が間層となり、上層と下層に
遺物が分かれる

第２図　97Ｅ・97Ｆ区古代～戦国遺構図（１：500）

弥生時代～古墳時代　E区下面は調査区西側に弥生中期から古墳前期にかけての墓域が展開し、調査区中央部分に弥生中期の居住域が展開する。居住域では、円形の竪穴住居が2棟、堀立柱建物が3棟を検出した。円形の竪穴住居のうち1棟（SB12）は「松菊里型住居」に類似する形態として注目できる。約5mの円形プラン、主柱穴が4本、住居中央に小ピットを双方に持つ1×0.5mの長楕円形プランの土坑といった特徴を持つ。また、SB12は炭化材や粘土塊などが大量に含まれており、焼失住居と考えられる。床面付近には筵状の編み物が点在する。主柱穴は4本とも礎板が確認でき、そのうち1ヶ所からは柱痕もセットで確認でき、上屋構造を知る上でも重要な類例となった。墓域では廻間～松河戸期の円墳1基と弥生中期の方形周溝墓7基を検出した。方形周溝墓の形態は、周溝が全周するSZ02、2ヶ所陸橋部をもつSZ06・08、4ヶ所陸橋部をもつSZ03～05・07がある。主体部と思われる長方形の土坑をマウンド上に2基確認したが、遺物を全く含まないため、時期など不明な点があるものの、SK170は組合木棺の痕跡を確認し主体部と判断した。なお、各々の所属時期はSZ02が高蔵期、その他が概ね朝日期と考えられる。

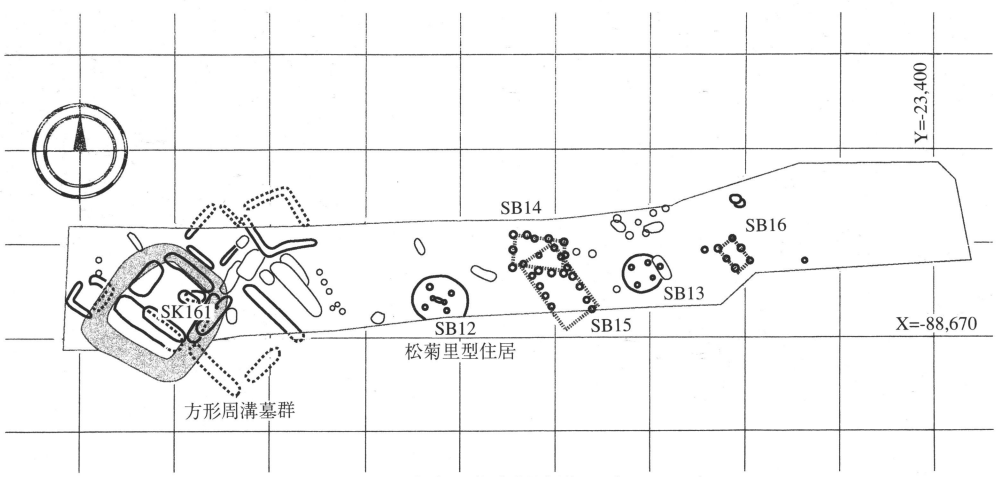
F区下面は松河戸期の建築部材を大量に含む土坑（SK216）のほか弥生時代中期前半の土坑・ピットなどが確認できた。SK216は板材・角材・丸木など多種にわたる建築部材が土坑の長軸方向に埋設された状態で出土している。



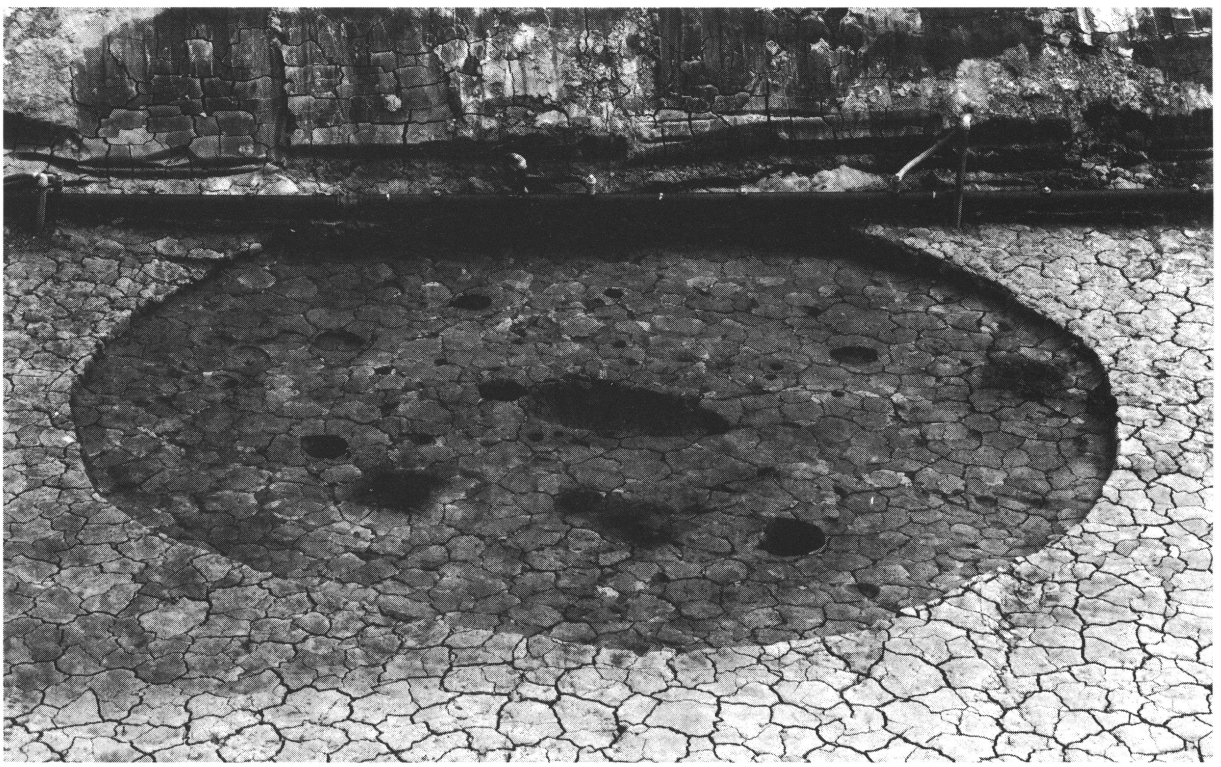
3　弥生中期掘立柱建物（SB14・15）



4　弥生中期方形周溝墓群



第3図　E区弥生時代中期遺構図（1：800）



5　「松菊里型」住居全景（ＳＢ12）
径約5.5ｍの円形住居。主柱穴が４本、両端に小穴をもつ長楕円形の土坑が中央付近にある。
検出時に、炭化材や焼粘土塊が多量に認められた。



6　主柱穴断面
柱穴下部に柱痕と礎板を確認した。



7　中央土坑（ＳＫ161）
上位に炭化層が覆い、その下部より条痕紋系甕が確認できた。

古代～戦国　E区上面は7世紀後半を中心とする遺構群と15世紀後半の大溝（SD52）を検出した。SD52は幅2.5m、深さ0.7mで、断面が薬研堀状となる。北西で隣接するSD54付近でL字に短く屈曲する。SD54は調査区西端に位置するため、断定はできないもののSD52とSD54の間に陸橋部が想定できる。また、この2条の溝を境として東側には15世紀後半の遺構・遺物が確認できなかったことから、志賀城の北東端に相当する遺構として注目できる。

SD52の東側に隣接するSD50は7世紀後半の遺物が大量に出土した溝として注目できる。須恵器は杯Hを中心に、杯G、甕、無蓋高杯、甑など、土師器は大型と小型の甕が出土した。規模は幅4.4m、深さ0.4m、皿状の浅い溝。溝の埋土から、炭化物層を境に上下に分層でき、層位的にも安定した資料となろう。SD50の東側には竪穴住居や堀立柱建物などが展開する。なかでもSB17は推定3×7間以上、10×20m以上の大型堀立柱建物となる。また、このSB17に隣接して2ヶ所から柱痕と礎板が確認できた。

F区上面は調査区東端から中央部分にかけて8世紀後半～13世紀前半の溝群（SD92・93・98)が展開する。さらに調査区西端には15世紀後半の溝（SD94）が北西から南東にかけて縦断する。

SD94は幅4m、深さ1m、断面がU字形となる溝。出土遺物のなかに古瀬戸後期の仏供や花瓶Ⅲ類（尊式花瓶）など仏具に関わる遺物が含まれる。13世紀前半の遺構としてはSD92とSX10があげられる。出土遺物のほとんどが完形品の灰釉系陶器椀。

SD93と98Aは同一遺構で、調査区外で屈曲する。時期は8世紀後半。この溝の下にはさらに3条の溝が確認できた。SD98B・Cは8世紀後半～9世紀前半代の溝。BとCの区別は堆積層の相違から判断した。さらに下面で確認したSD99は洪水性の堆積と上位に展開する3条の溝によりかなりの部分削平を受けていた。時期は7世紀中葉。これらの溝群の性格は不明ではあるものの、大規模かつ同一箇所に掘削を繰り返している点で重要な水路として機能していたことが考えられる。出土遺物に関しては、SD98CとSD99が注目できる。SD98Cについては、砂層からおびただしい量の須恵器・土師器などが出土した。なかでも知多式製塩土器・須恵器壺Gなど集落遺跡ではあまり見られない遺物を含む。墨書土器のなかには「山田」と判読できる資料も含まれ、地名の可能性も否定できない。SD99は完形品の提瓶・甕など副葬品に見られる遺物が多く出土している。いずれの溝出土遺物も層位的には安定した資料となろう。

F区下面は7世紀代の大溝（SD99）を検出。SD99は上面のSD98と洪水性の堆積により大きく削平を受けていたものの、部分的には確認することができた。出土遺物は完形品が多く、須恵器杯H類を中心に、提瓶、甕、土師器甕などが出土した。

まとめ　本年度の調査を要約すると以下の通り。

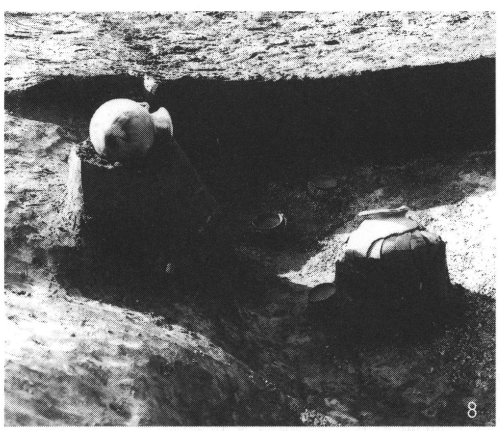
1．弥生時代中期の居住域と墓域を確認した。なかでもSB12は松菊里型住居に類似する形態の住居で注目できる。墓域の方形周溝墓は幾重にも重なりが認められるものの、

北西から南東方向に延びる微高地を基準に展開する。

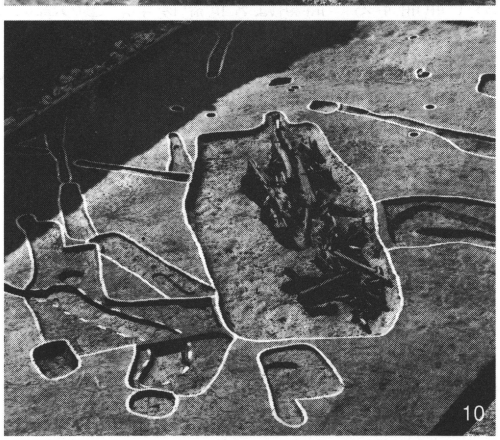
2．古代、特に7世紀後半代を中心とする遺構群は、F区の大溝を境に南側に展開する。逆に北側には8世紀以降の遺構群が展開するようである。F区の大溝群は自然流路の可能性もあるが、部分的に確認できるセクションや夥しい遺物の量から運河的な機能をもつ溝の可能性がある。

3．中世・戦国期の遺構はE区で2条、F区で2条の溝と大型土坑1基が確認されたのみ。E区のSD52・54は志賀城に関連する溝、城域の北東端となる遺構か？F区のSD94は地籍図に表記されている道と用水路の位置と合致する。15世紀代の村境の可能性がある。

（北村和宏・西原正佳・永井宏幸）

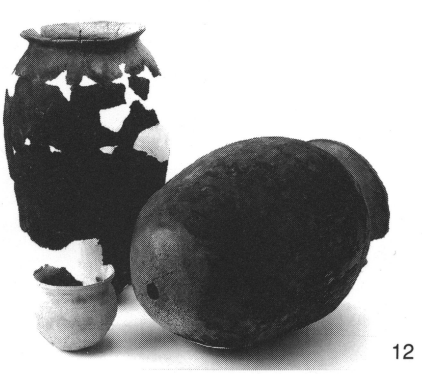

8


9


10

8　F区SD99遺物出土状況
9　F区SD98
10　F区SK216の建築部材出土状況
11　F区SD99出土遺物（須恵器）
12　F区SD99出土遺物（土師器）


11


12

下津北山遺跡（おりづきたやま）

調査の経過　下津北山遺跡は稲沢市北東部の下津北山町地内に所在し、青木川右岸と三宅川左岸の自然堤防帯に挟まれた後背湿地に立地する。

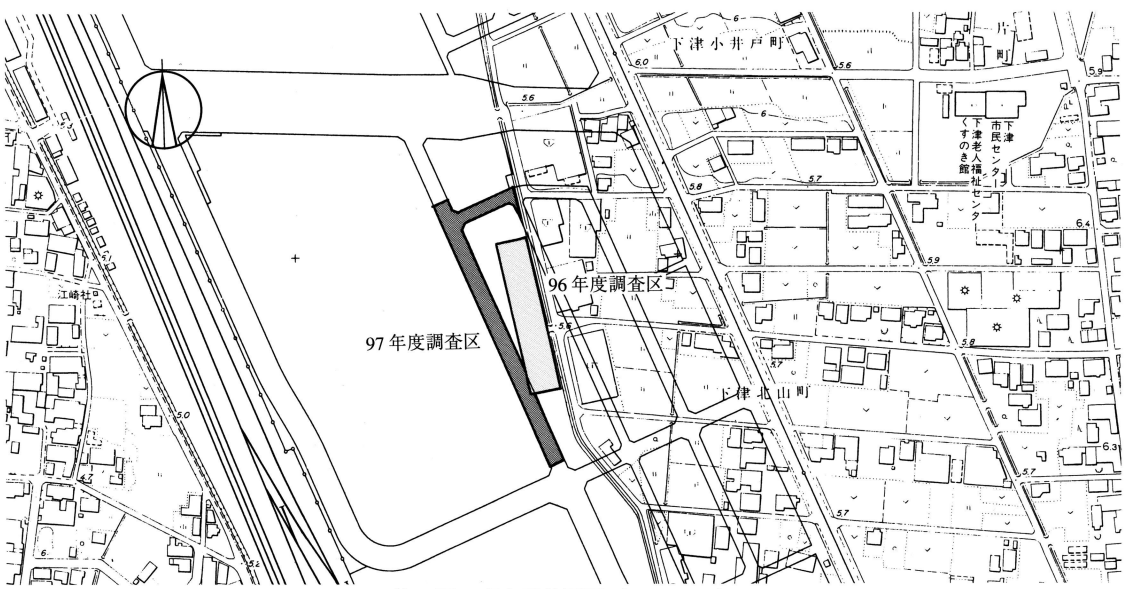
今回は尾張西部都市拠点地区開発に伴う事前調査として、住宅・都市整備公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成９年11月から平成10年３月にかけて2,100㎡の発掘調査を実施した。

調査の概要　昨年度の調査では、12世紀後半の寺院に関連する遺構、および14世紀前後の集落域と、性格が異なる２時期の遺構群を確認している。今回の調査では昨年度の調査とほぼ同様の成果を得たほか、寺院をめぐる空間的な様相が一層明らかとなった。

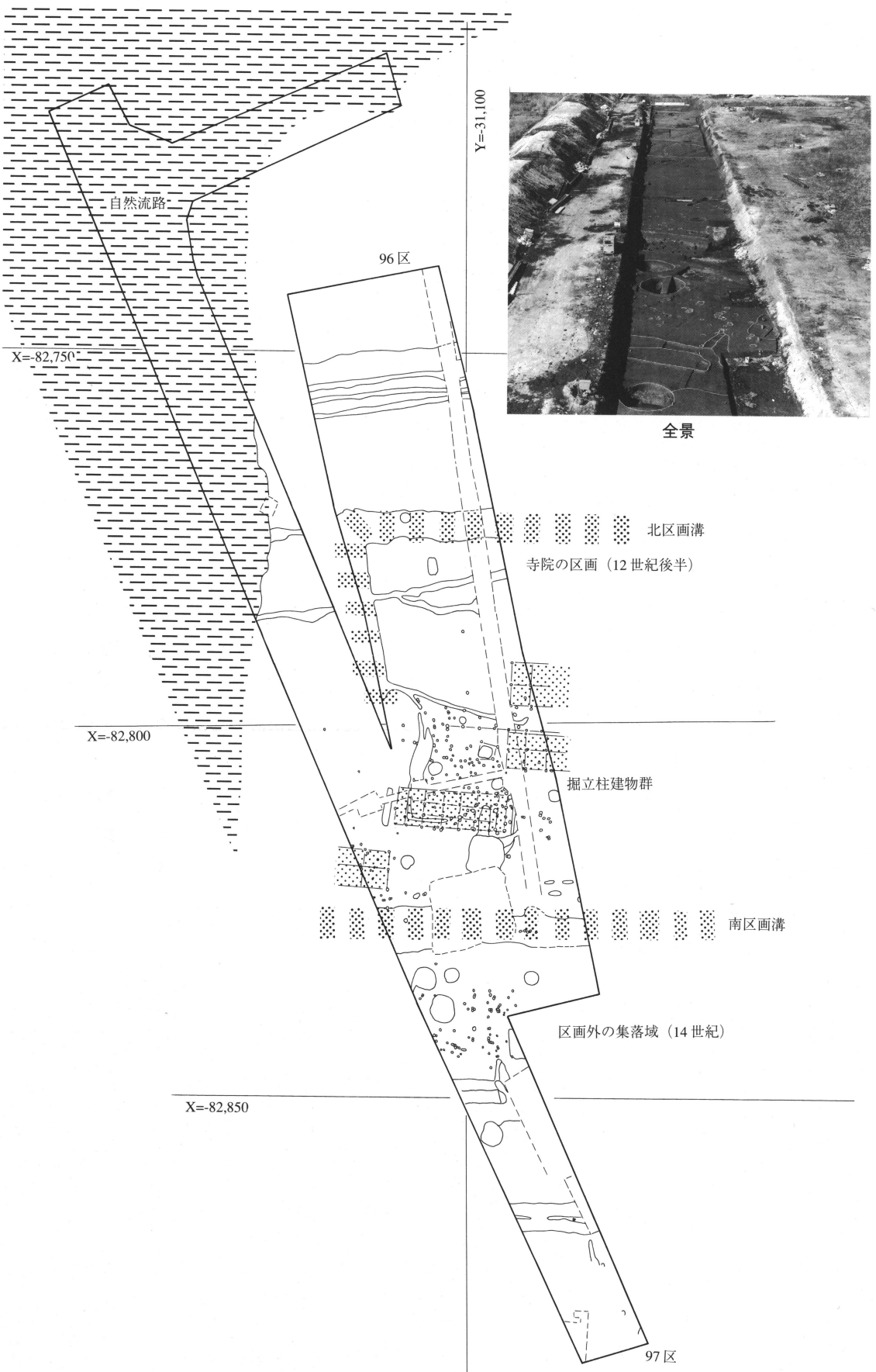
１２世紀後半の遺構としては、昨年度の調査で円塔や「僧」の墨書がある灰釉系陶器をはじめとする遺物が出土した南区画溝の延長部分を検出し、寺院の区画がさらに西側に広がることを確認した。これに対して昨年度確認した西側を区画する溝の続きは検出されず、空閑地が設けられていることから、区画の西側に対しては一部分が開放されていたと想定できる。また、昨年度確認した区画内の中心となる建物の続きを確認し、桁行が５間、梁行が３間で、東西に庇と雨落ち溝を伴う大型の掘立柱建物であることを明らかにしえた。遺物としては、南区画溝の上層から出土した陶硯、南区画溝に近接した井戸の上層から出土した提子の環座が特筆される。

１４世紀の遺構は井戸、柱穴群が寺院の区画溝以南で比較的密集して検出された。これらの遺構からは、灰釉系陶器、土師器の鍋などの日常雑器類が多く出土している。

上記の成果には、古代末から中世初頭における寺院の一つの姿を表すものとして、また中世から戦国期にかけての街道周辺における開発の進展を窺わせるものとして、看過することの出来ない内容が多く含まれている。　（早野浩二）



第１図　調査区位置図（１：5000）



全景

第２図　遺構図（１：800）

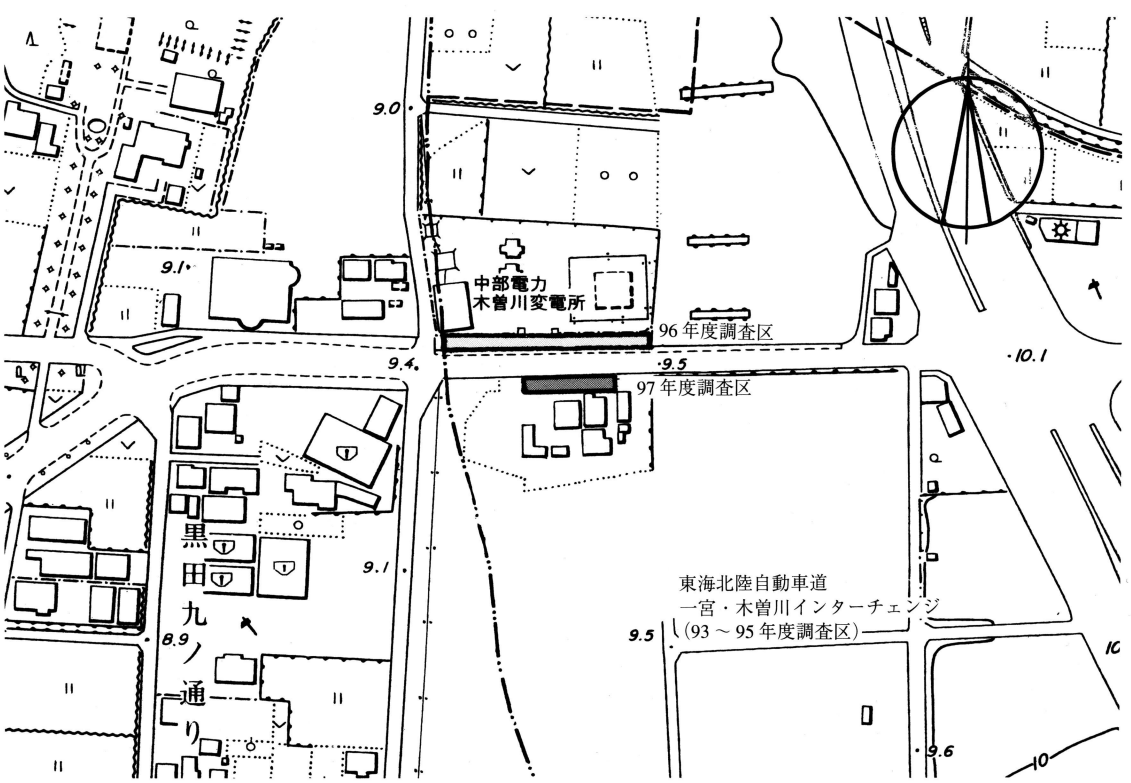
大毛池田（おおけいけだ）遺跡

調査の経過　大毛池田遺跡は一宮市北西部から葉栗郡木曽川町北東部にかけて所在し、木曽川によって形成された標高約９ｍ前後の自然堤防および後背湿地上に展開する古墳時代から戦国時代にかけての複合遺跡である。本遺跡では平成５～７年度に東海北陸自動車道の建設に伴い約40,000㎡の事前調査が実施され、平成９年度には調査報告書の刊行もみている。

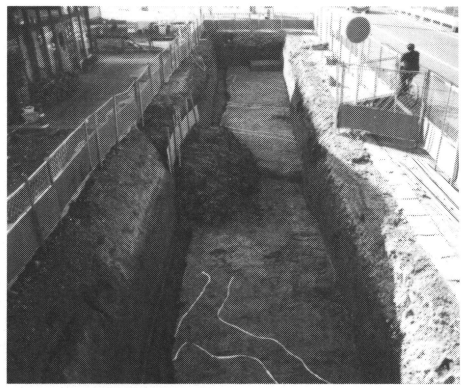
今回は県道萩原三条北方線の建設に伴う事前調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成９年11月に約150㎡の発掘調査を実施し、古墳時代前期の水田跡のほか、平安時代の遺構を確認した。

調査の概要　古墳時代前期の水田跡は第５層（暗紫色粘土層）において、畦畔の痕跡を平面的に認識することによって検出を行った。さらに上位の第４層（灰褐色粘土層）においても水田面が存在することが土層断面の観察によって確認されるものの、畦畔等は未確認である。第４層で確認される水田面は洪水性の堆積（第３層・灰白色極細粒砂）によって覆われる。

これらの遺構は大毛池田遺跡から隣接する門間沼遺跡の一部にかけて展開する広大な水田耕作地の一部分にあたるものであるが、本調査区においては小さな谷を境にして水田面が10～20㎝の高低差をもつことが特記される。自然地形を巧みに利用しながらの水田造成が行われたことを表わすものであろう。また、谷は植物遺体が互層状に含まれる粘土で埋積され、その間層として極細粒砂が堆積することから、幾度かの小規模な洪水を経ながらも、比較的穏やかな環境のもとで水田が営まれたことがうかがわれる。



第１図　調査区位置図（１：2500）



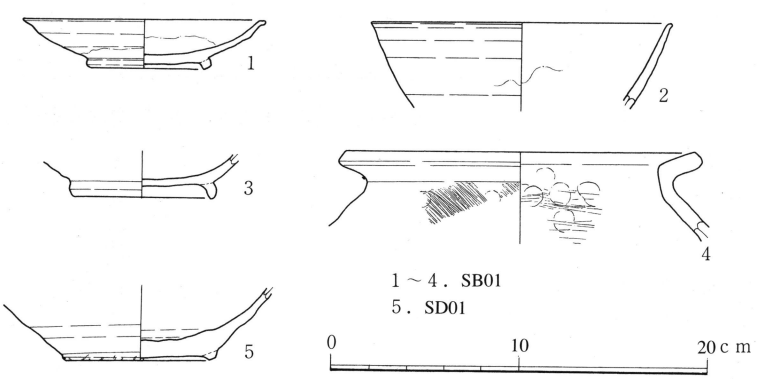
調査区全景（古墳時代の水田）

平安時代の遺構は第２層（灰色シルト層）で確認した９世紀後半～10世紀前半の竪穴住居１棟（ＳＢ01）、12世紀後半の溝１条（ＳＤ01）がある。調査区全体にかけて、近年の削平がかなり及んでいたため、遺構・遺物の検出はわずかにとどまった。

ＳＢ01は大部分が今回の調査区外にあたるため、その平面形については不明であるが、多量の焼土塊と炭化物、および被熱した拳大の礫数点を伴う深さ約20㎝の掘り込みが竪穴住居の竈部分に相当するとものと考えられる。竈部分からは灰釉陶器の椀・皿（第２図１～３）、土師器の甕（第２図４）が出土した。ＳＤ01は竪穴住居を大きく削平するかたちで北西から南東方向へと向かう。遺物の出土は希薄であるが、灰釉系陶器の椀（第２図５）が出土している。

近接する93Ａ区や94Ｆ区では大溝群の右岸域に展開する古代後期の居住域が確認されており、本調査区においても当該時期の居住域が及ぶことが今回の調査によって明らかとなった。さらには若干の空白期間を経たのち、中世前期の段階には新たに開発が及ぶようになるということが理解される。

今回の調査で得られた上記の成果は従前の調査成果に追加・補足されるものである。（早野浩二）



第２図　出土遺物実測図（１：４）



第３図　遺構図（１：200）

清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

調査の経過　清洲城下町遺跡は西春日井郡清洲町に所在する。清洲城下町遺跡の発掘調査は昭和59年から当センターや清洲町によって継続して行われている。五条川の河川改修にともなう事前調査は昭和61年から行われており、今次調査は平成9年11月から平成10年3月まで実施した。

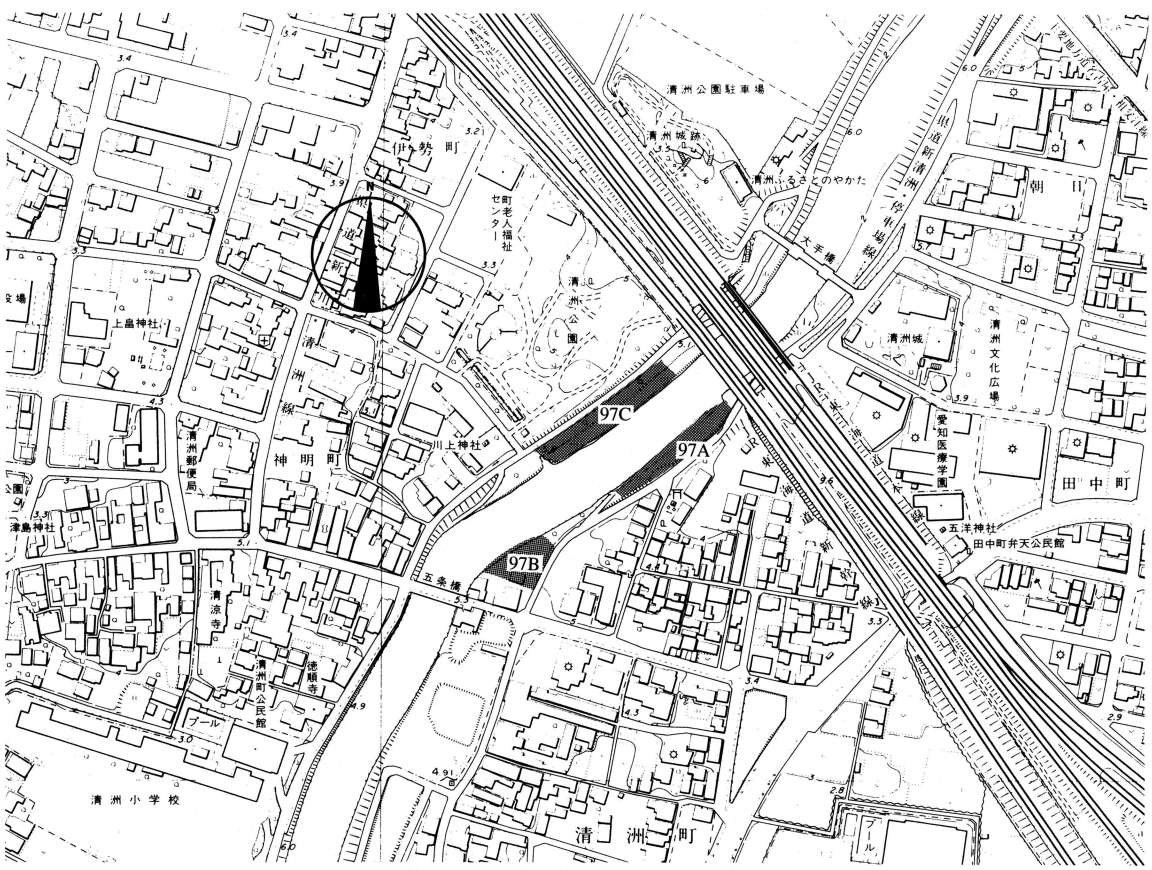
今年度はA・B・Cの3調査区で、このうちC区が平成8年度からの継続分である。C区の調査は、石垣の移築保存に関連する部分と、これまでの未調査部分を対象としたものである。C区の調査では新しい発見がいくつかある。

（1）石垣構築に用いられた石に墨書がみられたこと。

石垣の石をはずして洗浄したところ、側面に「雑賀」をくずし字で墨書したものが3点あった。ほかに「雑」のみ判読できるものもあり、これらも「雑賀」であった可能性が高い。また「六十五」と墨書されていたものもあった。

（2）方形張り出し部の杭列は基礎工事に伴うものであったこと。

昨年度に方形の張り出し部で検出された杭列には、芯をはずして断面多角形に成形された角材を主とするものと、芯もちの丸太材のみからなるものがあり、このうち前者には竹を半截あるいはそのままもちいて交互にカゴ状に編み込んだシガラミが伴うことがわかっ



第1図　調査区位置図（1：5000）

た。また、後者にもわずかににシガラミを伴うものがあったことから、これらの杭列は張り出し部分の基礎工事に関連するものである可能性が高い。

プランについては、角杭列（ア・イ・ウ）が川に沿って長方形に、丸杭列が逆Ｌ字状のプランをなしていることが注意されていたが、それがプラン変更を示す、つまり時期差であることが確実となった。そして、当初の長方形プラン西辺の杭列が２列（西列が古く東列が新しい）あること、南辺杭列のシガラミが上下２段認められ、その間に有機物や炭化物の堆積層があり、別時期と考えられることから、長方形プランで２時期、逆Ｌ字状プランで１時期の、都合３時期にわたることが明かになった。

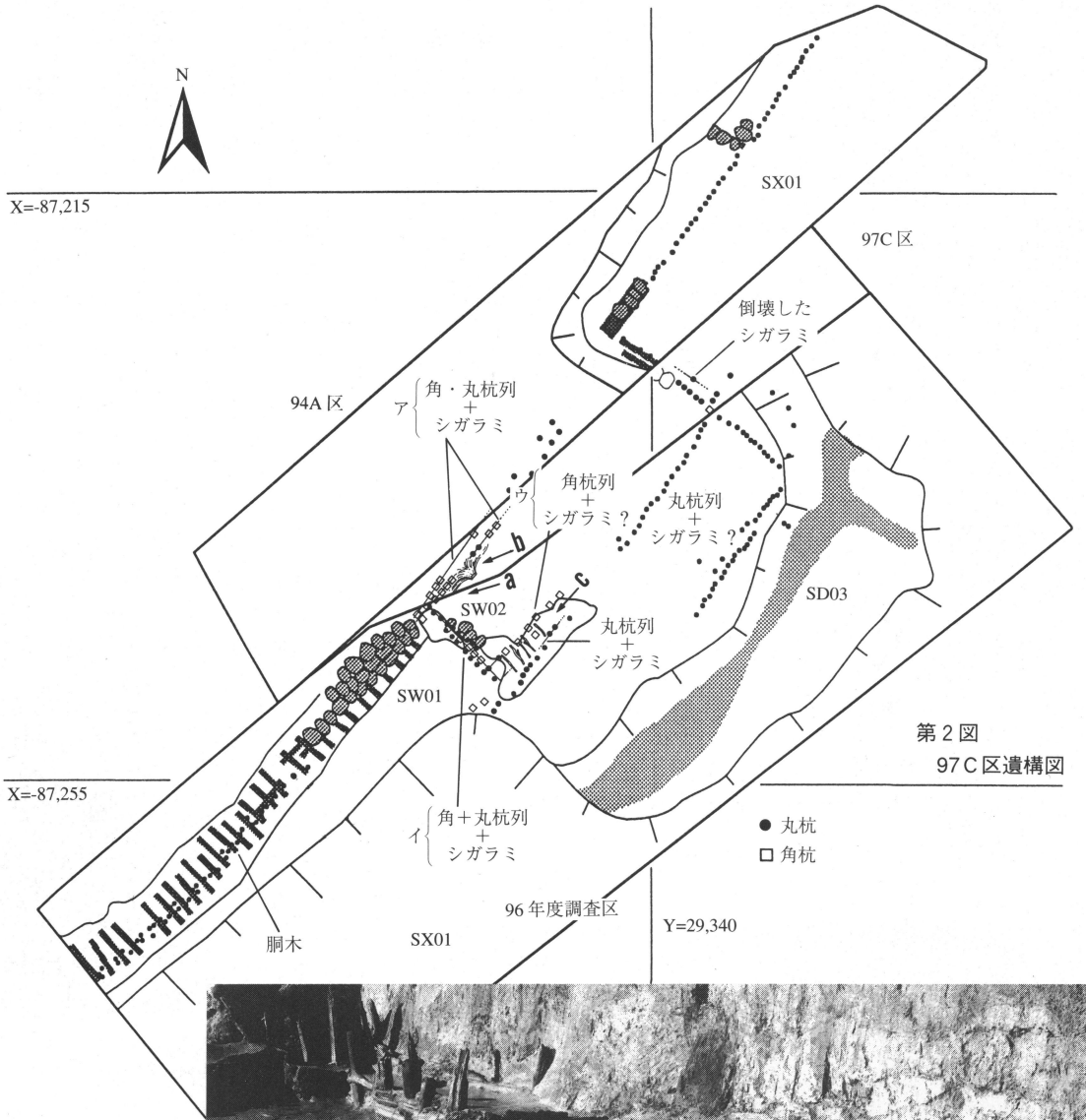
ところで杭列は、長方形プランでは東辺中央付近、逆Ｌ字状プランでは南面部分が空白となっている。この部分は杭が抜かれたのではなくもともと岸壁が無かったのだとすれば、当然斜面をなしていたと考えざるをえない。そして、川との位置関係から言えば、この箇所が船を着ける場所であった可能性がきわめて高い。すなわち、張り出し部は清洲城本丸にもっとも近接した「船着場」ということになろう。

（３）石垣の裏込めの礫中から「剣カタバミ」の金箔瓦、石垣構築以前の堆積層からも金箔（金泥？）軒丸瓦が出土したことから、金箔瓦をもつ建物が２時期ある可能性が高くなった。問題はこの建物がどこにあったのかという点だが、上述の船着場から本丸に至る通路に、ただの木戸ではなく、儀礼性を備えた門が設けられていたとすれば、関連性は高くなるのだが、調査においてはその痕跡さえ得られていない。

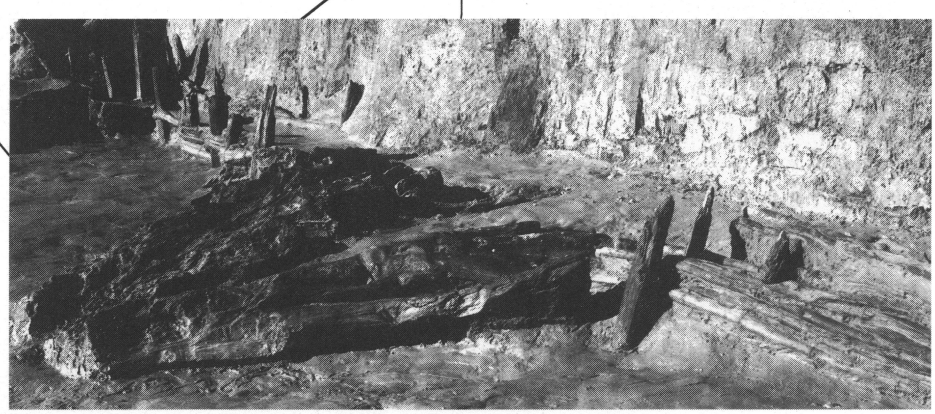
これまでの調査によって清須城の景観的イメージはかなり豊かになってきた。そろそろ検討する時にきたのかもしれない。　（黒田哲生・浅井厚視・石黒立人）



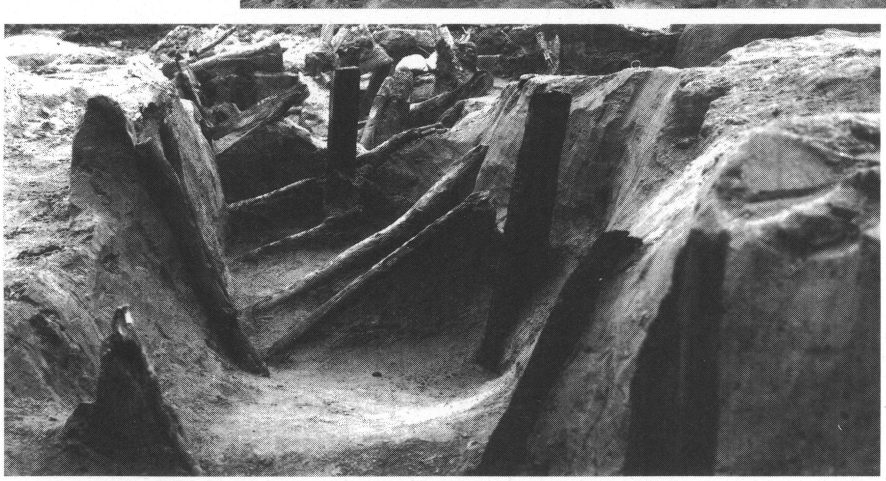
石垣からみつかった墨書



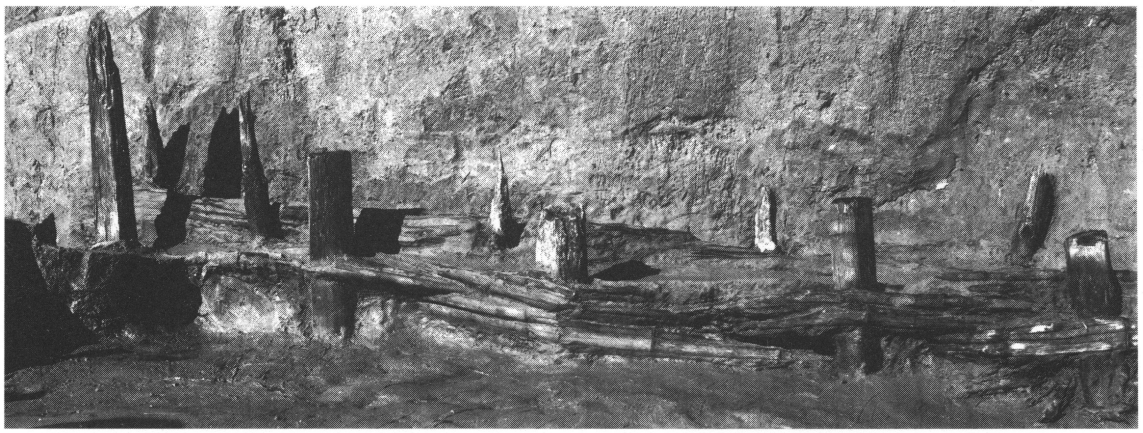
第 2 図
97 C 区遺構図



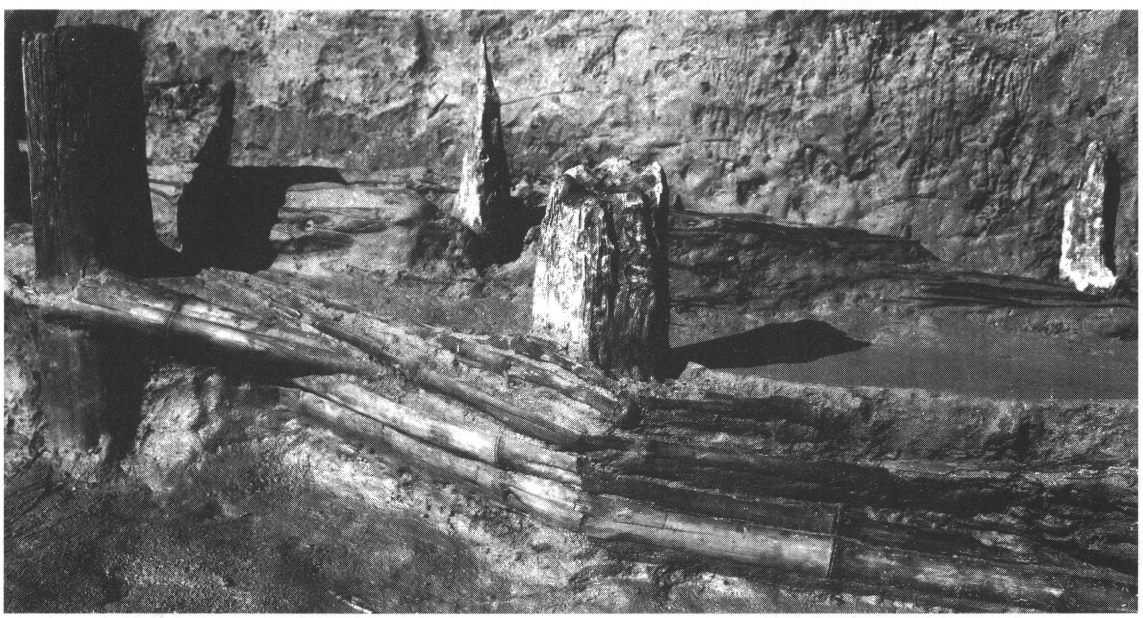
b



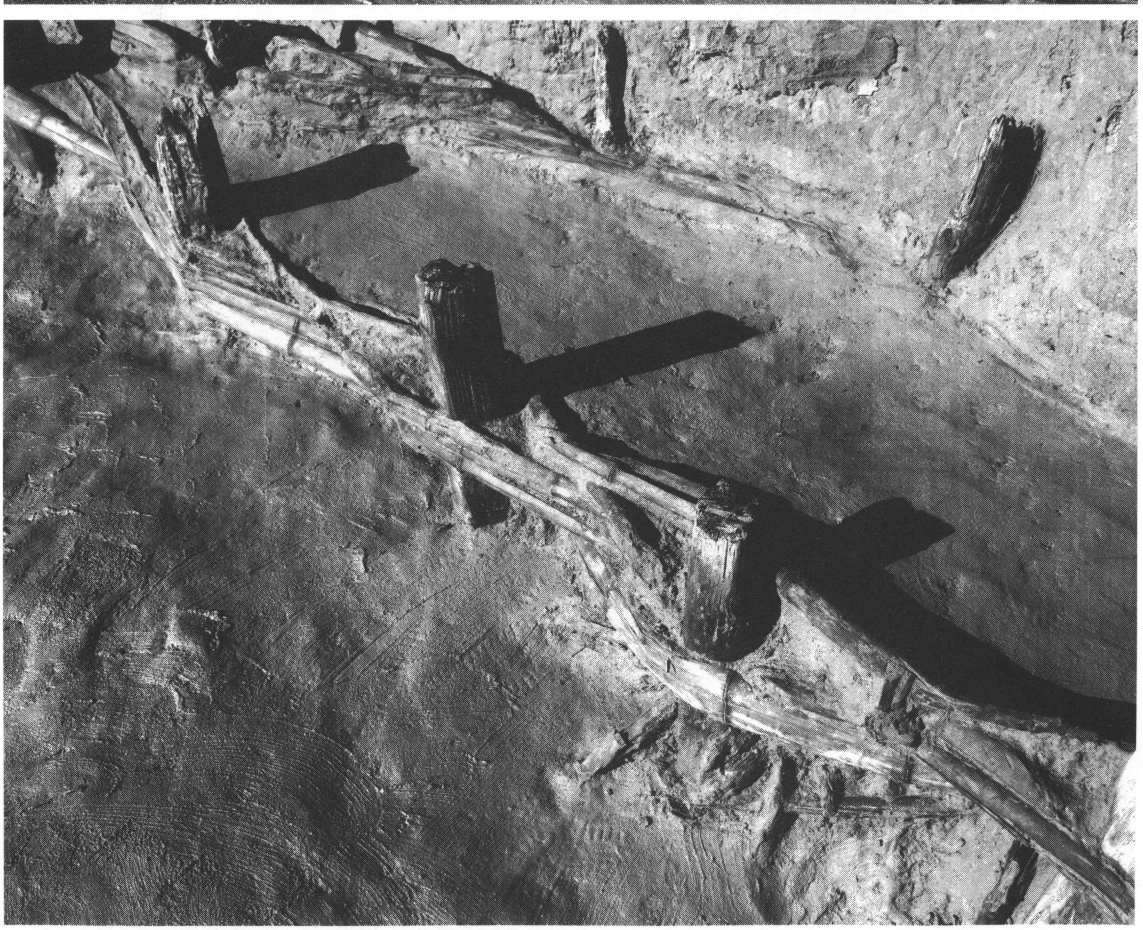
c



a



a



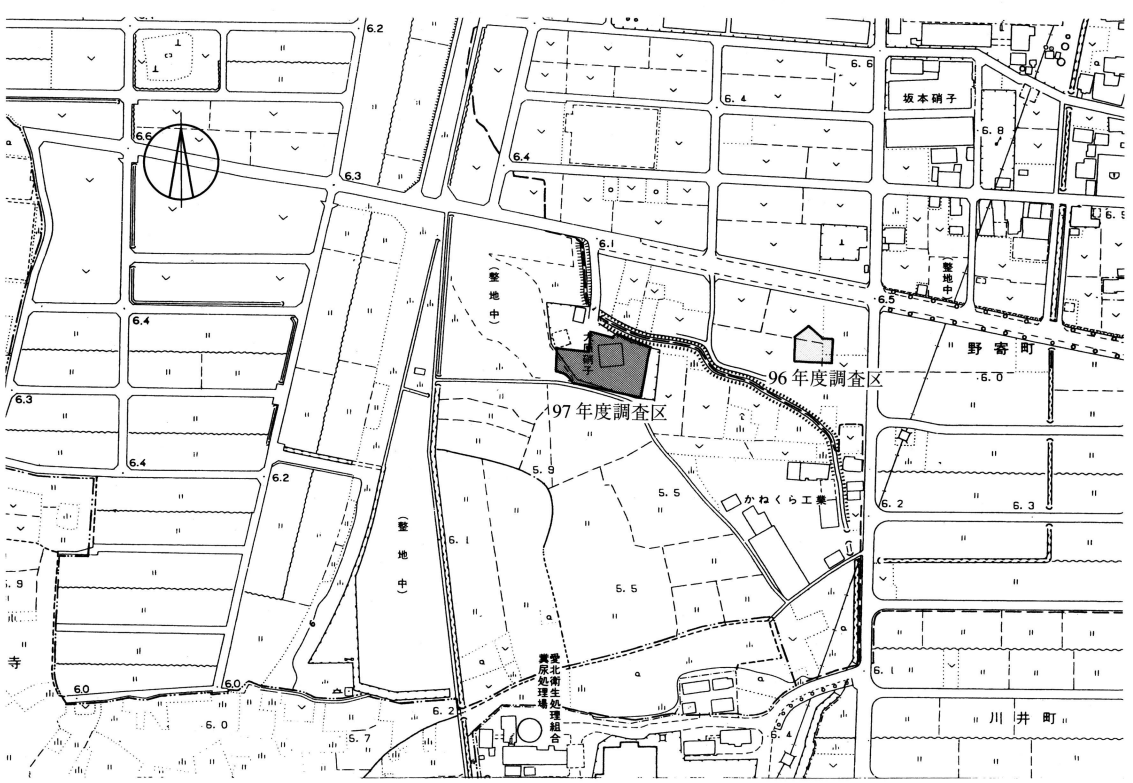
a

権現山（ごんげんやま）遺跡

調査の経過　権現山遺跡は、岩倉市の南西部にあたる北島町および野寄町地内に所在し、五条川右岸に形成された自然堤防上に立地している。周辺には元屋敷遺跡（一宮市）、北島白山遺跡、大地遺跡など縄文時代から弥生時代にかけての遺跡や稲荷山古墳（一宮市）、高塚古墳（西春町）などの古墳が多く存在している。

発掘調査は五条川右岸浄化センター建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成８年度より実施している。昨年度は本調査と範囲確認調査を合わせて500㎡実施し、古墳時代初頭の墳丘墓の存在が明らかになった。本年度はその西側にあたるガラス工場跡地1,800㎡を７月から10月にかけて調査した。

調査の概要　今回の調査で確認された遺構・遺物は、縄文時代後期（Ⅰ期）・弥生時代後期～古墳時代初頭（Ⅱ期）・古墳時代後期（Ⅲ期）・奈良時代後期（Ⅳ期）・江戸時代後期以降（Ⅴ期）の５時期に区分される。昨年度の調査では主にⅡ期の遺構が検出されたが、今回の調査で新たにⅠ・Ⅲ・Ⅳ期の遺構を確認したことにより、本遺跡が幅広い時代にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。特に、濃尾平野において縄文時代後期（Ⅰ期）の遺構・遺物が良好に検出された希有の事例として、今回の調査成果は今後の研究に大きく寄与するものになると思われる。加えて、古墳時代後期（Ⅲ期）に属する古墳が確認されたことにより、五条川流域に形成された古墳群の動態を知るうえでの資料が得られたほか、Ⅱ期の大型墳丘墓は、造営後に改変が行われた一事例として注目される。

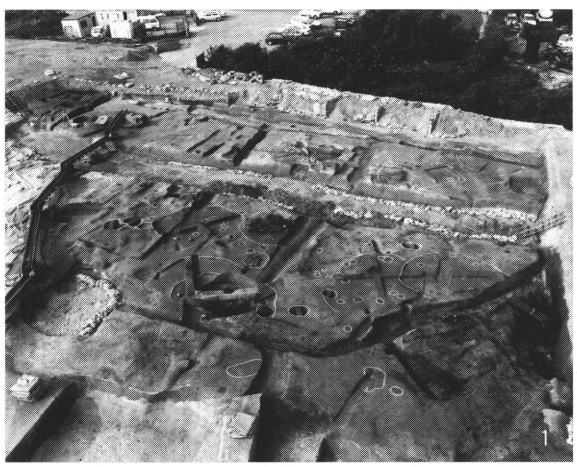


第１図　調査区位置図（１：5000）

Ⅰ期

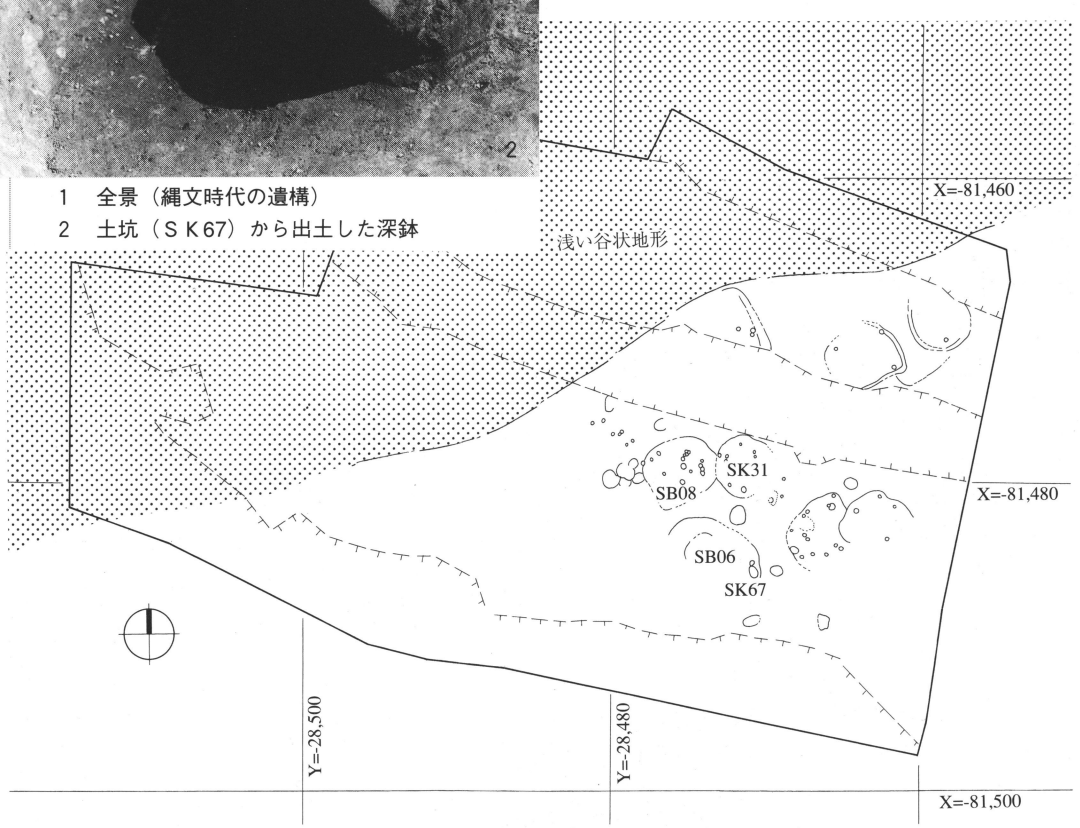
Ⅰ期の遺構は調査区の南東部分で竪穴住居8棟、土坑群が検出された。一方、調査区の北西部分は浅い谷状の地形となるが、縄文時代後期の土器（一部晩期の土器を含む）を良好に包含していた。竪穴住居の平面形は後世の削平のため判然としないものが多いが、円形もしくは不整な円・方形を呈するとみられ、4～5mの大きさを測る。SB08は検出面からの掘り込みが約30cmと最も深く、浅い掘り込み状の炉、貼床も確認された。SB06には住居址の一隅に炭化物で充填された土坑（SK67）があり、深鉢が縦に半截されたのちに伏せられた状態で出土した。小型の竪穴住居の可能性もある直径約3mの浅い円形の土坑（SK31）には遺物が多量に廃棄されており、上下の層位間で接合する土器の破片も多いことから、比較的短期間の廃棄とみることができよう。

遺物には深鉢をはじめとする縄文土器（後期前葉が主体）、石鏃、石錘などの石器、多数の剥片などがあり、竪穴住居からの出土は少ないものの、土坑からは比較的まとまった出土がみられた。





1　全景（縄文時代の遺構）
2　土坑（SK67）から出土した深鉢

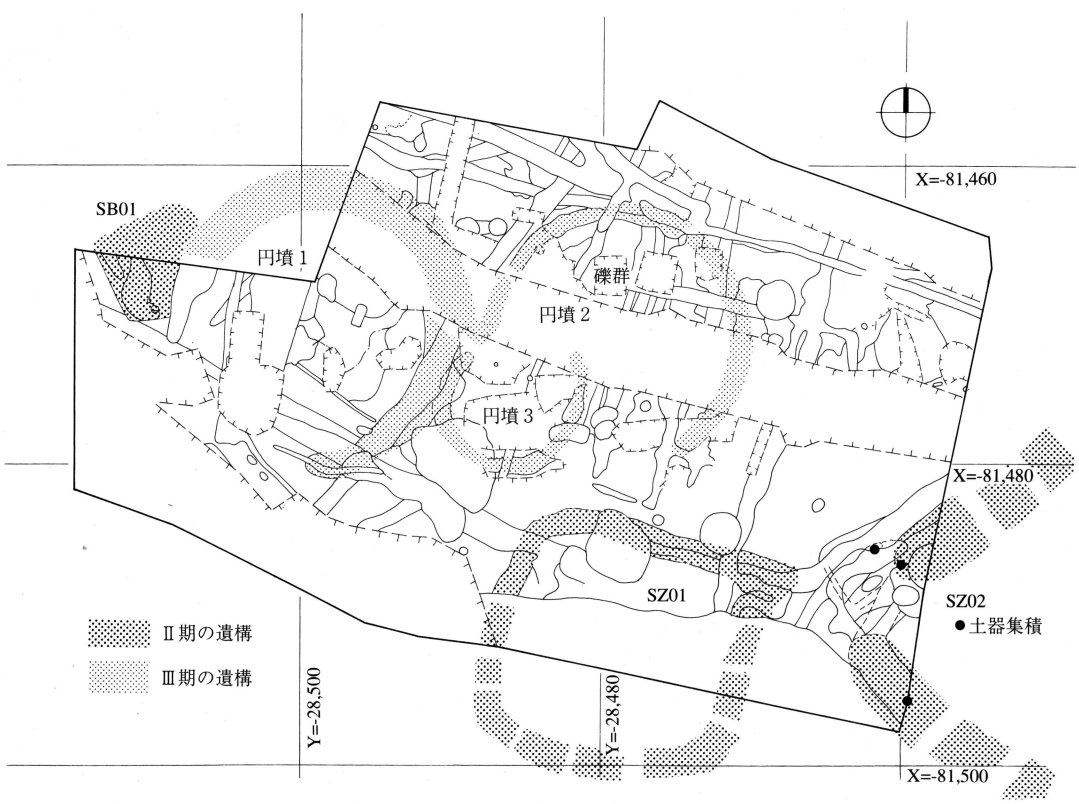


第2図　Ⅰ期遺構図（1：500）

II期　Ⅱ期の主要な遺構としては墳丘墓２基（ＳＺ01･02）、竪穴住居１棟（ＳＢ01）がある。昨年度の成果も合わせると、この時期の墓域と集落域は遺構のやや希薄となる部分を挟んで東西に展開すると考えられる。ＳＺ０２は南西隅付近の周溝の一部を検出したにとどまるが、周溝の深さは約1.5ｍ、幅は５ｍ前後で、この時期の墳墓としてはかなり大型の部類に属するものとみられる。また周溝の開口部には、周溝が完全に埋没する以前に溝や土坑が繰り返し掘削されたのち、幾度かにわたって土器廃棄が行われたようである。また、周溝の埋土は明瞭に3層に区分することができ、周溝から出土した土器には山中式後期から廻間Ⅰ式までのものが含まれることからも、ＳＺ０２がある程度の時間幅のなかで機能していたことをうかがわせる。ＳＢ０１からは、廻間Ⅰ式に属する甕、高杯などの良好な一括資料が得られた。

III期　Ⅲ期の遺構には円墳３基がある。直径約１５ｍに復原できる円墳１の中央では、川原石を使用した横穴式石室の一部を確認した。石室は南西方向に向けて開口していたとみられ、玄室の内法幅は約1ｍと小型である。石室の壁体としては、１段目の石材がわずかに遺存していたにすぎないが、床には礫が敷かれており、礫の直上から鉄製刀子１点が出土した。また須恵器の蓋杯が、石材を抜き取った際に抜き取り穴に落ち込んだ状態で出土し、墓坑の埋土からは須恵器の提瓶の破片が出土した。

円墳１の周溝のほかにも弧状を呈する溝が数条認められ、切り合い関係から古墳の周溝と判断される。円墳３の溝の上層には川原石が集中して検出される部分があり、古墳の破壊が比較的早い段階に進行していたことを表わしている。

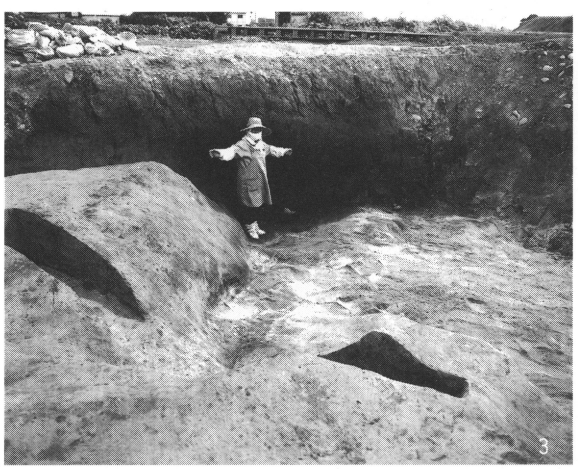


第３図　II～Ⅴ期遺構図（１：500）

Ⅳ・Ⅴ期　Ⅳ期の主要な遺構には大溝２条と、竪穴住居１棟がある。大溝は幅約１～２ｍ、深さは最大で約１ｍを測り、Ⅱ・Ⅲ期の溝を再掘削するようなかたちで掘られている。大溝や竪穴住居から出土した須恵器は折戸10号窯式を中心とし、杯、蓋、鉢、甕、長頸瓶など、器種も比較的豊富である。

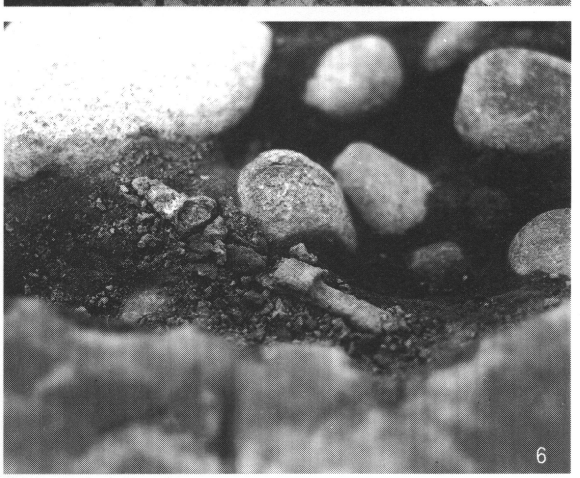
Ⅴ期の遺構としては屋敷を区画する溝、井戸があり、そのほとんどは19世紀後半以降に属するものである。これは明治17年の地籍図に「宅地」と表記されていることとも一致する。

（大崎正敬・早野浩二）











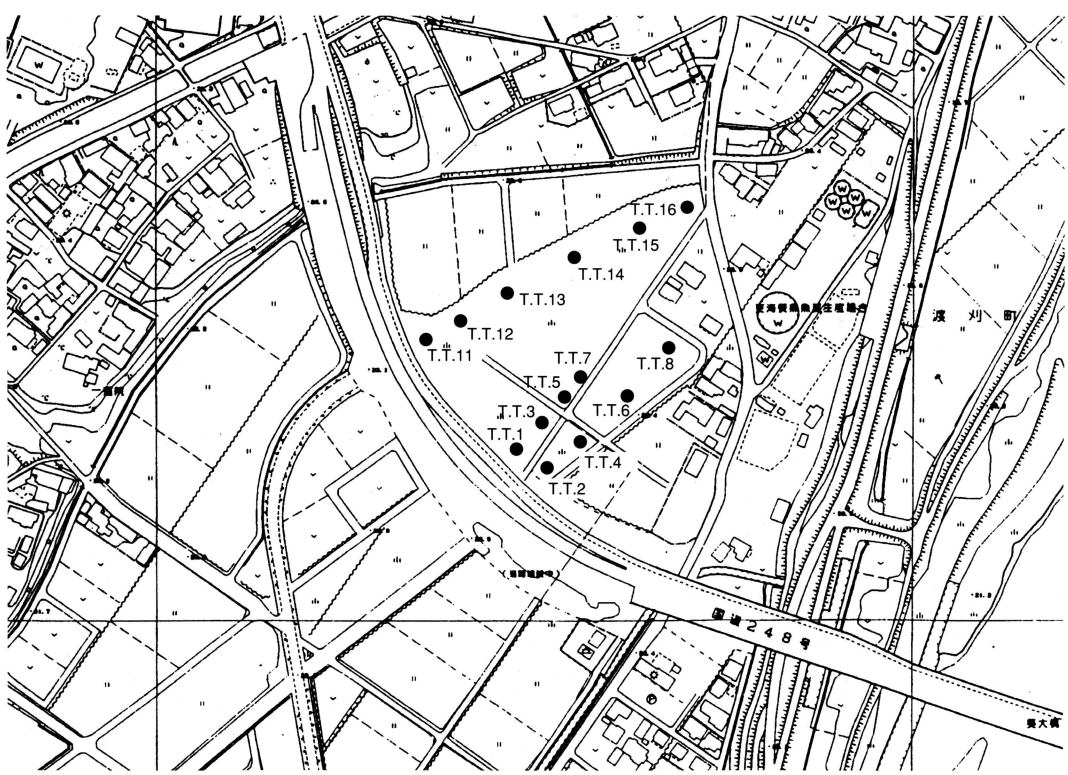
3　ＳＺ02南溝の断面
4　ＳＺ02開口部への土器廃棄
5　円墳１全景
6　円墳１から出土した刀子
7　全景（古代・近世の遺構）

郷上北（ごうがみきた）遺跡範囲確認調査

郷上北遺跡は豊田市鴛鴨町郷上・天神前から渡刈町川田にかけて存在し、碧海台地端から矢作川沖積地に広がる遺跡である。調査は第二東海自動車道予定地内と国道248号線が交差する地点を中心に実施した。調査方法は第二東海自動車道予定地内で８ケ所（T.T.1～T.T.8）、国道248号線予定地内で６ケ所（T.T.11～T.T.16）にそれぞれ範囲確認用トレンチを設定した。断面観察と平行して、各層位単位の遺構検出作業を行い、遺構の検出と遺物の出土状況を精査し、遺跡の性格とその範囲を確認することを主眼にした。なお調査面積は第二東海関係が200㎡で国道248号線関係が100㎡である。

調査の結果、鎌倉時代を中心とした遺構・遺物の広がりが明らかとなったが、調査地点で大きく２つに区分できる。すなわち第二東海自動車道建設予定地内では、後世の著しい削平によって遺構が希薄であったが、一部には古墳時代の溝状遺構を検出することができた。一方で、碧海台地直下にあたる国道248号線建設予定地内では、ほぼ全域にわたって良好な遺構・遺物の出土が見られ、さらに包含層の堆積も確認でき、出土した遺物からその中心が鎌倉時代に所属するものと推定できる。したがって郷上北遺跡とした範囲内には広範囲に中世期を中心とした遺構群が存在し、第二東海自動車道建設予定地内では大きく削平され、国道248号線建設予定地内では良好に残存しているものと考えられる。

（赤塚次郎）



郷上北遺跡調査地点（１：5000）

今町（いまちょう）遺跡範囲確認調査

今町遺跡は豊田市今町地内に存在する遺跡で、碧海台地端部に立地する。調査は第二東海自動車道建設予定地内で実施し、10ケ所に範囲確認トレンチを設定した。断面観察と平行して、各層位単位の遺構検出作業を行い、遺構の検出と遺物の出土状況を精査し、遺跡の性格とその範囲を確認することを主眼に実施した。なお調査面積は200㎡である。

調査の結果、戦国から江戸時代の遺構が広範囲に分布し、遺跡の中心が15世紀から18世紀にあることが確認できた。その他では、T.T.8およびT.T.9トレンチでは鎌倉時代の灰釉系陶器や奈良時代の須恵器・土師器が出土し、調査地区の東南側には古代から中世にかけての遺構の存在も考慮する必要がある。またT.T.1以西では明確な遺構は確認できてない。したがって遺構・遺物の範囲は、現在の今町集落が存在する台地面から矢作川への緩斜面にかけて分布しているものと推測することが可能である。　（赤塚次郎）



今町遺跡範囲確認調査地点（1：5000）

権現山（ごんげんやま）遺跡　範囲確認調査

調査の経過　権現山遺跡の発掘調査は五条川右岸浄化センター建設に伴う事前調査である。昨年度は事業区域内北東部にあたる岩倉市北島町および野寄町の五条川右岸微高地上において、本調査と範囲確認調査を計 500㎡行った。その結果、微高地全体に古墳時代を中心とする遺構が展開していることが明らかになった。本年度は一宮市伝法寺地区を中心とした、事業区域内南西部の範囲確認調査を平成９年５月から６月にかけて約200㎡行った。

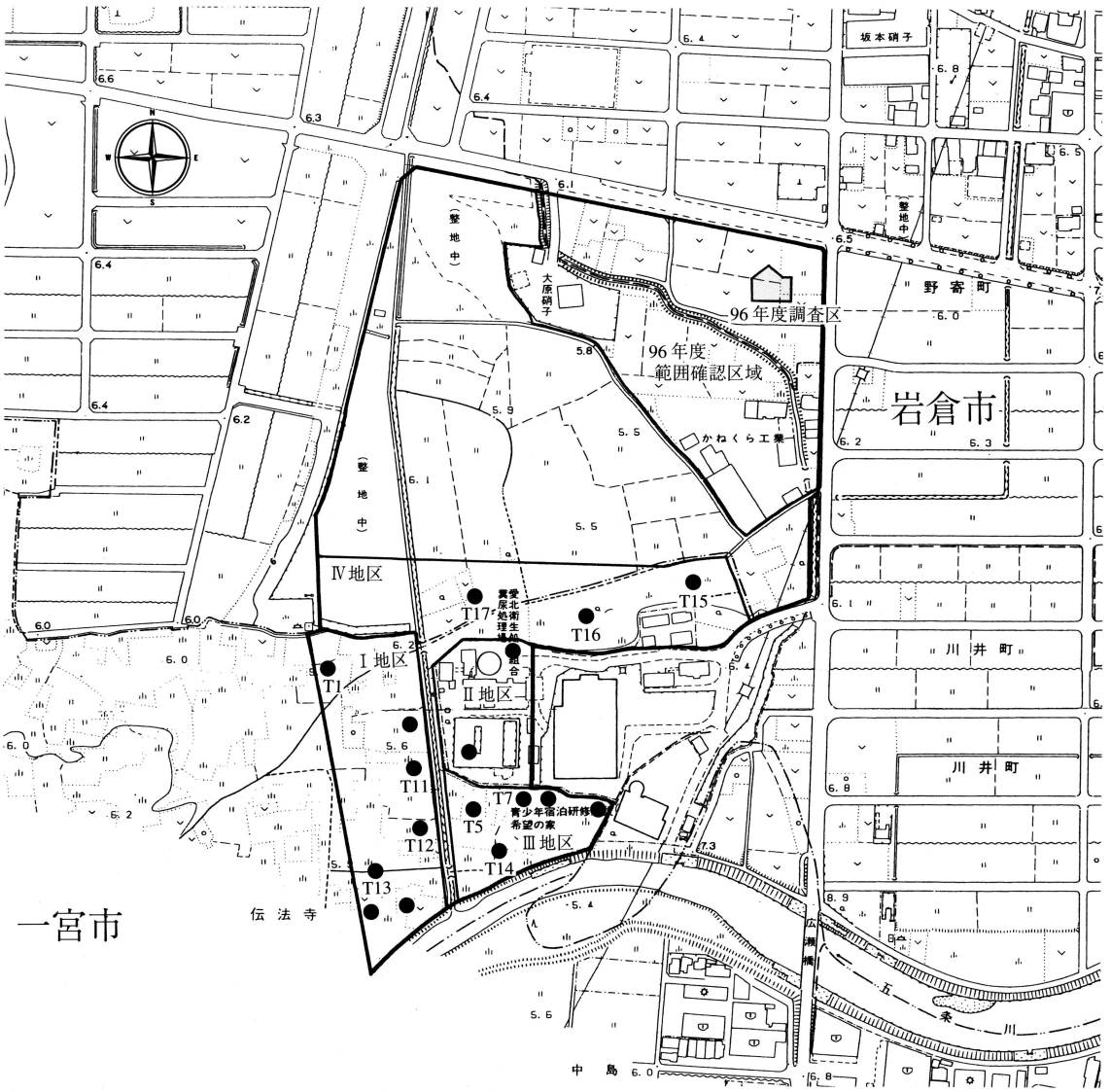
調査の結果　調査区域を大きく４地区に分け、各地区とも任意にトレンチを設定し、バックホウによる掘削を行った後、土層の断面観察により、遺構・遺物の有無を確認した。

Ⅰ地区　全体に２ｍ以上の客土が認められ、また各トレンチでは所々で撹乱が深く及ぶ箇所が認められた。Ｔ１では黒褐色粘土層が緩やかに下降する部分が認められ、この土層を掘り込む溝１と、黒褐色土層の下位に掘削されている溝２および溝３が確認された。Ｔ１からは遺物は出土していないものの、T11の黒褐色粘土層から弥生時代前期の土器と石器が出土したことから、この土層が弥生時代前期の遺物包含層で、溝１～３は弥生時代前期を相前後する時期のものと考えられる。またT11においても黒褐色粘土層の落ち込みと、基盤層（灰白色細砂層）を掘り込む遺構を確認している。ただし、Ｔ１をはじめとする各トレンチで見られた遺物包含層はこれまで権現山遺跡で確認されていない堆積であること、また展開する遺構・遺物も権現山遺跡とは様相を異にすることから、別個の遺跡として扱うことが望ましく、一宮市教育委員会と協議の上、「伝法寺野田遺跡」とした。しかしT12とT13を結んだラインより南は近年の天地返しにより遺構面は残存していなかった。

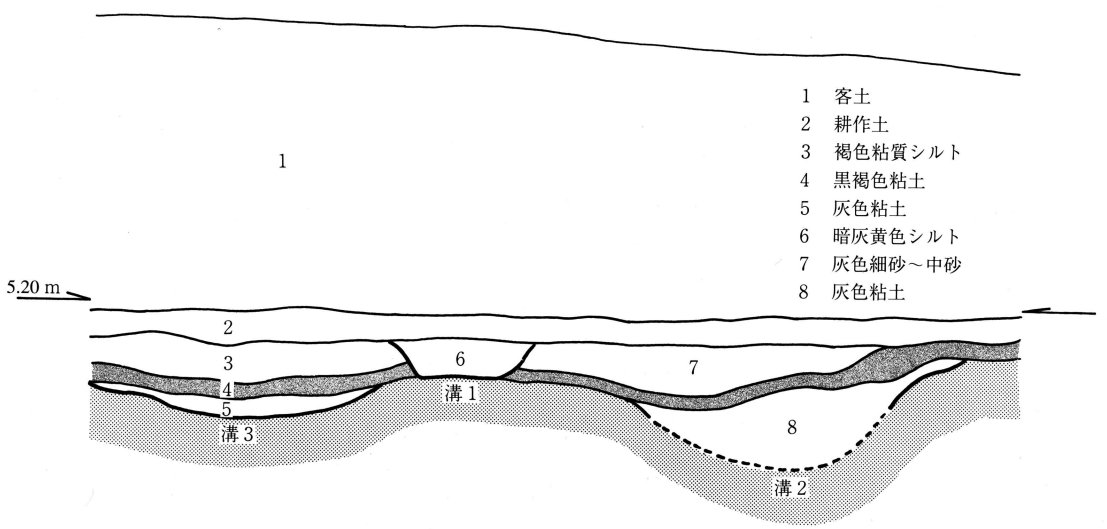
Ⅱ地区　愛北衛生組合糞尿処理場の跡地である。２ｍ前後のバラスによる整地層があり、その下位には産業廃棄物が埋められており、遺構面は認められなかった。

Ⅲ地区　五条川沿いで島畠が点在し、散布地として登録されている地区であるが、島畠上に設定したＴ５では、遺構・遺物は各堆積層で全く検出されなかった。ただし、Ⅰ地区で確認された黒褐色粘土層および基盤層は五条川に向けて落ち込んでいき、T11と比高差が約１ｍとなる。このことからT11と５の間で南東方向に地形が急激に落ち込む可能性が高く、安定した黒褐色粘土層の堆積が認められる微高地上に伝法寺野田遺跡は展開するものと判断できる。またＴ７と14を結んだラインより南は、表土下で砂とシルトの互層からなる洪水性の堆積がみられたため、比較的最近までの五条川の活発な河川活動が繰り返されていた場所と考えられる。

Ⅳ地区　Ⅰ地区で見られた遺物包含層の北への広がりを確認する目的で、T15～17を設定した。T15・16は天地返しが行われており、基盤層まで撹乱を受けていた。T17では表土掘削後ただちに基盤層となる黄灰色砂層がみられ、さらに20～30㎝下で粗砂層に達した。この堆積は96年度で確認している層序に対応し、権現山遺跡と伝法寺野田遺跡の境界がⅣ地区とⅡ地区の間にあることが明瞭になった。　（大崎正敬・早野浩二）



第１図　調査区位置図（１：5000）



第２図　Ｔ１西壁土層断面図（１：50）

瀬戸地域範囲確認調査

東海環状自動車道関連で５遺跡の、国道363号線改良関連で４遺跡の範囲確認調査を実施した。

東海環状自動車道関連

遺跡名	所在地	調査期間	面積	
御船城跡	豊田市御船町地内	1997.5.1～5.19	200㎡	総計で49箇所のトレンチを設定。県道豊田明智線以東の御船川周辺部では、数片の山茶椀が現耕作土中より出土したほか遺構・遺物包含層は認められなかった。県道以西の地籍図で推定される御船城跡の方形居館南側の３トレンチにおいて、遺構は検出されなかったものの、戦国時の遺物包含層を確認する。なおこの推定方形居館周辺部は、未買収地が多く遺跡の範囲を明確にするためにはなお調査の必要があると判断する。
巡間Ａ遺跡	瀬戸市惣作町地内	1997.6.11～6.21	100㎡	総計で10箇所のトレンチを設定。小さな谷底平野に相当する低地部のトレンチでは湧水が激しく、調査は難航する。低地部のトレンチにおいて、惣作川上流ないし周辺の山地からの流入土と考えられる土層中より、若干の遺物（古代～近世・近代？窯道具を含む）が出土をみたが、遺構は認められなかった。周辺に遺跡の存在が予想されるものの、調査対象地に遺跡は及んでいないと判断する。
瓶子窯跡	瀬戸市凧山町地内	1997.7.8～8.19	200㎡	事前に磁気探査を実施し、その所見をふまえ、総計で19箇所のトレンチを設定。厚さ２m以上の灰原、作業場とみられる平坦地を確認する。窯体については大型の連房式窯の焚口の一部が用地内にかかる。なお、磁気探査および地表面の観察から、少なくとも斜面上にもう１基の連房式窯（用地外）が存在することがうかがわれる。出土遺物からみてこれらは、17世紀初～末にかけての時期のものと推定される。
凧山窯跡	瀬戸市凧山町地内	1997.6.25～7.7	100㎡	事前に磁気探査を実施し、その所見をふまえつつ、４箇所の細長いトレンチを設定。調査対象地の北東側の谷奥において山茶椀の窯体および灰原が地上観察で確認でき、磁気探査の所見もこれを裏付ける。しかしながら用地内においては、各トレンチとも遺構・遺物は、認められず、磁気探査の所見と一致を見た。したがって調査対象地には凧山窯は及んでいないものと判断する。
長谷口遺跡	瀬戸市長谷口町・八王子町地内	1997.6.11～6.25	100㎡	木下川右岸に７箇所、左岸の県道瀬戸設楽線・赤津川間に９箇所のトレンチを設定。右岸では、縄文時代および中・近世の遺構・遺物包含層を確認。左岸では、縄文時代早期（粕畑式）および中世の遺構・遺物包含層を確認した。調査所見などをふまえ今後は、左岸を「八王子遺跡」と呼称することとする。

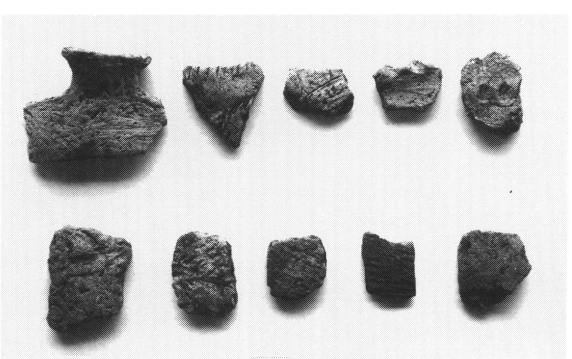
国道363号線改良関連

遺跡名	所在地	調査期間	面積	
上品野蟹川遺跡	瀬戸市上品野町地内	1997.4.14～4.21	100㎡	調査対象地を、便宜的に４地区にわけ、総計で17箇所のトレンチを設定。明確な遺構は認められなかったものの、古代～中・近世の遺物包含層を確認する。未買収地の関係で、一部範囲の確定が出来ない地区がある。
桑下城跡	瀬戸市上品野町地内		150㎡	調査中
桑下東窯跡	瀬戸市上品野町地内		100㎡	調査中
西金地遺跡	瀬戸市上品野町地内		100㎡	調査中

（北村和宏・小澤一弘・後藤英史）



瓶子窯出土品



長谷口（八王子）遺跡出土の縄文土器

福池（ふくいけ）古窯発掘調査報告

福池古窯（ふくいけ）



調査風景



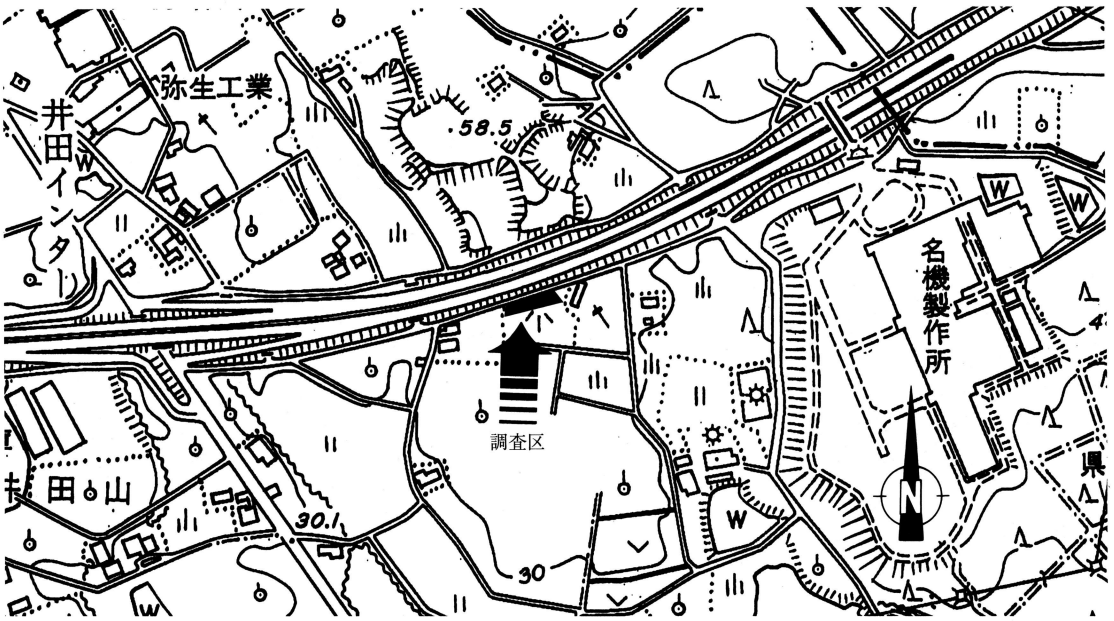
調査区全景

調査の経過　本調査区は、大府市北崎町福池地内に所在する。この起伏にとんだ丘陵地に、建設省・日本道路公団によって国道23号線側道拡幅工事が行われることとなった。この地は、猿投山西南麓古窯址群の鳴海地区有松支群にあたり、周辺に所在する遺跡には、古代から中世にかけての古窯が多い。そして、今回の拡幅予定地脇の斜面は、以前から、いわゆる「山茶椀」の破片が散布している場所として知られていた。したがって、この拡幅予定地には窯跡などが遺存している可能性が考えられたため、（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会の委託を受け、側道拡幅工事に先立つ事前調査として、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成10年１～２月まで行い、調査面積は600㎡である。

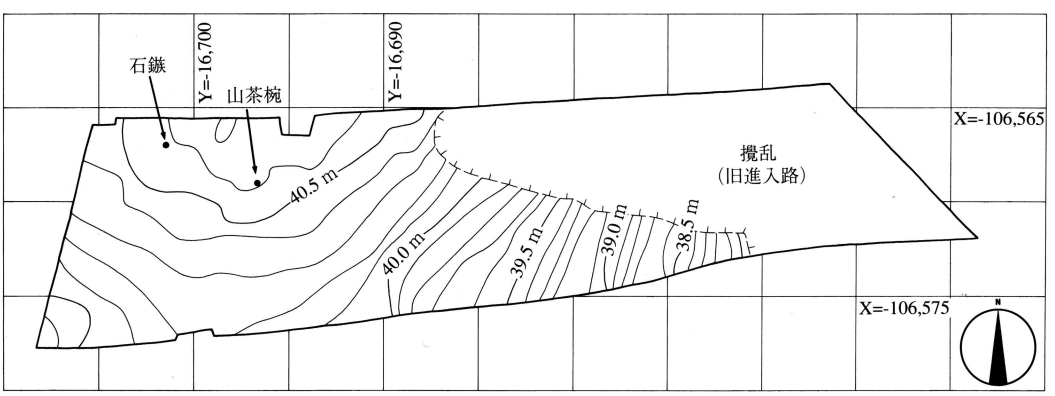
調査の概要　今回設定された調査区は、丘陵地中腹の南東向き斜面に位置している。調査区の基本層序は、表土の下に部分的に黒色土が客土として確認でき、さらに灰黄褐色極細粒砂が堆積し、基盤層は基質に粘土を含む円礫層及び、赤褐色粘土である。

調査区周辺は、以前は畑地として利用されていたこともあったようであるが、現在では竹林となっており、この竹林を伐採した後、機械及び人力によって抜根作業を行い、検出作業を開始した。調査予定地の東端は、隣接地から側道に合流する進入路となっているが、この西の平坦な段状部分は旧進入路が表土に覆われており、この部分の道路構造物を除去したところ、全面が基盤層であった。したがって、この旧進入路部分は、さらに低位に位置する現進入路も含めて撹乱と判断した。竹や笹の枝根は、基盤層直上まで検出面全体に広がり、検出作業を難航させた。この検出作業では、基盤層を露呈させるに至るまで人為的な掘り込みの痕跡は見つからなかった。調査区の壁断面を観察すると、基盤層が斜面状に続いて堆積していない部分があり、調査地点は何らかの理由で削平されていたと考えられる。

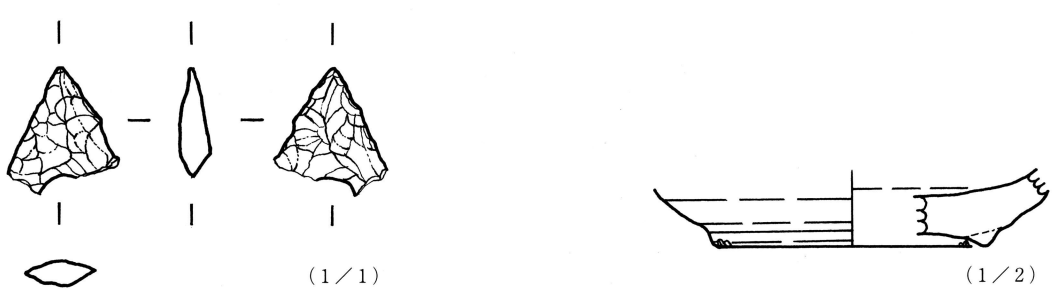
検出された遺物は、基盤層直上でチャート製の凹基無茎石鏃が１点と、竹根に絡む状態で、いわゆる「山茶椀」の高台に籾痕を有する底部破片が１点のみであった。（松田　訓）



第１図　調査区位置図（１：10000）



第２図　調査区全体図（１：400）



第３図　出土遺物実測図